

nkopr.ess.com
www.kinokopr.ess.com

続地球温暖化の果てに 第四部

冷えゆく列島

生野以久男

プロローグ

地球温暖化の果てに、大気システムの攪乱につづいて、海洋システムが攪乱した。さらに、地殻システムにも攪乱がおよんだ。これらのサブシステムは、当初、それぞれが個々別々に攪乱し出したが、やがて相互に影響し合い、さらなる攪乱を呼び、ついに地球システム全体を攪乱させてしまった。

大気圏における大気大循環で生じた乱れが海域にエルニーニョ現象やラニーニャ現象のような高水温域や低温域といった異常現象を呼び起こす。海域の異常現象がこんどは大気の流れに影響をおよぼす。

こんなふうにはサブシステム相互間で影響し合い、攪乱が攪乱を呼ぶのだ。大気システムに生じた攪乱は海洋大循環に異常を生じさせ、地圏に攪乱を呼び起こす。そしてこれらは、やがて地球システムの大攪乱を招くことになった。

地球システムの大攪乱によって、火山同時噴火が相次いだ。そうこうしているうちに、地球の自転軸が大きく揺らぎ出した。次第に、揺らぎ幅が増していく。このまま放置すれば、揺らぎはますます大きくなっていくにちがいない。

原因はグリーンランド氷床大滑落と北極海の海水消滅によって生じた重量バランスの急激な変化によると考えられた。

もしこのまま揺らぎ幅が増えつづけば、地球にどのような事態が生じるか。日本列島はどうなるか。

偏西風の蛇行が常態化し、天候は激変を繰り返すことになるのか。地上

を風速一〇〇メートルもの烈風狂風が吹き荒び、表土を吹き飛ばし、砂塵を巻き上げ、世界中に大量の砂塵をまき散らすことになるのか。また、熱波と寒波が交互に襲い、狂ったような土砂降りの大雨と激しい日照りが交互に絶えまなく襲うことになるのか。

もしかしたら、軸が大揺れし、ついに、地軸は際限なく揺れ出すことになるかもしれない。

対策はないのか。原因を取除くことができないのか。重量バランスの変化を改善する方法はないか。

海面急上昇が第二期（西南極大陸氷床の大崩壊）へ向かって進んでいた。

グリーンランド氷床大滑落による海面急上昇はまた、北大西洋にある深層海水生成の拠点を襲い、海洋大循環（熱塩大循環）を弱体化させていった。これにともない北極圏が次第に低温化し出すのか。これに対して、熱帯地域の高温水が南極圏へ流れ込み、南極海が急速に高温化し出しているのか。

南極海の高温化に加え、グリーンランド氷床の大滑落によって生じた海面の急上昇が南極大陸氷床に影響をおよぼしていた。海面下に基盤を持つ氷床にさらに大きな浮力が加わりはじめていたのだ。

ことに、西南極大陸氷床への影響が大きく、氷床を持ち上げ、氷床を基盤の岩盤から剥がしにかかっていたのだ。一部が基盤の岩盤から剥がれ、海に浸かっていた氷床の一部が浮き出していく。

海面急上昇で海水による浮力が急増したことによって、氷床の重みで沈下していた岩盤までが氷床もろとも浮き上がるのか。それとも、氷床だけが岩盤から剥がれるように浮上することになるのか。この点がひとつの重大な分かれ目だった。

海面上昇が第二期へ向かうのか。それとも、自転軸が別の動きをはじめ
るのか。

地球はつぎへの展開を窺い、密かに準備が整うのを待っていた。

第一章

1

「先生、自転軸の揺らぎは収まりそうにありません。揺らぎ幅が時間とともに増幅しているように見えますが……」

園部が研究室に入るなり、ソファでうとうととしている九鬼に大声を投げつける。

火山同時噴火が相次ぎ、地球全体に火山灰の傘を広げていた。そのうえ、地球の自転軸を揺るがせているのだった。

彼は薄目を開けて、園部を見た。紅潮させた童顔が間近に迫っている。園部の目は彼が眠っているのか忙しくチェックしていた。

「園部くん、どうしたかね。大声出していたようだが……」

彼は大きくのびをしてから姿勢を直し、急いで身を引く園部を真っ正面からじつと見据えた。

このところ、彼は農園の仕事をそっちのけにして、毎日のように研究室に顔を出していた。彼には気掛かりなことが二つあったのだ。

M新聞の佐藤記者と一緒に、アキラとヒロシを探して佐橋祐子の父の別荘を訪れたが、ふたりの姿はなかった。彼はひとりでふたりを追ったが、そのときは見付けることができなかった。

一端、身を寄せている農園に戻ったものの、仕事には手が付かず、毎日、実家跡を訪ねていた。彼はヒロシが自分を探していることを知り、実家跡に彼を訪ねてくるにちがいないと期待していたのだった。

実家跡は地震の被害に津波の被害が重なり、見る影もなかった。辛うじてコンクリート造りだった診療室の外壁が残っているだけだった。彼はそこに連絡先として農園の住所と大学の研究室の場所と電話番号を貼り出しておいたのだ。

何日経っても、連絡はなかった。訪れてきた形跡すらなかった。それになにかと電話してくる佐藤からの連絡がないことも、彼を落着かせなかった。

アキラとヒロシはどこへいたのか。元気でいるのだろうか。食べるものがあるのだろうか。

彼はヒロシの祖父である佐橋医師に二人からなにか連絡がなかったか、聞いてみたかった。

別荘から農園に戻ったとき、一度、クリニックへ電話したが、院長が不在で、伝言を残したきりだった。もう一度、佐橋に連絡を入れてみようかと思いついたが、なんとなく電話する気になれないでいた。

彼は農園で一仕事を終えてから出るので、研究室につくころにはいつも疲れ果て、ソファに横のなることが多かった。園部には彼が毎日をだらだらと過しているのしか見えならしい。

だが彼の脳裏には、アキラやヒロシのことと一緒に、いつも「地球の声なき声」がこびりついていて離れることがなかった。「地球の声なき声」で知らされた地球の未来に待ち構えている厳しい局面に、まだ若すぎる二人はどう立ち向かうだろうか。

彼は「地球の声なき声」を思い返し、地球がシステムの攪乱を鎮めるために起すであろうさまざまな超異常現象を思い浮かべた。それは人間活動の場である地球環境から人間を締め出すようなものであった。

彼は想像以上の苛酷な異常現象がたびたび襲う日本列島で、アキラとヒロシは生き抜くことができるだろうか、気が気でなかった。ふたりにはこれらを切り抜ける力があるだろうか、それとも切り抜けることができずに命を落とすことになるのか。

「先生、自転軸の揺らぎが大きくなっていくようですが……」

園部は氣勢を殺がれたのか、急に声を低めたものの、同じことを繰り返す。

「そうか」

彼は短く応え、あらぬほうに目を向ける。自転軸が揺れだすことは、彼には予測されていたことだった。問題はこのさきどうなるかということだった。だが彼は揺らぎが次第に大きくなるとは考えていなかった。もしこのまま揺らぎが次第に大きくなっていくとすれば、これまで考慮してこなかったことが要因となっているにちがいないのだ。

グリーンランド氷床の大滑落で海面が急上昇したものの、北極海に落ちた氷床塊が大小の冰山となって漂流しつづけながら融解していく。北極海には海水はすでになく、グリーンランドから分厚い氷床も消えてしまい、地球の重量バランスに変化が生じていたのだ。

「このまま、どこまでもいくのでしょうか……」

園部は細い声を出した。

「重量……」

変化した重量バランスが元に戻るまで揺れはつづくだろうと言おうとして、彼はふいになにか重要なことを忘れていたような気分に関われた。なぜそんな気分がしたのか分からなかった。だが突然これまで試みてきたシミュレーションになにかが不足しているような気がするのだ。

園部の自信なげな細い声の仕業か。彼はじつと園部を見る。

彼は海面急上昇が三回に分かれて起こると考えていた。まず、グリーンランド氷床の滑落による一〇メートル超の海面急上昇だ。つぎが西南極大陸の氷床によるもので、数メートルの海面急上昇が生ずることだろう。最後が南極大陸の残りの部分である東南極大陸大氷床の崩壊流出による海面超上昇だ。

彼はグリーンランド氷床滑落につづいて起こると予想される西南極大陸氷床が海洋へ流れ出せば、グリーンランド氷床消失による重量バランスの変化がある程度是正されると考えていたのだった。だがそれは単純すぎる短絡した考えだった。

西南極大陸の氷床はなかなか動かず、海洋へ流れ出ることもなかった。

これはひとつの誤算だった。だがそれ以上に問題なのは、彼自身、地球全体モデルまで構築してきたのに、地球に生起する現象を全体的に捉えようとしてきたことをいつのまにか忘れていたのだ。

「先生、重量バランスを回復させるような手立てが考えられるのですか」

「そう単純ではなさそうだ。西南極大陸の氷床が流れ出るまでにはまだまだ時間がかなりそうだ。なにか手がないかと……」

彼はもう一度徹底的に考え直さなければならぬと思った。なにをどう考え直すべきなのか、まだ全然見当さえついてなかったが、彼には考え直す必要があることはよく分かっていたのだ。

もう一度、ACARに戻ってシミュレーションをやり直すべきか。彼の脳裏に幼いときのアキラとヒロシが現れた。

彼の記憶のアキラとヒロシは幼いままだった。ACARで過した数年間にわたる時間が彼の記憶に空白の刻印を押してしまっているのだ。

「播らぎはますます大きくなっていくのでしょうか。それとも……」
園部の頭には播らぎのことしかないらしい。

「……………」

彼は自分自身そんな時期もあったことも忘れ、園部の童顔を眩しそうな目で嫉まじげにじつと見る。一瞬、彼はなにもかも忘れて研究へ戻りたいと思った。

彼はグリーンランド氷床滑落において海面上昇しか考えていなかったのだ。グリーンランド氷床の大滑落によって海面が急上昇するといったことの方に気を取られ、グリーンランド氷床喪失による大気への影響を忘れていたのだ。これが彼が気付いた研究の欠落部分のひとつだった。

彼がいままで考えていた海面上昇のシナリオはこうだった。

グリーンランド氷床滑落によって生じる大量の淡水によって北大西洋における深層水の生成が妨げられ、海洋システムにおける海洋大循環である熱塩大循環が弱体化していく。海洋熱塩大循環の弱体化によって、北上してきたメキシコ湾流（大暖流）は行場を失い、北極海に入り込むことになり、北極海一帯が急速に高温化するはずだ。これによって、海洋熱塩大循環の弱体化がますます進み、このためメキシコ湾流の北上も弱まり出し、やがて北極海の高温化も収まってしまう。

一方、これに対して、熱帯地方の高温化した大量の海水が南極海へ向う。これにともない、南極海の水温が急速に高まり出し、南極圏が高温化していくのだ。

こうして高温化し出した南極大陸で氷床の融解が進むが、一方、グリーンランド氷床滑落による海面急上昇によって嵩を増した海水の浮力が加わり、氷床基盤が海面下にある南極大陸の氷床が滑落しやすくなっていく。

ことに西南極大陸の氷床がその影響を受けやすく、やがて海洋へ流出しだす。

こうしてグリーンランド氷床滑落によって生じた重量バランス問題も西南極大陸の氷床が流れ出すことによってほぼ帳消しになるはずだ。といっても、西南極大陸の氷床はグリーンランド氷床ほどの重量はないので完全に平衡するものではなかったが、不足分は東南極大陸氷床の融解分で十分補われることだろう。

これが彼の描いたシナリオだった。

だが西南極大陸の氷床が流れ出すまえに地軸の揺れが次第に増していき、深刻化ししつあったのだ。

彼はグリーンランド氷床消失による大気システムへの影響が思った以上に大きいことによく気付いたのだ。

北極圏には極偏東風が吹き、中緯度の上空には強い偏西風が吹く。これがベルト状のジェット気流だ。ことに、偏西風が大きく蛇行すると、中緯度近辺の各地に熱波や寒波といった極端な異常気象をもたらす。

グリーンランド氷床は全島を覆う二〇〇〇メートルを超える氷の山だった。これが滑落すればどうなるか。

グリーンランド南部には三〇〇〇メートルを超す山も散在するが、北極に近いグリーンランド北部にはこのような高い山は見当たらない。となると、二〇〇〇メートルを超える氷床が突然消失すれば、偏東風や偏西風に大きな影響がおよぶことになるのではないか。それはまた、大気大循環全体にも影響がおよぶことになるにちがいない。高い屏風のようなグリーンランド氷床の突然の消失によって、一体、大気システムにどんな影響が生ずるのか。

彼はこのような大気システムの変化を完全に無視していた。自転や地軸

2

への影響は無視しうるほど小さいと考えていたのだった。

「先生、揺らぎが固定化してしまうということがあるのでしょうか」

「固定化？」

「揺らぎの振幅に応じて傾きも大きくなっていくとも言えますか……」

園部は自信なげに声を細める。

「それは二度シミュレーションをやってみないと確実なことは言えないが、自転軸の傾斜がさらに増し、以前より大きく傾くことになることもあるかもしれないが……」

彼は曖昧に口を濁しながら「自転軸の傾斜が大きくなることになるのか」と口のなかでもう一度呟く。

地球は自転しながら太陽の周りを約三六五日かけて一周する。これが公転だが、地球の自転軸は太陽に対して垂直ではない。地球の自転軸は二三・四度（赤道傾斜角度）傾いて公転しているのだ。

このため、日本列島には春夏秋冬といった季節が生じる。また、南極圏や北極圏では一年のうち太陽が沈まない日や太陽を見ることのない日が生じる。もし自転軸の傾きが二三・四度を超えてさらに大きくなれば、地球上にはそのような範囲がそれに応じて広がることになる。そして太陽をみないところは暗黒と酷寒の世界となる。

彼はアキラを思い浮かべた。自分が科学者であることを忘れ、そんなことにならないように祈りたかった。もしそのような事態が避けがたいものなら、ずっと先にしてほしいと思った。

「先生、アキラは……」

ヒロシは診察用ベッドに近寄り、横たわって点滴を受けているアキラに不安げな目を向ける。

「脱水症状を起こしている。朝、なにか食べたの。お腹空いているんじゃないのかな。ところで、きみたちはどこへ行くつもりだったの……」

白髪の混じった頭髪を短く刈り込んでいる初老の医師が優しい目をして、ヒロシをじつと見た。

「朝一番のバスで駅へ行くつもりでした……」

停留所の手前でアキラが倒れたところを、通りすがりの軽トラックに拾われ、農園の診療所に連れてこられたのだった。

ヒロシはアキラを連れて祖父の別荘に行き、しばらくそこで寝泊まりしていた。だがこれからどうすればいいのか分からなかった。

祖父がとっさの時のために用意していた缶詰類やコメに飲み物と調味料、それにチョコレートやキャンデーなどが残されていたが、それらもいちは尽きてしまう。いつまでも別荘に籠っているわけにもいかないことは薄々感じていた。

気が進まないが、アキラを連れて祖父のもとへ帰るほかないのか、と思った。だがアキラを連れていつていいのか、迷った。考えた末に、その日の朝、祖父を訪ねるまえに、もう一度大津波で流失したアキラの実家跡を訪ね、行方不明の両親の消息を尋ねて見ようと思ったのだった。

「そうだったの。この子がアキラくんか。アキラくんが回復するまでここにしばらく居てはどうかな。ヒロシくんも一緒に……」

ごま塩頭の医師はヒロシに笑顔を向けながら、受話器を取り上げた。

すぐ、若い男が姿を現した。軽トラックを運転していた男だった。

「森くん、空いている部屋はないかね。ヒロシくんとアキラくんだ」

「このふたりですか」

森はヒロシをじろりと見、ベッドのアキラに視線を移した。

「佐橋ヒロシです」

ヒロシは森に向かって頭を下げる。

「空き部屋はどうですか。事務所に聞いてみますが、ダメなら、先生、わたしに任せて下さい。わたしのところはまだ余裕がありますから」

「ああ、いいよ。頼むよ」

若い男はヒロシに笑顔を向け、診察室を出ていった。

医師はヒロシに廊下のベンチで待っているようにと言うと、机のカルテに目を落とす。

ヒロシは一度アキラが眠っているのを確かめると、言われるままに、廊下に出る。ベンチがひとつぼつんとあった。誰もいなかった。ヒロシはベンチの左端に腰を下ろす。そこから開放されているドア越しに診察室のなかが見える。

アキラは身動きひとつせずにベッドに横たわっている。

お腹がぐーと鳴った。朝からなにも食べていなかった。ヒロシは手洗いを探した。廊下の奥にそれらしい戸が見える。おそるおそる近寄り、戸を引いた。手洗いだった。

隅に洗面台があった。蛇口を捻ると水が出た。ヒロシは口を近づけ、水を飲んだ。冷たい水だった。

ベンチに戻ると、診察室には医師の姿がなかった。アキラは眠っている

のか身動きしない。

急に不安に襲われ、ヒロシは急いでアキラのそばに寄る。微かな寝息がした。

ヒロシはしばらくアキラの顔を覗いていたが、アキラに変化がないことを確かめると、ベンチに戻った。水を飲んだせいか、お腹も収まったようだった。

ヒロシは目を閉じた。木のベンチは黒光りする古びたものであったが、四人が十分かけられるほどの長さがあった。ベンチの大きさに比べると、ヒロシの身体はいかにも小さかった。中学一年生としては身長も低く、体も痩せて小さいほうなのだろうか。

ヒロシは祖父を思い浮かべた。今朝、ようやく、アキラの実家跡を訪ねる決心をして別荘を出たところだった。九鬼陽一郎に会うかもしれない。ヒロシは彼に会っても自分が佐橋ヒロシであることを名乗るべきかまだ迷っていたのだ。

ヒロシは九鬼陽一郎にまだ会いたくなかった。彼を訪ねて米国へ飛んだのも、母佐橋祐子が生きれているかもしれないと思ったからであった。だが彼も母もいなかった。

九鬼陽一郎に会うかもしれないと思うと、アキラの実家跡を訪ねる気持ちが悪えてしまう。かといって、このままアキラを連れていていいのか。ヒロシは迷いながら、アキラとともに過ごしていたのだ。

一度決心したものの、アキラが倒れてしまったいま、ヒロシのころはふたたび迷いのなかにあった。アキラの実家跡を訪ねるのは止そう。ここですばらく過ごすことにしようかと思った。

ヒロシは自分の経験から、アキラに祖母の死や両親の死を知らせること

を躊躇していたのだ。アキラを連れて実家跡を訪ねれば、否応なくアキラは三人の死を知ることになるだろう。そんなことをしていいのか。アキラが知りたいと思っただけで待たせてはいけないのか。ヒロシはアキラの実家跡を訪ねるのはもう一度考えてからしたいと思っただけだった。

ヒロシは医師の机の電話を見ながら、祖父に長い間連絡していないことを思い出し、一度電話しなければと思った。

3

「九鬼さん、ヒロシから連絡があったのですが……」

佐橋院長は暗い目を向けた。壁際に治療用の黒いレザー張りの細いベッドがあるだけのいかにも殺風景な狭い処置室だった。折り畳み式の椅子に腰を下ろした院長はやつれた顔に小太りだった体軀も見るとなく痩せ細り、苦しそうに肩ではあはあと息を吐いている。院長の身にながら起こったのか、昨秋、佐藤と訪ねたときの澆漉とした面影は嘘のようであった。

昨日、突然九鬼に院長から電話があった。待ちに待った電話だった。病気でずっと休んでいたが、漸くクリニックに出ることができたのだという。

「いつ、ヒロシくんから……」

彼は院長の顔をじつと見て、言葉を待った。だが院長は口を固く結んだまま、なかなか口を開こうとしない。

「実は……」

院長は目を細め、遠くを見ているふうだったが、しばらくして途切れ途切りにヒロシとの電話のやり取りを話し出した。

「おじいちゃん……」

佐橋院長は患者が途切れた診察の合間に、数日前突然クリニックを訪ねてきた九鬼を思い浮かべ、事故死した娘祐子を思い出していたときだった。呼び出しベルに手を伸ばした受話器の奥から、孫の声がした。

「あ、ヒロシかい。いまだどこにいるの」

一瞬、ヒロシが探していた九鬼陽一郎が訪ねてきたことを教えようかと思っただけで一息ついて呼吸を整えようとしていたところに、ヒロシの早口が耳に響く。

「帰ろうかと思っていたのに、急にダメになって……。ぼくは元氣だから心配しないで……」

「どうしたの」

「一緒にいる子が体調を崩して動けなくなってしまっただけ……」

「その子はアキラという子？」

「……………」

受話器の奥で、息を呑むような息遣いがした。

「その子を持って帰ってきなさい。その子を探しているひとがいる。いいね」

「いま、診療所のベッドに横になっっている。当分動けない」

「じゃ、ヒロシだけいい」

「うん、でもその子の両親は亡くなって、ひとり切りなんだ」

「だから……」

「ぼくと同じなんだよ。ひとりにはできない」

「で、どこにいるんですか、ふたりは……」

九鬼は院長の話を遮るように、勢い込んで口を挟む。

院長は肩で息を吐きながら、哀しそうな目を向けた。彼はたぐり寄せた糸がふつんと切れたような気がした。

「ヒロシはいまいるところがどこか分からない。住所はあとでまた連絡するから、と言っていたが……」

「電話が切れてしまったのですか。ヒロシくんがどこの電話からかけてきたのか調べられないのですか」

「公衆電話だったようで……」

院長の目が一瞬潤んだように見えた。彼は黙って、院長がふたたび口を開くのをじっと待った。

「実は……、今日お出でいただいたのは、わたしには残された時間が幾ばくもないので、ヒロシのことを是非お願いしておきたかったです。あのとき以来、ヒロシからいまだになんの連絡はありません。どうして連絡してこないのか分かりませんが、多分、ヒロシはアキラくんと離ればなれになりたくないのにちがひありません。だから、二度と連絡してこないのです。どうか、ヒロシの心情を理解して欲しいのです。母親を奪われたヒロシは、どうしてもアキラくんをひとりにする気になれないのです……」

「……………」

彼には院長の言うことがふに落ちなかった。

「わたしがアキラくんを探しているひとがいると口を滑らしてしまったので、ヒロシは一層用心しているのでしょう。ヒロシには幼いころから妙に鋭いところがあつて、多分、アキラくんを探しているひとが誰であるか分

かったのでしょうか。だから連れてくるようにと言ったのに、連れてこようとしません。妻が生きていてヒロシの相手になっていてくれたら、ヒロシも寂しい思いもせずにすんだかもしれない……」

あらぬ方に目を向け、掠れた低い声で途切れ途切れに呟くように話す。

「……………」

院長は時折目を潤ませる。白い壁に囲まれた殺伐とした殺風景な処置室のせい、か、病み上がりのやつれた顔が一層老けて見える。妻を失い、人生の終点に差しかかっている院長には孫のことが気がかりだが、どうすることもできないのだ。

彼は院長の切ない胸中を垣間見る思いがした。かといって、彼にもこの事態を打破する術はなかった。

彼はヒロシがアキラを連れて訪ねてくるにちがひないと思っていた。大地震あとの大津波で流失した実家跡に連絡先を書いた立て札を立て、訪ねてくるヒロシたちを待った。ほぼ毎日のように大学の研究室へ出掛け、その途中、実家跡を訪れ、連絡先を書いた立て札を覗いた。なにかヒロシの書き込みがないかをチェックするが、その都度、期待は裏切られた。

今日までヒロシが訪ねてきた形跡はなかったし、なんの連絡もなかったのだ。

院長から大学の研究室へ電話があつたとき、彼は当然ヒロシがアキラを連れて戻っているのだと思つた。ところがヒロシの居場所さえ分からないというではないか。やはり、ヒロシはアキラを手放したくないのか。彼はすっかり気落ちして口も開くこともできずにいた。

老院長はヒロシをよろしく頼むというがどうなのか、彼には見当もつかなかった。というより、いま直ぐ、ヒロシからアキラを強引に取り

返したかった。

ヒロシは佐橋祐子のひとり息子だ。彼女が事故死しなければ、彼は彼女と結婚していたかもしれない。彼女はどうか知らないが、彼は彼女と結婚してもいいと思っていた。だからといって、ヒロシの気持ちも考えずに、院長の申し出をそのまま引き受けるわけにいかなかった。

ヒロシは彼と会えば母親の死を受け入れざるをえなくなると思い、このことを恐れているのではあるまいか。かといって、アキラをひとりで彼のもとへ返すこともできずにいるのかもしれない。

目の前の院長は最後の頼みだという目付きで彼をじっと見ている。

彼はどうしていいか分からなかった。アキラはどんな気持ちでいるのだろうか。祖母の死も知らず、父母と生きていた弟夫婦の死も知らずにいるのか。それともうすうす彼らの死を感じているのだろうか。祖母も父母もいなくなり、自分が孤児となったことを感じ取っているのだろうか。そしてヒロシから離れたくないと思っているのか。そんなアキラをヒロシはどう思っているのだろうか。

ヒロシがアキラと離ればなれになりたくないと言っているのは、孤児となったアキラの身の上を知っていることか。

それとも、院長が言うように、ヒロシはアキラに実の父親がいると感じているのだろうか。だとすれば、なぜそれを伏せておくのだろうか。なぜ、アキラを連れて訪ねて来ようと思わないのか。

別に実の父親がいたと、突然知らせれば、アキラがどんなに混乱することになるか、それを恐れているのだろうか。

彼は複雑な思いに駆られ、迷う。院長は彼がアキラの実の父親であることを承知で、ヒロシのことを頼んでいるのだ。

彼がアキラに実の父親だと名乗り、アキラを引き取ることになれば、ヒロシはひとり取り残されてしまう。院長はこれが気がかりなのだ。院長としては、できればヒロシが天涯孤独の一人ぼっちとならないようにしたいと思っているにちがいない。

彼はアキラの実の父親であると名乗り出て、アキラと一緒にヒロシを引き取ることにやぶさかではなかった。むしろ、そうできれば一番いいときえ思う。

だがそのためにはヒロシの気持ちを知りたかった。ヒロシの気持ちを確かめたうえで、アキラを混乱に陥れないか十分気をつけなければならぬのだ。アキラに取り返しつかない混乱やこころの傷を与えるようなことはどうしても避けたかった。また、ヒロシに打撃を与えるようなこともできない。

院長は話し疲れたのか、目を閉じ、肩で大きく息をする。彼は院長のやつれた顔に目を据え、じっと堪えることしかできなかった。

4

「今年も凶作か。こう陽が弱くちゃ、日射量不足で作物が育たないよな」

一緒に農作業してる中年男が空を見上げて独り言のように呟く。大津波で家と家族を失ったという。

九鬼も草取りの手を休め、空を見上げた。

空には雲がないのに一面白く輝き、太陽が霞んで見える。途中で太陽光線が散乱しているのか日射が弱い。

「成層圏に広がった火山灰のせいだ」

「すると、世界全体がこんなふうなんだ」

「多分」

「いつまでつづくのかな」

「二、三年はつづくかも」

「日照不足でも育つ作物をつくらないと酷いことになるな」

ふたりは腰を屈め、ふたたび農作業をはじめた。

彼はアキラを探しているときに訪れた農園に寄宿していた。農園は山奥の集落跡にあった。かつては生き生きとした生活があったのに、いつの間にか人口の都市集中化によって過疎化が進み、さらに町村合併政策の煽りを受け、人口減少と行政機能低下により廃村に追い込まれて放置された集落跡はいくつもあった。農園によって廃屋寸前の古い家が再生され、役場や分教場が生き返った。すっかり荒れ果てた耕作放棄の田や畑が新しい農地となって甦った。

彼は大学に出ないときにはもっぱら農園の仕事に従事する。時折、農作業を手伝うこともあったが、農園内に設けられた小中学校の教師として子供たちに理科を教えることが多かった。

日本各地に点在する個々の農園は相互に連携して助け合うものの、個々の農園はそれぞれひとつのコミュニティを形成している。農園は食糧の自給自足を大原則とする。彼も農園の一員として参加する以上、農園の仕事を行う義務があった。

さまざまな環境災害が日本列島を立て続けに襲った。海面急上昇、巨大台風、巨大地震、大津波、火山同時噴火、地殻変動と相次いだ。被災を被った沿岸大都市の住民を中心に多くの人びとが住処を奪われ、職を失い、食

に事欠く難民と化した。その数は二〇〇〇万人にもおよんだ。

地球温暖化の果てに、日本の人口の半分が難民となったのだ。だがその多くはいまだに都会での生活を忘れることができず、職や食べものにあいつこうと都市部に居座り、動こうとしなかった。

都市部の環境や治安が日増しに悪化していった。一部の人びとは早々に見切りを付け、都市部を離れ、地方の農漁山村をめざした。そのなかの何割かの人びとが農園にやってきていた。

農園コミュニティは膨れ上がり、子供の数も日増しに増加していく。

彼は一人、二人と増えていく子供たちの顔を見ながら、アキラやヒロシと同じ年頃の少年を探し、ふたりのことを思った。そのたびに佐橋院長の話が思い出され、彼を苦しめた。

心待ちしている電話もなく、彼は毎日いらしながら過ごしていた。ヒロシがアキラを連れて、近いうちに祖父のもとに帰って来るだろうと期待していたが、なかなか来なかった。それだけに、日増しに失望が募っていたのだ。

彼はアキラを探し出し、両腕で力一杯抱き締めてやることしか考えていなかった。こうすることに彼はなにひとつ疑念を抱くことがなかった。彼にはこれは実の親がわが子に対する当然のことだった。

だが一方で、こう考える自分に不安を覚えていた。

実の父親とはいえ、数年の間、一度も顔を見せず、放置していたのだ。まだ一〇歳にも満たない少年の目の前に実の父だという男が突然現れたらどう思うか。

アキラには父母とと思っていた生死不明の弟夫婦がいたのだ。それにアキラはいまだに祖母の死も知らないにちがいない。こんな状態のアキラに実

の父だと名乗り出ればどうなるか。アキラはよろこぶだろうか。いや、よろこぶどころか、大いに戸惑い、大きなショックを受けるにちがいない。

彼は迷った。どうすればいいのか。

かといって、これはすべて彼自身が招いたことだった。自業自得だと思いつつ、彼はこの事態を回避できる方途がないか、いろいろ考えつづけた。

祖母が死に、実父母と思っている養父母が行方不明となって、ただひとり取り残されたアキラに実の父が見付かればほっとするのはないかと思ったりする。だが結局、アキラの気持ちが分からず、自分だけの独り相撲に終わってしまうのだった。

彼は歯をくいしばって、耐えた。だが毎日のように、子供たちと過ごし、屈託ない笑顔や楽しく遊ぶ様子を目にしているうちに、アキラたちもこんなふうに通じていると思ってしまうのか、なぜか次第に気持ちが和み、苛々した焦る気持ちが遠のいていくように感じた。

彼は何度もここを待ち直し、もうすぐヒロシがアキラを連れて戻らうと思う、じつと佐橋院長からの連絡を待った。

いまでもきつとヒロシが祖父のもとにアキラを連れて帰ってくるにちがいないと思っていた。だがこれは彼の希望的観測にすぎなかった。何度失望させられても、彼はこうするほかなかったのだ。

彼には待つほかなかった。いまの彼にできることは待つことだけだったのだ。

ただ、院長の健康が心配だった、あの日も、院長は話し疲れて眠り出してしまったのだった。

彼は院長にもしものことがある前に、ヒロシが祖父のもとに戻ってくれ

ることを祈りつづけた。

5

「先生、自転軸が傾き出しているようです。やはり……」

背後から声がした。振り返ると、童顔を紅潮させた園部が立っていた。

「きみか……」

九鬼は虚を衝かれた思いがして、驚きと不快さの入り交じった思いがした。近付いてくる園部に全然気付かなかったのだ。

彼は窓辺に佇み窓ガラス越しに遠くに見える幾重にも重なる山並に目を向け、アキラのことを考えていた。いや、アキラのことというより、自分のことを考えていたのだ。

彼は自転軸の揺らぎが次第に大きくなっていることが気がかりだった。なにか新しいことが起きているのか。

彼は地軸の揺れが思っていたより大きいことが気掛かりだった。それと海面急上昇の第二段階である西南極大陸の氷床滑落が考えていたより大幅に遅れているのだ。彼は地球システムに新たな動きが生じているような気がしてならなかった。一度ACARに戻り、地球モデルでシミュレーションをやり直してみたいと思った。

だがアキラを放っておいて、自分だけが米国へ行く気にはなれなかった。アキラを連れて行けたらいいのだが、アキラがどこにいるのか全然分からないのだ。手掛かりすらなかった。

それにヒロシのこともあった。アキラを連れていくとなると、ふたりは

離ればなれになる。このことをふたりが承知するか分からない。ヒロシが承知しても、アキラがどうか分からない。数年も会わなかったのに、父親だからといって突然現れた男に喜んで米国まで付いてきてくるだろうか。

かといって、これ以上アキラを放置しておくことはできない。彼はどうしていいか分からなかった。彼は考え倦ね、頭をむしりつづける。

「軸が傾きだしているようです……」

園部は切羽詰まった声を出した。

「……………」

彼はおもむろに窓辺を離れ、園部を一瞥すると、応接セットに近づく。

「先生、これが……」

園部はテーブルにデータシートを広げる。

よく見ると、揺れの振幅が僅かに片側に片寄ってきている。地軸が次第に傾き出しているのか。

「ジェット気流はどうかね。かなり蛇行している……」

「さあ……」

「あ、きみは地質が専門だったか」

彼は園部が地質や地盤構造を専門にしている地震メカニズムの研究者であることを思い出した。

地球上では中緯度付近のかなり上空を自転の方向に帯状に強い気流が吹いている。ジェット気流とも呼ばれる偏西風だ。通常はほぼ直線に吹くが、大きく蛇行することがある。蛇行するとほうぼうに異常気象をもたらす。ときには極端な高温や低温あるいは大雨や干害をもたらすのだ。

だが偏西風の蛇行がどのようなメカニズムで生じるのか分からなかった。これにはさまざまな要因が関与しているだろうが、もしかしたら、地軸の

揺れと関係があるかもしれない。彼は地軸の揺れがますます大きくなるとすれば、偏西風の蛇行が今後さらに頻発することになるにちがいないと思った。それに蛇行も大きくなるだろう。これに応じて、異常気象もさらに極端なものとなって世界各地を襲うことになるのか。日本列島は毎年これまで以上に極端な熱波と寒波に襲われるかもしれない。

だが異常気象よりも不気味なことは、もしかしたら、このまま、地軸が大きく傾きつづけるかもしれないことだった。

彼はふと、このまま、地軸が傾きつづけて回り出すことになるのではなにかと思つた。だが彼はそんなことはありえないと、激しく頭を振る。

地球温暖化は単なる地球の温暖化ですまなかつた。大気システムの攪乱から海洋システムの攪乱を招き、さらに、地殻システムの攪乱を呼び起こし、ついに、地球全体システムの大攪乱へと進んでいったのだ。

彼は地球全体システムの攪乱をピークにやがて地球システムの攪乱は収束へ向かうだろうと思つていた。もつとも、攪乱のピークとはどんなものか分かつていなかったが、それでも地球システムの範囲内の出来事と踏んでいた。

だがその考えは間違つていたのだ。地球温暖化は異常気象から天変地異の頻発といった地球システムレベルの現象で終わることはなかつたのだ。

彼はグリーンランド氷床の大滑落にはじまった海面急上昇につづき、南極大陸において氷床の滑落が起こると予想していた。ことに、西南極大陸氷床の海洋への流出は、条件が揃えば、間を置かずにはじまるものと考えた。だが海面急上昇の第二期と考えていた西南極大陸の氷床の滑落がなかなかはじまらなかった。そのせいで、地軸の揺らぎが発生していると思つていた。

彼はもう一度データシートを手を取った。それから、園部に目を向けた。「これまでこのようなことはなかったかね。このデータを見る限り、傾き出しているようにも見えるが……」

すでに、地球の地軸が傾き出しているのだろうか。もしこれが本当だとすれば、これまでの予測はすべて狂ってしまう。地軸の傾きは地球システム内の現象を超える別の現象であった。

とすれば、地球温暖化が地球システムの攪乱から地球システムを超えて影響をおよぼしているということか。地球温暖化の果てに生じた地球システムの攪乱によって、太陽系のシステムまでに影響がおよんでいるということか。

過去のデータを調べてみると出ていく園部の後姿を見送りながら、彼は地軸を回転させて自転しつづけ地球を思い描いた。

彼は慄然として、再度思考過程を振り返り、思いをめぐらしていた。

6

「あ、先生、漸く、掴まえることができましたよ」

受話器から佐藤のいつもの大声が響いた。M新聞の科学部記者だ。

「え？ なんだと……」

九鬼は思わず、声を張り上げる。

「実は……」

アキラとヒロシの居所が見つかったと言う。二人とも元気であるらしい。

「そうか……」

一瞬、鼓動が高まった。だが彼は院長の言葉を思い浮かべ、胸の高鳴りを抑える。

「どうかしたんですか。いまずぐ会いにいかないんですか……」

佐藤は彼の様子が変なのに気付いたらしい。

「会いたいが……」

「これからそっちへ行きますから、先生も研究室にいらしてください」

佐藤はすぐ飛び出したらしく、彼の返事を聞かずに、電話を切ってしまった。

受話器を返したものの、彼はしばらく電話器のそばにいた。さっき思い出された院長の言葉が頭のなかを駆け回る。

本当に、ヒロシはアキラと離ればなれになりたくないのだろうか。それが本当だとすれば、なぜそうなのか。彼は理解できなかった。

彼に会うために米国にあるACARまで訪ねてきたのに、すぐ近くにいろのが分かってても、ヒロシは彼を訪ねて来ようと思わないのだ。彼はふと、アキラと会ってからヒロシの様子が変わったのではないかと思った。だとすれば、なぜそうなったのか。

やはり、ヒロシは彼がアキラの実の父であることを感付いているのだ。

アキラの実の父である彼に会えば、アキラと別れなければならない。だから、ヒロシは彼に会おうとしないのだろう。

彼はまだ釈然としなかった。彼はヒロシをも引き取り、アキラと一緒に暮らしてもよいと思っていたのだ。それだけに、ヒロシが訪ねてこないのには別の訳があるような気がしてならなかった。

彼がすぐそばにいろことが分かって、彼に会い、母の死を知ることが急に怖くなったのかもしれない。

彼はあれこれ思いめぐらす、分からなかった。ヒロシのこころの奥に隠された思いはなんだろうか。もしそれが分からなければ、不用意にふたりと会うことができないような気がしていた。

7

「先生、この近くですよ」

佐藤は研究室に入ってくるなり、大声で言う。

「この近くにアキラがいるのか……」

彼は佐藤から目を反らし、力なく応える。

彼のこころはまだアキラに会うか決めかねていた。すぐにも会いたい気持ちを抑え、ヒロシとアキラの気持ちを考えていたのだった。

「山ひとつ向こうの山間部にある農園に二人連れの少年がいるというのだ。年齢好からして、その二人連れはアキラくんとヒロシくんだと思うんだ」

佐藤はほうぼうの農園を回っていた斉木を通して調べていたらしい。

「多分、そうだろうな」

「え？ 先生ご存知だったのですか。ひとが悪い……」

「いや……」

彼はしかめ面をしている佐藤をなだめるような口調で、佐橋院長が話していたことの一部始終を伝えた。そしてヒロシやアキラの気持ちを考えると、実の父だといま名乗り上げていいものか迷っていることを加えた。

「ふむ、そうですね。でも会ってみたいでしょう。取材で訪ねることにして、遠くからでも眺めますか」

佐藤は煮え切らない彼に押し付けるように語気を強める。

「見学できれば……」

彼は子供たち相手の授業を思い浮かべた。

「そのまえに、斉木に口止めしておかなければ……」

佐藤は携帯電話を取り出して、そそくさと研究室から廊下へ出ていった。

「先生、揺らぎから傾きへ変化していくデータは見付かりませんが、傾きの変化は度々起きています。ごく僅かで、そう大きな変化ではないですが……」

佐藤と入れ換えに、研究室に園部が入ってきた。

「ああ、そうですね」

彼はデータシートを受け取ると、そのままテーブルに置く。彼はアキラに会いに行くか、まだこころを決めかねていた。園部の声にも上の空だった。

「先生、地軸はさらに傾き出していくようですが……」

園部が繰り返す。

「え？ なんだって……」

彼はようやく園部が険しい目で自分をじっと見ているのに気付いた。

「斉木のやつめ……」と言いながら、佐藤が研究室に入ってきた。いつの間にか、自分が座っていたソファに園部がいるのに気づき、一瞬、戸惑い、立ち尽くしている。

「どうしたのかね、佐藤くん。こちらは園部くん、まえに一度会ったことがあると思うが……」

彼の声に誘われるように、佐藤は隣の椅子に滑り込む。

「実は……」

と言って、佐藤は彼と園部の顔を交互に見ている。黙ったままでいる佐藤に、彼は先を促すように視線を移す。

「斉木が話してしまったらしい……」

佐藤は彼の目を覗く。

「……………」

彼は佐藤の視線を避けるように、二人のやり取りを関心なさそうに見ている園部に目を移す。

「先生、傾きが……」

彼の視線を感じて、園部が口を開く。

「どの程度のスピードかね」

「ごく僅かですが、傾きはじめているように思います」

「揺らぎが大きくなれば、傾いたように見える……」

「そうかもしれないませんが、確かに、傾き出しています。角度が増している……」

「……………」

「揺らぎの範囲を超えているのですか」

「そのように思えます」

「そうか……」

彼は紅潮している園部の童顔をじつと見た。園部は自転軸が傾き出しているとすっかり確信しているらしい。

だがデータを見た限りでは、揺らぎが一方方向に大きく揺れているように見えるが、軸が傾き出しているといきれるがどうか判然としない。彼にもはじめてデータを見たときは一瞬そのように感じたが、これだけで自転軸が傾き出していると言えるか確信をもてずにいたのだった。

「なにが傾いているのですか、先生。地球の自転軸のことですか」

佐藤が口を挟む。手早く取材用のノートを取り出し、佐藤は交互に彼と園部に目を向ける。

「ダメだ。まだ書くなよ。園部くん、発表は慎重に観測データをチェックしてからだ。傾きの動きが継続しているかどうかだ。データの片寄りが一時的なら揺らぎの副作用みたいなものだ。誤差の範囲の動きは問題外だ。当分の間、まずデータを慎重に注視することだね」

佐藤はノートを引っ込めると、園部は幾分不服そうな目の色をしていたが、「もう少しデータのチェックをつづけますか」と言いながら、椅子から立ち上がった。

「先生、これから行ってみますか、アキラくんのいるところに。どうします？」

佐藤は園部の後姿を見て、すかさず話題を変える。

「斉木さんがなにか言ったといっていたが……」

彼はまだアキラに会いに行くか決めかねていた。斉木が事前に話しているとなると、園長がアキラにどう伝えているか気になる。

「ああ、それだ。園長に先生のことを話したというのだ。お喋りなヤツめ」

「なにをどう話したのか……」

「実の父がアキラくんを探していると……」

「それだけか」

「会いたがっているので……」

「え？ それじゃ……」

彼は思わず絶句する。

「斉木には、このことは二人には内密にしておいて欲しいと、園長に口止

めしておいてくれと伝えてはあるが……」

彼の様子を見て、佐藤は慌てて加える。

「……………」

彼は黙って、佐藤をじつと見据える。これではアキラの胸のうちを思い、あれこれ考えたことはすべて無駄になってしまったのではないか。アキラは実の父がいることを知ってどう思っているのか。ずっと養父母を実の親と思っていたにちがいないのに、突然別の男が実の父だといっても、俄に信じることはあるまい。それなのに対面するかしないかを決めるまえから実の父の来訪が告げられてはアキラはどう思うことだろうか。

佐藤は斉木に確かめると言って、椅子を立つ。

彼は迷った。実の父が訪ねて来ることをアキラやヒロシに伝えられてしまったのだろうか。もし伝えられているなら、彼の訪問をどう思うか、二人の気持ちを知らなかった。彼は自分がアキラの父親であることを忘れ、すっかり自信を失っていたのだった。

「斉木が掴まらない。会議中らしい」

佐藤が携帯電話を片手に戻ってきた。

「それを確かめてからでないと、訪ねることはできない」

彼は独り言のように、呟く。

8

「先生、軸が傾き出しているらしいとほうぼうで騒ぎ出していますが……」
園部が研究室に飛び込んで来て、一段と声を張り上げる。

「やはり騒ぎ出したか。だが……」

彼はまだ信じられなかった。いや、信じたくなかった。

軸が揺れ動くことは何度も経験していることだった。そのたびに極の位置が移動する。今回の大きな揺れもそれらと同じなのではないか。揺れが異常に大きくなって、傾きを変えるように見えても、やがて元に戻ることもあるのだ。

「各国の気象庁や研究機関で揺れの異常を観測しており、騒ぎが世界中に広がっている感じなのです」

園部の口振りは軸傾き発見の一番乗りができなかったことを口惜しがっているふうだった。

「この程度の揺れなら、ふたたび元に戻ることもあるかもしれない……」

こう言いながらも、彼はいやな予感がした。

このまま、本当に自転軸の二三・四度という赤道傾斜角度が二四度、二五度と大きくなってくのだろうか。このまま軸が傾き、傾斜を限りなく増していくことになるのだろうか。そして傾きはじめて軸自体が延々と動きだし、やがて回転をはじめることになるのだろうか。

もしこんなことになったら、地球上にどんなことが起こるか。彼は全身に戦慄が走るのを覚えた。

「すでに、〇・一度傾いたという報告もあります……」

園部がいつもと別に、しつこく迫る。

「え？ 数週間のうちに、そんなに傾いたとすると、そのスピードで一年では……。おいおい、軸が円運動をはじめたとでもいうのか……」

彼はあくまで軸の動きが揺らぎで、傾きを増す動きではないと思いたかった。

だがそうではないらしい。単なる揺らぎであつて欲しいという彼の思いは、全くの希望的観測にすぎなかった。自転軸はすでに傾き出し、傾斜を増しはじめていたのだ。

9

「実は、朝から子供たちの姿が見えないのです。同室の者に、祖父のもとへ行くといつていたらしいのですが……」

翌日、九鬼は佐藤に急ぎ立てられて、アキラたちがいるという農園を訪ねた。エントランスに近いロビーの椅子に腰を下ろしている二人の姿を見つけると、精悍な顔つきの園長は走り寄ってきて、腰を下ろしながら早口で告げたのだ。

やはり、すでにヒロシとアキラには彼が訪ねてくることは通じていたのだ。

一瞬、彼は全身から血の気が引くように感じた。かといって、今更、引き返すこともできなかった。

「どうしたのですか。斉木から……」

佐藤は慌てて園長に問い詰める。

「こんなことになるとは……。とにかく、同宿の者と呼んでいますから、もうすぐ来るでしょう」

園長は椅子から腰を浮かし、ガラス窓越しに奥に目を向け、しきりに目をこらす。だが深閑として近づく靴音すらしない。彼はじつと園長の横顔を見た。佐藤も園長に鋭い視線を注ぐ。園長は二人の視線に耐えかねたの

か、身を細め、頭を垂れる。

「二人は祖父のところへ行くと言っていたのですね」

彼は園長に確かめると、佐藤を促し、立ち上がる。

「斉木から口止めの電話をしてもらっているはずですがね、こうならぬように……」

佐藤は園長を睨む。

「佐藤くん、園長さんを困らせてはいけませんよ。佐橋クリニックへいってみよう。遅くなるとまた会えなくなるかもしれない」

彼はアキラたちが世話になったお礼を言つて外へ出た。佐藤がぶつぶつ言いながら、あとを追つてくる。

彼はふと、またこの農園にアキラたちが戻ってくるのではないかと思つた。だがこのころのどこかでもうふたりとは会えないかもしれないと感じ、農園の建物を振り返つた。

園長がエントランスの階段のところまで手を振っていた、

10

「先生、変ですわね」

佐橋クリニックは四階建ての小さなビルの二階にある。階段を上つたところにあるドアは閉ざされ、「臨時休業」の札がぶら下がっていた。ガラスの自動ドア越しになかを窺っていた佐藤が振り返る。

「どうしたのかな。もしかしたら……」

体調を崩していた院長の身に案じていたことが起きたのか。

「なにか心当たりでもあるんですか」

「このまえお会いした時、体調がすぐれないと、本人が口を濁しておられたが……」

「じゃ……」

一言声を発すると、佐藤は彼の横をすり抜け、階段を下りていく。彼はもう一度ガラス扉越しになかを覗いてから、階段を下りた。

佐藤はエントランスホールの奥にある管理人室の窓口のまえで小柄な初老の男と話をしていた。

「市立病院に入院しているらしい。行ってみますか。ここにはヒロシくんのような子は訪ねてこないといっていたが……」

佐藤は近づく彼に早口で告げると、ドアへ向かって歩き出す。彼は黙ったまま後を追う、二人は外へ出た。

晴れていた空がいつのまにかどんよりと曇り、空一面が雲に覆われている。彼は佐藤に従い、駐車場に停めてあった車に乗った。

車は繁華街を通り抜け、郊外へ向かう。

一体、アキラたちはどこへいったのか。祖父が入院中と知って病院へ行ったのか。ではヒロシは祖父が入院していることをどうやって知ったのか。もしかしたら、二人はここに来ていないのではないか。

彼は車窓越しに移り行く風景をぼんやりと見ていた。向こうに病院らしい白い建物が見えてきた。

車はロータリーを回って、玄関前に停った。

「面会できるか一寸聞いてきますから、先生はこのなかで待っていて下さい」

佐藤はドアを力一杯閉めると、エントランスへ向かって走り出した。

院長の具合はどうだろうか。あのとき、余命幾ばくとかと自分で言っていたようだが、本当に悪いのか。祖父の元へ行くといつて農園を出たヒロシはこのことを知っているのだろうか。それとも彼の訪問を知って、彼の対面を避けるために、それを口実に農園から抜け出したのか。それにしても、ヒロシはアキラをどこへ連れていこうとしているのだろうか。

しきりにアキラのことが頭を過る。彼はエントランスのほうにときどき目をやりながら、あれこれとアキラのことを思う。

「面会はダメだった。ICU（集中治療室）に入っているらしい。身内の方が聞かれたが、身内の者だけが面会できるらしい。ヒロシくんのような年格好の子も見かけないといっていた。やはり、ふたりはここには来なかったんだ」

佐藤は戻って来ると、車の運転席に腰を下ろしながら口早に言う。

「どうして分かる……」

「ヒロシくんが九鬼陽一郎が現れると聞いて農園を出たんだったら、ここには来ない。祖父にはいつでも会えるんだから」

「祖父の元へ行くと言ったといっていたが……」

「でもここにはいなかった。来た形跡もない」

「じゃ、どこへ……」

「あてもなく遠くへ行ったのかもしれない。九鬼陽一郎から逃れるためなら、できるだけここから遠く離れたところへ行くだろう。だが……」

「だが、なんだ」

「院長が言うように、ヒロシくんがアキラくんと離ればなれになりたくないのなら、遠くへ行くまえに、多分、アキラくんの実家跡と市役所を訪ねるだろう。大津波で行方不明になったアキラの両親の安否を再確認するた

めだ」

「どうして、そんなことが分かる……」

彼は目を丸くし佐藤をじつと見る。新聞記者の勘か。

「佐橋院長の話では、ヒロシくんはアキラくんと離ればなれになりたくなく、いらしいということだった。ここから遠く離れたところへ行くには、そのままにアキラくんに両親が亡くなったことを知らせて踏ん切りをつけた方がいいと思うだろうから。いつまでも中途半端じゃ、アキラくんがいつ両親探しを言い出すか分からない。そうなるとややこしいことになる。ということはヒロシくんが誰よりもよく分かっているはずだ」

佐藤はヒロシがいつまで経っても母の死を認めることができずにいることを指して言っているらしい。

「うむ……」

「彼らはもう近くの農園に顔を出すことはないだろう。追っ手から逃れて、可能な限り遠くへ行くだろう」

佐藤は断定的に言い切った。

「ふう、どうしてヒロシくんが……」

彼は大きなため息を吐き、天を仰ぐ。

「最後の手段として、ふたりの捜索を警察に頼みますかね」

「警察？ どうして警察なんだ」

「ヒロシくんの行為は立派に略取誘拐に該当する。一〇歳にも満たない子供を引きずり回しているんだから。訴えれば、警察も黙っていないはずだ」

「ヒロシくんはアキラを助けたんだぞ。それがなぜ誘拐犯になるんだ」

「ヒロシくんはアキラくんを手放したくないんですよ。それでいいんですか」

「ヒロシくんも引き取って、一緒に暮らしてもいいんだがなあ……」

彼は遠くを見た。アキラ、どこにいるんだ。

「じゃ、どうしてもつかまえないくちや、ふたりが遠くへ行く前に。いますぐ、実家跡へ急行しますか」

佐藤は彼の返事を待たず、すぐ車を発進させた。

第二章

11

「どこへ行くの、お兄ちゃん」

「アキラちゃんのお家のあったところへ行ってみよう。お父さんやお母さんのことをもう一度よく調べておこうね。それと……」

「おばあちゃんもだよ」

アキラはヒロシの顔を見上げた。ヒロシはつないでいたアキラの手を強く握る。アキラも小さな手に力を入れて握りかえしてきた。

ヒロシは迷っていた。九鬼陽一郎が訪ねてくると聞いて思わず農園を飛び出したが、アキラまで連れて来てしまったことがよかったことか分からなかった。かといって、アキラをひとり残すこともできなかった。だがアキラは誘いもしないのにヒロシについて来て離れようとしなかった。

アキラと一緒にでは行く当てがなかった。ひとりで放浪するか、久しぶりに祖父のもとに帰るか、どちらかのつもりであったが、どちらとも決めかねていた。ただ、なんとなく九鬼陽一郎と顔を合わせたくなかっただけだった。会って何を話せばいいか分からなかった。母のことを詳しく知りたかったが、いままではなにも知りたくなかった。

ヒロシはアメリカまで飛んで九鬼陽一郎がいるACARを訪ねたときのことを思い浮かべた。あのときまで、ヒロシにはどこかのどこかに母が生きているという思いがあった。そして熱に浮かされたように、母探しに熱中していったのだった。ヒロシを可愛がってくれた祖母の死に遭い、まず

まず母探しに熱が入った。

母と手をつないで幼稚園から帰ってきたとき、マンシヨンのエントランスでひとりの男が待っていた。はじめてそのとき会った男が九鬼陽一郎だった。

ヒロシは九鬼陽一郎のことを思い出し、もしかしたら母と一緒にいるかもしれないと思ったのだった。だが母はいなかった。

帰りの飛行機の中で、ヒロシはひとりきりになってしまったことをひしひしと感じた。母はもういないのだ。

幼稚園の行き帰りに手をつないでくれた母の暖かく柔らかい手を感じ、母の面影を思い浮かぶが、その母ともう会うことができないのだ。

「アキラちゃん。おばあちゃんは今もう見つからないかもしれない。それにお父さんやお母さんも……」

ヒロシは九鬼陽一郎がアキラの実の父らしいことを感じていた。いや、実の父にちがいないと思っていたのだ。祖父との電話でも、また、九鬼陽一郎が農園を訪ねてくると聞いたときにも、そのような思いが強かった。実の父がいるなら、アキラに本当のことを知らせてもいいのではないかと思つた。それでもなかなか言い出せずにいたのだった。

「おばあちゃんはどこかにいる。どこかにいるよね、お兄ちゃん」
「うん……」

「きつと、ぼくが探してみせる」

アキラはきつと口を閉じ、ヒロシを見上げる。ヒロシは黙って、歩き出す。

ヒロシはふと、アキラに九鬼陽一郎のことを話してみようかと思つた。アキラに実の父がおれば、早く返してしまいたかった。だが祖母や父母が

生きていると信じているアキラに三人の死をどう話していいのかわからなかった。迷っているうちに、アキラがますますヒロシを頼りだし、離れようとしないうと。かといって、こんな状態をいつまでも続けるわけにいかなかった。ヒロシはアキラの実家跡を訪ね、市役所で大津波の行方不明者名簿を見せてもらい、アキラに本当のことを話そうとようやく決心したのだった。

「アキラちゃんね。実は……」

ヒロシは言い淀む。いざとなると、言葉が出ない。

「うん、なあに……」

アキラは立ち止まる。だがヒロシはアキラの手を引いて歩きつづける。

「この辺じゃなかったけ……」

ヒロシは一瞬迷ったかと思った。

アキラの実家跡の目印だったコンクリート造りの九鬼医院の残骸はすっかり片付けられ、付近一帯は整地されて一面に更地が広がっている。そばを流れていた小川の土盛りの堤防は改修されてコンクリートに変わっていた。

ヒロシとアキラは跡地と思しきところを探して歩く。立て看板があった。

中央に「公園予定地」と大きな字体で書いてある。その下に、問い合わせ先と電話番号があった。

「これから市役所へ行くか。お家がどうなったのか聞いてみなくちゃ。アキラちゃん、疲れた？ タクシーにしようか」

ヒロシはアキラを引いて歩いているうちに、市役所へ行くのがだんだん億劫になっていった。だが看板の問い合わせ先をみて、やはり市役所へいかなければならないのかと思ひ直す。タクシーを拾おうと思ひ、辺りを見回す。

ヒロシは母の銀行カードを持っており、コンビニのATMから引き出したばかりで金はあった。だがタクシーは一台も通らない。ふたりはバス停まで戻るほかなかった。

バスを乗り継いでようやく市役所に辿り着いた時には五時を過ぎていた。ヒロシはアキラを促し、エントランスへ通じるコンクリートのスロープを上っていく。

自動扉に近づくと、扉が開いた。

ふたりはエントランスホールに入った。カウンターの窓口はすでに閉じてあった。ヒロシは掲示板を探した。まえに来たとき、大津波行方不明者名簿がそこに貼り出されていたのを思い出したのだ。

大きな掲示板には「公園予定地」関連の書面が貼り出されていた。地権者への通知書があった。だが大津波行方不明者名簿はなかった。

「きみたち、なにか用事があるのかね。そろそろ閉める時間だけ……」

中年の用務員が近づいてきた。

「行方不明者の名簿はどこにあるんですか。まえはここに掲示されていましたが……」

ヒロシはすでに時間外なので、無理なことは分かっていた。だが、あいまに比べると、かえって怪しまれて追い出されてしまうかもしれない。

担当者でなくともはつきり用件を告げたはおうがよいと思つた。

「ああ、大津波のときのね。きょうはもう終わったしな……。ところで、きみたち、どこから来たの」

「まえは市内に住んでいたけど、いまはN市に……」

「一寸待って、係りのひとがまだいるか聞いてみるから」

用務員がカウンターのなかに入ってしまった。すぐ戻ってきて、担当者は

帰ってしまったと言う。

ヒロシは黙って、用務員に頭を下げた。そしてアキラの手をとって、エントランスを出た。

12

「先生、どうかなさったのですか……」

「あ、きみか……」

振り返ると、園部の童顔が間近に迫っていた。九鬼は思いに耽っていたのか、園部が近付いてきたことに全然気付かなかった。

彼は研究室の窓辺に佇み、ぼんやりと目を窓の外へ向けていた。前方には市街が広がり、遠い彼方に山脈が走る。だが彼はなにも見ていなかった。

彼の頭のなかには小さいときのアキラの面影が矢継ぎ早に浮かんで消える。佐藤と一緒に、アキラたちのあとを追ったが、とうとう掴まえることができなかった。

「何度呼んでも返事がなかったのです……」

園部が怪訝な目を向ける。

「なんでもない……。ところで、自転軸はどうかね。まだへんな動きはつづいているの。そう簡単に自転軸が傾いていくとは思えないが……」

彼は一瞬、園部にこのころのうちを読まれたかと思った。それを隠すように、彼は自分が感じていることと正反対のことを言う。

「そうですね。そうであればいいのですが……」

園部の顔に一瞬笑みが浮かんだ。

「おかしいか」

「いいえ、自転軸の傾きを変わるにはかなりのインパクトがなければならぬと考えられていますから、大きな揺らぎにすぎないのかもしれない。でも傾き出しているようなのです。なぜですか。地球に対して、なにか、目に見えない巨大なインパクトが作用しているのはいけいでしょうか」

園部はさも不思議そうな目をして、彼の目を覗き込む。

「確かに、自転軸の傾きの変化には巨大なインパクトが関与する必要があると考えられているが、もしかしたら、それに限らないのかもしれない」

彼はいろいろな仮説を考える。小さなインパクトでも長期に継続すれば、共振して大きなインパクトに匹敵する作用をおよぼすことになるのか。

ことに、重力作用の均衡のうえに形成されているシステムにおいては意外な力が意外な作用をおよぼすことになるのではないか。

太陽系では地球などの惑星（水星、金星、火星、木星、土星、天王星、海王星、冥王星）は自転しながら、それぞれある周期をもって太陽の周りを回っている（公転）。惑星の公転軌道はそれぞれの惑星によって軌道半径や軌道傾斜角度が異なる。軌道半径は太陽に一番近い水星から順次大きくなるが、軌道傾斜角度は各惑星まちまちである。それでも大半の惑星の軌道傾斜角度は数度の範囲におさまっているが、一番外を回る冥王星だけが著しく異なり、飛び抜けて大きい（二七・二度）。

各惑星はそれぞれ自転しながらこのような軌道で太陽の周りを回っているが、各惑星の太陽の赤道面に対する自転軸の傾斜角度すなわち赤道傾斜角度はまちまちだ。

水星だけが太陽にほぼ真正面を向いて自転しているが、他の惑星の自転軸は傾いており、各惑星の太陽の赤道に対する自転軸の傾き角度はさまざま

まである（赤道傾斜角度）。たとえば、水星は〇・一度以内、金星は一七八度（自転は逆回り）、地球は二三・四度だ。天王星は九七・九度傾斜しており、これは公転軌道面にほぼ平行である。

自転周期もさまざまで、地球は一日だが、水星は五八・六五日、天王星は〇・七二六日である。公転周期は地球が約一年（三六五・二六日）であるのに対して、天王星は約八三・七四七年もかけて太陽の周りを一周する。

地球は自転軸を二三・四度傾斜させたまま、約一年（三六五・二六日）かけて太陽の周りを回っている。これに対して、天王星の自転軸は九七・九度傾斜したまま、約八四年かけて一周する。自転軸が九七・九度も傾斜していると、一周するうちに、赤道はもちろん、北極や南極を太陽に向けてることになる。

自転軸が極端に傾斜角度が大きいのは、金星の一七八度と天王星の九七・九度だ。金星は自転が逆転しているが、見た目の傾斜は他の惑星ほどではない。異常なのは、天王星の横倒しになった自転軸だ。

天王星の横倒し自転軸の原因は、形成直後の天王星に小惑星が衝突したのではないかと考えられている。惑星の自転軸が横倒しになるほどの傾きには、小惑星の衝突のような超巨大な衝撃（ジャイアント・インパクト）がなければ生じないというのが最近の有力な考え方だ。

この説が正しいとすれば、いま地球において進行中と見られる自転軸の傾きもほどなく収束する可能性があることになる。というより、傾きの変化とみられていたことが単なる揺らぎかもしれないのだ。小惑星の衝突のような巨大なインパクトはこのところなかったからだ。

もし自転軸の揺らぎでなく、確実に傾きの変化だとしたら、自転軸傾斜にはこのほかに別の原因があることになるのだ。

「地球における自転軸の角度変化の原因には太陽や惑星や月からの外力のほかに、どんなものが考えられますかね。地球システムの変動も影響を与えるものですか」

「もちろんだよ。今回の自転軸の傾き騒ぎの発端となった揺らぎの発生はグリーンランド水床の大滑落が端緒であり、誘因といっていいだろう」

「すると、自転軸の傾斜角度変化が現在進行中であると考えられることも、あながち間違いともいえないということですか。とすれば、先生、最悪にケースを考えて、すでに自転軸の傾きの変動がはじまっているとすべきではありませんか。そして早急に対策を訴えるべきではありませんか」

以前なら、真先にそう言って対策を迫るのが彼だった。だが彼は口を閉じたまま、しばらくじつと園部の顔を見た。いつの間に、豹変したのか。

彼は以前の彼でなかった。いつのまにか、すっかり変わっていた。アキラのことでところを奪われてしまったのだろうか。彼は自分に対してすっかり自信を失っていた。彼は自信を失った自分を憐れむように、これまでの研究を振り返った。そうすることによって新たな自分を取り戻したかった。

産業革命以後、大気中の二酸化炭素（炭酸ガス）濃度が急速に増加していった。あまりにも急激な増加に脅威と興味を感じ、彼は地球温暖化による気候変動の研究をはじめたのだ。そして二酸化炭素（炭酸ガス）の急激な増加から生じる気候変動も急激に起こるにちがいないと考え、急激に進むタイプの気候変動に焦点を合わせて研究をしてきたのだ。

二酸化炭素などの温室効果ガスの増加による地球温暖化は、思った以上に複雑だった。それは単なる地上の気温上昇にともなう気候変動にとどまらなかったのだ。

彼がシミュレーションに用いる予測モデルは年々複雑になっていった。大気圏（大気システム）に海洋圏（海洋システム）を組み合わせたモデルに、さらに、地圏（地殻システム）をも取り込んでいき、ついに、全体的な地球システムモデルを構築し、地球全体のシミュレーションを通して種々の予測をおこなうまでになった。

気温の変化からはじまった気候変動は大気大循環を変え、海洋大循環を変えた。大気システムは攪乱し、海洋システムも攪乱を起こした。さらに、地殻やマントルなどが変動し、地球システムが攪乱していった。この攪乱を通して生じた地球システムにおける重量再配置や運動によって、いま、自転軸において新たな傾きが生じているのだ。

だがこれは彼が妻子を忘れ、なにかとりつかれたように熱中して進めてきた研究を超えるものだった。妊娠中の妻亜耶子をほったらかし、ひとり息子アキラを放置して、研究に没頭してきた彼がようやく「地球の声なき声」を聞いたと思ったのだった。それなのに、地球システムは彼を置き去りにしてさきへ進んでしまっているのだ。

彼はもう一度、地球温暖化の果てに、これまで日本列島を襲った数々の自然災害を振り返る。

日本列島を熱水塊が襲い、熱波に焦熱地獄と化した。超巨大台風が襲い、大雨が襲い、大洪水が襲った。日本列島の地殻構造が変調をきたし、微震動を繰り返す、首都圏が沈下しだす。やがて首都圏（関東平野）が日本列島（本州）から切り離され、日本海溝へ滑り落ちていく。大津波が日本列島の太平洋岸を襲う。これらの異常気象を遥かに超えた異常気象が相次ぎ、これにつづき、グリーンランド氷床が滑落し、海面急上昇を招く。日本列島の海岸は一〇メートルにもおよぶ海面急上昇に襲われ、ゼロメートル地

帯はもちろん、沿岸低地が水没する。

痩せ細った日本列島は海面急上昇に耐えかねるように揺れ出す。日本列島各地で火山が噴火し、つづいて巨大地震が発生する。日本列島に地殻変動が襲い、日本列島を四分五裂してしまう。そしてこれに止めを刺すように、自転軸が傾き出したというのか。

「ついに自転軸か」

彼は自分に言い聞かせるように言った。

13

日本列島はこの一〇年にも満たない歲月のうちに、見る影もないほどの大変貌を遂げてしまった。

日本列島は主要四島、すなわち本州、四国、九州、北海道と数多くの小さな島からなりたっていたが、地球温暖化の果てに、日本列島を襲った海面急上昇と同時に噴火に巨大地震をともしなう地殻変動によって、かつての面影が失せてしまっていた。

最初の打撃は海面急上昇だった。この一〇メートルを超える海面急上昇は、首都圏が広がる関東平野がもぎ取られて海中深く没したあとに襲ったのだ。

本州中央部の関東平野がもぎ取られ、大きく変形を余儀なくされた日本列島は、海面急上昇で列島全域にわたる沿岸各地で陸地が深く侵食された。連続する二つの出来事で、日本列島は原形をとどめないまでに痩せ細ってしまった。

つづいて、日本列島を第二の打撃が襲う。各地で同時噴火と巨大地震が相次ぎ、地殻変動つづく。これによって、痩せ細った日本列島はさらに大変貌を遂げる。すでに関東平野はなく、中央を横断するフォッサマグナが

陥没して分断され、本州は完全に二分されてしまう。四国、九州も中央構造線を境に亀裂が走り、分断された。北海道では石狩平野が水没し、太平洋へ亀裂が走り、伊達湾へ通じた。さらに、沿岸部が奥地まで侵食されて、かつての面影はなかった。これに加え、日本列島周辺の大小の島のいくつかは海中へ完全に没していった。

その間、これらの天変地異の合間を縫うように、日本列島を酷暑、小雨（干害）、日照不足、大雨、巨大台風など、異常気象が相次いで襲いつづけた。また、巨大地震等による大津波が日本各地の沿岸を襲い、琵琶湖、諏訪湖、その他の大小の天然湖やダム湖の決壊による鉄砲水、土石流、大洪水が発生した。

これらの災害によって、日本では大量の犠牲者が出た。一億二〇〇〇万人の人口も災害のたびに激減していき、瞬く間に半減してしまった。

日本の領土の七割が山地で、大半が森林地帯であり、可住地は残りの三割の平野や沿岸低地だったが、これらの大半が海面急上昇で海中へ没してしまった。今回の相次ぐ災害で、日本は一挙にして、人口の大半が集中していた人口稠密な人間活動地帯を殆ど喪失し、日本列島から生産や消費の拠点が消え失せてしまった。ここに住みつき、生活していた人びとは、運よく生き残ったとしても、住処を奪われ、職と食を失い、環境難民となつて彷徨うほかなかった。

これは日本だけではなかった。

突然の海面急上昇は世界各地で沿岸部の人口稠密な大都市を襲い、壊滅

させた。河口に広がる肥沃なデルタ地帯をひと呑みし、河川を遡上する海水は氾濫し、河川の両側に広がる平野や低地を水のなかに呑み込んでいった。

また、南米、北米大陸の西側を抜け、アリューシャン諸島からカムチャツカ半島、日本列島を経て、南下して南極大陸へ、または東南アジアから中東トルコへと、地球を一周する火山地帯で噴火や地震が頻発した。地殻変動が世界を襲った。

噴火によって生じた天空を覆う火山灰の傘は日射を遮り、地球温暖化の日傘となったが、地上の農作物には日照不足で甚大な被害をおよぼしつづけた。海面急上昇によって世界各地で肥沃な農耕地が喪失してただけに、これによって、さらに世界の食糧事情は悪化していき、世界中に環境難民が溢れていった。

環境難民は食を求めて、世界を彷徨う。

主要四島が四分五裂してしまった日本列島にも近隣諸国から難民を満載した小舟が近付くが、上陸することは難しかった。海面急上昇で海岸には砂浜がなく、近付くことさえ容易でなかった。たとえ上陸できたとしても、食べものごとく欠く日本から外へ出ていきたい環境難民が海岸をすでに占領していた。

また、日本政府は不法入国者には以前から厳しかった。かといって、不法入国監視のパトロールが十分なされていないとは言い難かった。周囲が海に囲まれているので、かえって無防備だった。というより、政府も、そして行政も、相次ぐ大災害をまともに手が回らなかったのだ。

中央政府は相次ぐ大規模災害の対応に追われ、大量に発生した被災者に対する救済策を実施するまでにいたらず、また、被災市町村は災害の後片

付けが精一杯で、被災者は右往左往するばかりだった。後片付けの進まないまま、被災地では被災者は食べものも不十分で、次第に不満を募らせていく。

海面急上昇で環境難民化した大量の被災者が水没した沿岸都市から内陸部の都市へ向かう。大量の難民の流入によって、静穏な中小地方都市は一変する。人気がなく寂れていた繁華街には闇市や屋台が並び、活気を取り戻した。だが街は汚らしく汚れ、騒々しくなった。浮浪者やホームレスが溢れた。暴力行為やかっ払いが横行し、社会に不穏な空気が充満していった。

食糧の輸入が途絶えているうえ、道路や鉄道がいたるところで寸断しており、米やイモなどに限らず、さまざまな日用品なども慢性的に品不足気味であった。流通圏も近郊地域単位の小規模なもので、これらの品々がどこでも手に入るというものではなかった。ところによってはヤミ取り引きが公然と行われた。

中央政府は食糧不足を見越して、米や麦などの主要穀物の配給制を実施したが、国土が分断され、交通網も寸断されて物資移動のままならない状況では全国的な統制はムリで、地方に任せるほかなかった。地方は地方で、末端の市町村に任せていた。

そのため、各地まちまちな状況で、酷いところでは、統制は名ばかりで、ヤミ取り引きや横流しがおっぴらに行なわれた。一方、山間部や過疎地帯などで、農作物をつくったり、酪農などで食糧の自給を計る人びともいた。なかでも、自給自足を旨とする農園グループの活動が目立った。

このグループの活動は白頭大人が唱えた農園思想を基礎とする運動で、山漁村の廃村跡や山間部の限界集落を拠点に耕作放棄農地などを再活用し

て農園をつくり、食糧はもちろん、エネルギーなどの生活必需品を自給自足する自立生活集団だった。個々の農園は独立採算性で経営するが、これはひとつのネットワークで結ばれ、全国各地の農園は相互に連帯して協力関係にあった。

農園は開放的な組織で、誰でも参加できた。行く先のない環境難民も農園を訪れ、数多くが活動に参加していた。また、この農園思想は現代文明に代わる新しい文明を目指すものとみられ、世界に広く浸透しつつあった。

14

「キミ、なんとかスパコンを使えないかね」

九鬼は研究室に入ってきた園部の童顔に目を向ける。

「はあ……」

園部は目を丸くし、彼を見つめている。これまで彼の方から声をかけることは滅多になかったのだ。

「シミュレーションをやってみたいのだよ」

彼はここで本格的なシミュレーションができるとは思ってなかった。シミュレーションのためのモデルはないし、シミュレーション用のデータセットさえない。それを承知で、彼は極めて大雑把にでも自転軸傾斜変動の予測シミュレーションをして、将来の変動傾向を掴みたかったのだ。いや、それさえ無理かもしれない。それでもなんとかして、どのような力が働けば自転軸の傾斜に変化が生じるかを確かめたかった。現在、地球システムに攪乱をもたらしているもろもろの変動がどの程度の力なのか。これらが

継続して作用すれば自転軸へどのような影響をおよぼすのか。

「シミュレーション……ですか」

「自転軸の傾きがどう変化していくか。それがいつまでつづくのか。これらを推測するデータが欲しいのだ」

「ここにはシミュレーションのためのデータもありませんし、モデルも……」

園部は窺うような目で彼を見ていたが、途中で口を閉ざす。こんなことは言うまでもなく、彼は全部承知のうえで言っていることに気付いたらしい。

「研究費もないだろうから、長時間計算することはできないだろうな。全体のシミュレーションはいずれやるとして、いま知りたいことは自転軸を傾かせているもろもろの要因とそれぞれの力が今後どう変わるかだ。要因相互間で相乗して力を増していくのか、それとも相殺されて力が次第に減退していくのか。そしてそのスピードはどうか、加速していくのか、それとも減速していくのかといったことだ」

自転軸などの変動は地球の外からの力、たとえば太陽や月や他の惑星などからの力のほかに、地球内部における重量配置の変化や地球システムの攪乱によっても引き起こされると考えられるのだ。彼が心配しているのは、地球温暖化の果てに生じたグリーンランド氷床の大滑落による消失と、大気循環、海洋大循環、地殻マントルの変動といった地球システムの攪乱による地球システム自体に対する相乗的な影響だった。

グリーンランド氷床の急激な消失による自転軸の揺らぎは予測できた。だが彼はこの揺らぎは一時的なもので、つづく第二期の海面急上昇である西南極大陸氷床滑落で揺らぎも収束すると考えていたのだった。

自転軸の揺らぎが傾きの変化をもたらすことになるとは、彼にとって予想外だったのだ。さらに驚いたことに、傾きの変化が一時的なものではなく、継続して変化するらしいということだ。

このととを早く確かめたかった。そのために、地球温暖化の果てに生じた地球システムの攪乱が自転軸傾斜にどの程度かわわっているのか、そしてそれがどの程度の力で作用しているのかを知りたかったのだ。

もし自転軸が回転し出したらと思うと、彼は目のまえが真っ暗になった。これが「地球の声なき声」だったのか。彼はもう一度「地球の声なき声」を思い出す。

彼が気候変動の研究をはじめて以来ターゲットにしてきたことは、じわじわと進む「緩やかな気候変動」タイプではなく、突然気温が急上昇する「急激な気候変動」タイプだった。産業革命以来、人間活動を通して二酸化炭素（炭酸ガス）が大量に放出され、ごく短期間に大気中濃度が急激に増加してきた。これによって気候変動が生じるならば、それは「急激な気候変動」タイプにちがいないと直感したからだった。

「急激な気候変動」タイプはグリーンランド氷床のアイスコア分析によって発見された（アレー、ベンダーら）。一〇万年前から二万年前までの八万年間に二〇回以上繰り返されていたという。

このタイプでは一〇年から数一〇年の短い間に地球の気温が急上昇する。ピークに達すると、数一〇〇年から数一〇〇〇年かけてゆっくり寒冷化していき、最後にスピードをあげて急速に寒冷化して元に戻るといったパターンをたどるといふのだ。

地球の気温上昇はすでにピークの状態にあると彼は思っていた。そして地球はいままさに寒冷化への舵を切ろうとしているのだ。いや、地球はず

でに舵を切ってしまったかもしれない。

彼は西南極大陸氷床の大滑落がその時期だと考えていた。だがそれは間違いかもされない。自転軸の傾きの発生という予期しない出来事に、彼は混乱し、迷っていた。

彼は園部の童顔に目を据える。いままで気付かなかったが、かつての瑞々しく艶やかだった顔面もやつれ、憔悴しきっている。

「実は、この研究センターが閉鎖されることになるかもしれませんが。なにしろ……」

園部は言い淀む。彼はこころのなかで「やはり、無理か」呟く。

相次ぐ大災害で日本列島は四分五裂し、人口が半減してしまった。そんななかでは大学付属の研究センターはおろか、大学本体すら存続が危ぶまれている状況だった。いや、日本国さえ「風前の灯火」のような状況にあったのだ。

アキラとヒロシはかろうじて生きていらしいものの、日本列島には日々の食べ物にも事欠く人びとが溢れ、社会不安が渦巻いた。そんななかで右往左往している人びとには、自転軸の傾斜がどう変わろうとどうでもよかったことにちがいない。

彼は一日も早くACARに戻って、彼が構築した地球モデルでシミュレーションをやりたいかった。そうすればこれらのことについてもいろいろな知見がえられることは分かっていた。そうすれば、今後の地球の状態について知ることできるにちがいない。だがまだ会えずにいるアキラのことが気がかりで決断できずにいた。

15

「先生、アキラくんたちはすぐそばにいるらしいですよ」

聞き慣れた声が出た。目を上げると、佐藤が執務机に近付いてきた。研究センターが閉鎖されるらしいと聞いて、飛んできたのだという。

彼は机から離れ、応接セットに移る。そしていつものように、ソファの中央に少し太りだした短軀をちょこんと乗せている佐藤に目を向ける。

「で……、どこに……」

「近くの農園らしい。ここも閉鎖になるという噂を耳にしたんですが、本当ですか。先生は……」

「ふむ、一度、きみと相談しようと思っていたんだが、一端、ACARに戻ろうかと思う。ちよつと、検討してみたいことがあるのでね」

「え？ アキラくんはどうするんですか。連れていかれるつもりなんですか」

アキラを連れていければ一番いい。だがアキラの気持ちに分からないのだ。これまで何度も機会があったのに、ヒロシは彼を訪ねてこようとしな。彼にはヒロシが彼を避けているように思える。なぜか。それとも、ヒロシは彼にアキラを会わせないほうがいいと思っているのだろうか。

「できればそうしたいが、長年ほつたらかしくしていたのに、突然、本当の父親が現れては戸惑いが強いのではないかね。弟夫婦を實の親と信じていたアキラにはショックが大きすぎるかもしれない……」

「それじゃ、ここまま放置した状態をつづけるつもりですか。ショックが大きいからといって、それでいいのですか」

佐藤の目に不信の色が浮かんでいる。

「今度はすぐ戻るつもりだ。それまでの間に、アキラの気持ちも落ち着いてくるだろう。いまはまだ祖母や弟夫婦を死んだとは思わずに、アキラは三人を探し続けているだろうから。幸い、ヒロシくんと一緒にだし、しばらくふたりを静かに見守っていたほうがいいのではないだろうかね」

「アメリカで見守っているわけですか」

佐藤は皮肉ぼつく言い、口を歪める。

「……………」

彼は黙って、じつと佐藤の目を見た。目から火が噴いて彼のところに迫る。

ひとり息子のアキラをひとり残していくことにどんな弁解を言っても理解されることはないだろう。まして可愛がつてくれた祖母と実の親と理えている弟夫婦を一度に失ったアキラを一人残したままアメリカへ立とうというのか。これではアキラを捨てていくようなものではないか。世情が騒然としているこんなときに、小学一年生の子をひとり放置していくことはまともな親の考えることではない。研究が大事だからといって、子を捨てるような親を誰も許すはずがない。

「ACARへ行くんですか。こんな時期に、一体、なにをしに出かけようというんですか。ACARでなにをしようというのですか」

長い沈黙のあと、佐藤が幾分怒気を含んだ口調でぼつりと言う。

「いま、どうしても試しておきたいことがある……………」

彼はこれまで考えていたことを話そうか迷う。どんなことも弁解じみて聞こえてしまうだろう。

「なにですか」

佐藤の目が光っている。

「まえに話した『地球の声なき声』だが、それがようやく姿を現したのだよ」

「なんですって……………」

「自転軸が傾斜し出したのだ」

「二三・四度傾斜している地球の自転軸がさらに傾斜するのですか。」

でも一度や二度傾斜が増しても……………」

「それでも大きな問題だろう」

「本当ですか。三〇度、四〇度にも傾斜するならともかく……………」

「自転軸の傾きが変わると、地球にどういうことが起こるか詳しく調べて対策を考えなければ大変なことになる」

「これまでのこととは異なるのですか」

「傾斜が増していくと、やがて日本列島は水に覆われることになる」

「本当ですか……………」

「傾斜が何度で止まるかわからないが、自転軸の傾きの変化だけで終わらないだろう。さらに、さまざまなことが……………」

「地球システムがさらに攪乱するとか、ですか」

「そうなるかもしれないのだ」

彼はグリーンランド氷床で採取したアイスコアの分析から発見された「急激な気候変動」の変動パターンを思い返す。

発端は、急激な気温上昇だ。そして短期間で急速に地球が温暖化していく。ピークに達すると、やがてゆっくり寒冷化が進行して、最終的に、急速に寒冷化して終わるのだ。

彼はこれになぞらえ、いま進行している地球温暖化もこのような経緯をたどるものと考えていた。

グリーンランド氷床の大滑落で、北大西洋で生成される海洋大循環システムである三次元熱塩大循環のエンジン役を担う深層水の生成が阻害され、地球温暖化（「急激な気候変動」）も一段落し、やがて「緩慢な寒冷化の過程」に入っていくだろう。

ところが、自転軸の傾き変動という予期せぬ事態が発生したのだ。

彼は地球温暖化の果てに生じた予期せぬ自転軸変動現象が、地球システムに対してさらに新たな攪乱を呼び起こすのではないかとおそれていたのだ。

「自転軸の傾斜角度が一、二度以上に増すと思われているのですか」

「多分……」

「で、一体、何度になるといいますか」

「それが分からない。いま傾斜し出しているが、どこで止まるか、それともどこまでも傾斜しつづけて回転をはじめなのか、それが分からない」

「まさか。回転するなんて……」

「それは分からない」

「いま進行中なのですか」

「いまはごく僅かずつ進んでいるが、それが今後加速するのか、それとも次第に緩慢になるのか、ここではデータもないし、全然見当がつかない。これらのことを早急に調べておきたいのだ」

「……………」

「グリーンランド氷床の崩落で自転軸が揺れ出したが、まさか軸が傾き出すとは思わなかった。というより、西南極大陸の氷床の崩落で揺れが小さくなってやがて収まると踏んでいたが、西南極大陸の氷床崩落が予想より遅れている。未だに、これがいつになるか分からない状況なんだ」

「軸の傾斜がつづく……」

「そうだ。軸が回転することになるかもしれない」

「こんなことかすぐ起こりうることなのですか。数一〇〇年とか、数一〇〇〇年、あるいはまだまだ長いスパンの話なのではないんですか」

「そうかもしれないし、そうでないかもしれない。軸を動かしているのはグリーンランド氷床全崩壊によるものだけではないらしいのだ……」

それはなにか。彼が早急に突き止めたいと思っていることだった。

グリーンランド氷床の大滑落によって地球内における重量配置に変化が生じたが、これが自転軸揺らぎの端緒となったものの、この揺らぎを増幅させ、軸の傾きを変える作用をおよぼしたのは別の複数の要因の働きと考えられる。そしてこれらの要因の相互作用を解き明かすことができれば、佐藤の問いに全部答えることができるのだ。

「もしかしたら、明日にでも自転軸が大きく傾斜しはじめるかもしれないということですか」

「いや、もうはじまっているかもしれない。極めてのろい動きかもしれないがね。最初はなんでも動きは遅い。遅い動きに惑わされて、本当のポテンシャルに気付かないうちに手後れになってしまうのだ」

大の大人が力一杯押ししても動かない大きな釣り鐘でも、共振現象を利用すれば、子供の指一本でも動き出し、大きく揺らすことができるのだ。

今日の地球温暖化もいわば手後れが招いたものだった。人間活動による二酸化炭素（炭酸ガス）の大量放出が端緒だったが、これに対して、経済界や産業界はいつまでもこれだけで地球温暖化をもたらすとは認めようとしなかった。それに開発途上国（新興国）と先進国間にも温度差があつて、世界各国は一致して対策を講じようとなかなかしなかったのだ。

確かに、人間活動による二酸化炭素（炭酸ガス）だけなら、地球温暖化が急速に進まなかったかもしれない。人間活動にともなう二酸化炭素（炭酸ガス）の大量放出によって大気中濃度が急上昇して気温上昇を招く。これによって海水温が上昇し、大量の水蒸気が発生し、大気中に充満する。

ところが、水蒸気には二酸化炭素（炭酸ガス）と同様に、太陽エネルギーを捕らえて放さない温室効果があるのだ。これとともに、海水中に溶解していた二酸化炭素（炭酸ガス）は大気へ飛び出す。二酸化炭素（炭酸ガス）だけでは足りない。メタンなど二酸化炭素（炭酸ガス）の何一〇倍も温室効果のあるガスが土壌や湿地帯がら吹き出す。

このようなもろもろの現象が連鎖し、互いに増幅させ（相互の相乗作用）、互いに加速させて（要因間の正のフィードバック）、地球温暖化を進めていったのだった。

「地球温暖化においてはさまざまな要因が正のフィードバックとなつて追いつけ合い、増幅し合つて、急激な気候変動を招いたということですが、それと同じことが自転軸の傾斜でも起こる可能性があるというのですか」

「その可能性がないとも言えないのだ。これに新たな要因が加わっているかもしれない。だから、早く調べてみたいのだ」

彼はじつと佐藤を見た。

もし、自転軸傾斜の動きに作用する力の相互間に正のフィードバックが働くとなれば、傾斜変化の度が強まり、スピードも加速することになるだろう。それに共振のような現象がともなえば、その結果、一体どのようなことが起こるのか。そのときは日本列島はどうなるのか。世界は、そして地球はどうなるか。

「今日明日の問題ではないでしょう、それは。アキラくんをほつたらかし

ておいていいのですか。アキラくんと会って身の安全を確かめてからにしてはどうですか」

「できればそうしたいが、ACARからはすぐ帰ってくる。アキラと会うのは帰ってからの方がいいと思ってる」

「それまでしようとするのはなぜですか。自転軸の傾斜がどう進もうと、止める手立てがない以上、仕方がないのじゃないですか。いままでもみなそうでした。それなのに、こんな時期に、路傍に迷っているひとり息子を放置するようにしてまでそうするのはなぜですか。どんな理由はあるのですか」

佐藤は目を尖らして攻めてくる。

「確かに、自転軸の傾斜を止めることはできないだろう。でも一日も早くどのような状況になるのか予測できれば、自転軸傾斜の進行によって生じる被害を軽減することができるだろう。気候変動、そして地球温暖化の予測に携わってきた者にとって、的確に異常気象や地球の異常事象を予測して社会に対して警告を発することは、研究者としてのいわば社会的使命と云うべきものだよ」

彼自身忸怩たる思いがあった。これまで何度同じようなことをやってきたことか。だがその都度、裏切られて独り相撲に終わった。今度もそうなるかもしれない。

「社会的使命か……」

佐藤は呟く。

「いや、社会的使命というより、これはわれわれの世代の社会的責務というべきかもしれない。地球環境を台無しにしたのがこの一〇〇年間現代文明を最大限謳歌したわれわれ世代なんだから、われわれに社会的責任があ

るのだ」

佐藤は恥じ入るように、上目遣いで彼を見ている。

「大言壮語かもしれないが、少しは先が見えてきた。このたびは、できれば、アキラたちの未来の世代のためにもこれからの地球の未来シナリオを描いておきたいと思っっている。地球の行く末を完全に明らかにできるとはいえないが、この際、かなりのところまでは是非突き詰めて、未来の世代への遺言として残しておきたいのだよ」

「遺言……」

佐藤は目を大きく見開きじつと彼を見た。その目は一瞬憂いを含んで見えたが、かすみで曇っているようでもあった。

「まあね、大袈裟かな」

「遺言はいいから、早く戻ってきて下さい。遺言はそれからです。いいですね。先生がACARにいつている間、アキラさんとヒロシくんはぼくが見守っておりますから、用事を早く済ませて、一日も早く帰ってきて下さい」

彼は佐藤の真摯な眼差しに言葉が出ず、ただ大きく頷くだけだった。

16

「おじいちゃんが亡くなった……」

受話器を置くと、ヒロシは呟く。

「亡くなったって……」

アキラはヒロシを見上げる。

「死んだということ」

ヒロシの声が響く。農園のメイン事務所となっている旧小学校の体育館には人影がなく、深閑と静まり返っていた。入口近くの一角がロビーとなっていて、電話ボックスはその片隅にある。

ヒロシはボックスから出て、歩き出した。肩を落とし、俯き加減で歩くヒロシのあとをアキラがついていく。

「死んだひとにはもう会えないんだよね。ねえ、お兄ちゃん」

ヒロシと同じように、幾分俯き加減で歩いていたアキラが後ろから声をかける。

「うん……」

ヒロシは生返事をしたまま、歩きつづける。「院長が亡くなりましたので、只今、休業中です」という若い女の声の案内が耳の奥で木霊する。祖父のもとに帰ることを漸く決心し、そのことを告げようと、祖父のクリニックへ電話したのだった。

ヒロシはもつと早く電話すべきだったと悔いた。

母が死に、祖母が死んで、今度は祖父が死んでしまった。ヒロシの周りの近い身寄りがすべて亡くなったのだ。ヒロシはひとりになってしまった。

ヒロシはいつでも会えると思っていた祖父が亡くなり、ただひとり残された自分をひしひしと感じた。祖父とはもう会うことができないうのだ。

「ねえ、お兄ちゃん、ぼくのおばあちゃんやお父さんやお母さんも死んだのかな」

アキラが走りよって、黙りこくっているヒロシの顔を下から覗く。

「え？ どうして……」

ヒロシが目を大きく見開き、アキラをじつと見た。アキラは三人が亡く

なったことを知っているのだろうか。

「だって、いつまで待っていても迎えに来てくれないもの」

ヒロシは祖母を探しに行きたがるアキラにもうすぐ迎えに来るから待っていようと言っていたのだ。

「……………」

「死んだひとには死ねば会えるのかな」

アキラがぼつんと言う。

「え？ まさか……………」

ヒロシは即座に否定したものの、母の面影を思い浮かべ、こころのなかで会えたらいいのと思っていた。アキラはなにを感じたのか、しきりにヒロシの顔を覗く。

ヒロシはアキラの手をとり、強く握りしめ、まえへ歩んでいく。

17

「温暖化のピークは過ぎたというのですね。もう地球では寒冷化がはじまっているというのですか」

ソファの背に回していた腕を戻し、佐藤が急に真顔になった。

「いま、温暖化は寒冷化への転換点にあるようだ。北大西洋に発する海洋熱塩大循環システムがグリーンランド氷床大滑落によって機能不全の状態に陥ってしまった。これが寒冷化を呼び引き金になる可能性がある」

「どうしてですか。それがたとえ海洋循環システムが機能不全に陥っても、大気中の二酸化炭素（炭酸ガス）など温室効果ガスの濃度には変わらない

なんじゃないんですか」

「そうね。そのメカニズムは必ずしも明らかではないけど、さまざまな要因がからまって寒冷化へ向かうことになるのだ。わたしはこんなふうに考えているが……………」

彼はじつと佐藤の顔を見る。

海洋熱塩大循環システムは北大西洋から深海に潜り込み、南極海を経て北太平洋で浮上し、北米大陸をかすめ、オーストラリア北海岸を抜け、インド洋からアフリカ大陸を回って北上し、出発点に戻る。これは海洋における最大級の三次元熱運搬システムである。

このシステムが支障をきたすと、北大西洋へ大量に流れ込んでいる大暖流が滞り、西ヨーロッパや北極圏一帯の気温が低下し、寒冷化していく。一方、地球上における熱再配分も滞りがちになり、地球上の熱エネルギー分布に極度な不均衡が生じる。となると、ますます大気が不安定になり、低気圧が方々で頻繁に発生する。

各地に大雨が降る。気温が低下した地帯では雪氷となる。広範囲にわたる積雪によって太陽光線の反射量が増し、地球での太陽エネルギー吸収量が減少する。また、海水温が低下した海域では、海水への二酸化炭素（炭酸ガス）などの溶解が増す。

「随分ややこしいのですね」

「これはほんの主だったところだけで、すべてを網羅しているわけではない。とにかく、海洋熱塩大循環システムの機能不全がひとつの引き金となって、地球温暖化から地球寒冷化への転換がはじまるらしい」

最近ではこんなことがあった。最近といっても、約一万二〇〇〇年前のことだが、巨大な湖が決壊して大量の真水が北大西洋へ流れ込んだという。

そのとき、突然気温が下がり出し、かなり長い間地球の平均気温が五度近く低くなった。これが「ヤンガードライアイス事件」であるが、北大西洋への大量の真水流入によって熱塩大循環のための深層水生成が阻害されたのが原因だといわれているのだ。

「これで温暖化した地球がゆっくり冷えていくことになるのですね」

「うん……」

「暑くなりすぎた地球がじよじよに冷え出すとしたら、これはこれでハッピーなこと、シミュレーションをやるまでもないんじゃないですか。それでもわざわざACARへいって検討する必要があるんですか」

佐藤には彼がアキラを置いてきぼりにすることが気になって仕方がないらしい。

「ゆっくり寒冷化していくといっても、地球全体が一律に軒並み気温が低くなっていくとは限らない。地球上の平均気温が下がっていくというにすぎない」

地球上の平均気温とは、各地のさまざまな気温を平均したものであって、各地の気温がすべて下がっているということではない。非常に高温のところもあれば、酷寒のところもある。実は、むしろ、ゆっくり寒冷化していく過程にこそ、極端な強風や大雨などの超異常気象の頻発など重大な問題を含んでいるのだ。

「温暖化した地球が徐々に寒冷化していくといえば、酷暑の夏が穏やかな夏に向かっていくというイメージだがなあ」

「そんなものじゃない。日替わりで暑かったり寒かったりする極端に不順な気候がつづくことだろう。異常気象が以前よりさらに極端になって、いわば超異常現象となって現れるはずだ。地球上の熱分布が著しく不均衡な

状態にあるんだからね。夏でも雪が降るところがあるだろうし、冬でも三〇度を超す日があるかもしれない。とにかく、地球上の気温変動の振幅が極端になるにちがいない。それに、連日のように、強風、烈風、疾風あるいは突風や竜巻が吹くことになる。海洋の熱運搬システムが機能不全に陥れば、大気がその役目を代替することになるからだ。ことに、冬期には北半球の高緯度から中緯度にかけて乾燥した冷たい烈風が吹き荒ぶだろう。そして季節風の時期には砂風の帯が北半球の高緯度、中緯度を取り巻くことになるにちがいない。とにかく、海洋の熱運搬システムの機能を大気側で補うとなれば大変だ。それに、海域における熱分布の不均衡で大気が著しく不安定化し、竜巻、突風、強風、暴風、大雨といった超異常気象が各地を襲うことだろう……」

「ゆっくりした寒冷化過程は超異常な激しい気候変動の時期でもあるということですか。そのうえ、自転軸の傾きが増すと……」

佐藤は歯止めを失ったように話しつつづける彼を遮るように、ソファから身を起こし、身体をまえに乗り出し、口を挟む。

「そうだ。自転軸の傾きが増せば、それに応じて、さまざまな変化が生じる。まず、各地の日射量が変化するし、大気の流れや海流が影響を受け、変化するだろう。潮汐も影響を浮ける。地殻やマントルにも影響がおよぶ。もしかしたら、想像が絶する事態が生ずるかもしれない。ゆっくり寒冷化する過程は激動の時期となる可能性があるのだ」

「そのとき、日本列島はどうなるのですか」

「日本列島は超異常気象の通り道になるかもしれない」

「そんな……」

「自転軸の傾きがどこまで進むかだ。その度合いによって、日本列島の状

況にはかなりの違いが出るだろう」

「で、この一、二年は大丈夫なんでしょね」

「多分……」

「アキラくんたちが大きくなるまでは……」

「……………」

「そんな簡単に自転軸が大きく傾くなんて……、信じられない」

「まあ、今日明日ということはないだろう。だが、一〇年、二〇年になると分からない。いや、そのかなり前に大きく変わることもあるかもしれない。とにかく、その辺のところを一刻も早く確かめておきたいのだ。四分五裂してしまった満身創痍の日本列島になにが起こるか分からないからだ」

彼はこう言ったとき、口を閉じてしまった。

18

「これから農園へ行くつもりですが……」

佐藤はソファから立ち上がり、背を向けた。

彼は黙って、佐藤の後姿を見送る。佐藤がドアから出ていくまで、彼は一緒に出掛けようかと思つた。だが彼は椅子から立ち上がるうとしなかつた。身体が深く椅子に落ち込み、動くことができなかつたのだ。

彼は佐藤が出ていったドアの方に目を向けたまま、じつとしていた。

幼いときのアキラの面影が目の前にしきりに去来する。彼は立ち上がった、佐藤を追い掛けたかった。だが身体が椅子に吸い付いて動くことができなかつた。

なぜ、アキラに会いに行こうとしないのか。アキラに会いたくないのか。それとも……、彼は自分に問いたです。何度も自問自答を繰り返した。だがなかなかまえへ進まない。

彼は恐かった。自分のこころのなかを見るのが恐かった。彼は大きくなったアキラと会うことが恐かった。

アキラはもうすぐ小学二年生になるはずだった。生まれてからすでに八年近い歳月が過ぎていく。だが、彼にとつて、アキラと一緒に過ごした時間は極めて短く、空白の期間があまりにも長かった。

アキラとともに過ごした日々は、生まれて間もない保育器のなかのアキラとはじめて対面してから、故郷の母のもとで退院したばかりのアキラと過ごした数カ月、大学へ戻るために母を伴ってアキラと上京し、マンション暮らした数カ月の、合わせて一年足らずに過ぎなかつた。東京までついてきた母は、都会のマンション暮らしに慣れなることなく、アキラを連れて早々に実家へ帰っていったのだ。

故郷では弟が父のあとを継いで、実家で医院を開いていた。アキラはそこで母や弟夫婦に見守られて育つた。

時折、実家へ帰って、母に懐き、弟夫婦に可愛がられているアキラを見て、会うたびに大きく成長しているアキラに驚かされた。彼が思い浮かべるアキラは座敷を駆け回っていた三歳ごろのアキラだった。

アキラはどんなに大きくなっただろうか。身長はどのくらいか。一二〇センチメートルを超えてしまっただろうか、

彼は佐藤に付いて行かなかつたことを悔いた。ACARへ行くまえに、アキラに一目でも会っておきべきだった。

あのとき、彼はこころのどこかで、佐藤に付いて行くことに躊躇を覚え

た。なぜか。実の父親でありながら、長い間、一度も会いに来なかったからか。実家に預けたまま、自分だけのうのとACARで研究をつづけていたからか。

彼は執拗に自分を追及する。佐藤の声が聞こえた。「アキラくんをどうするのだ。放置したまま、ACARへ行くのか」

アキラはどう思うかも考えずに、ACARへ連れて行っていいのかわりに、実の親と信じていた弟夫婦が姿を消したことをアキラはどう思っているのだろうか。それにヒロシの行動も不可解だった。考えれば考えるほど、迷いが深まっていく。

「父親失格」

突然、胸の奥から勢いよく飛び出した。まるで深遠から浮上する気泡のようだった。彼はもう一度こころのなかで呟く。

彼は物理現象を解くようにアキラの気持ちを解こうとしていたのかもしれない。そして迷路に迷い込んでいったのだ。

19

「社会的使命か……」

彼は呟く。それは佐藤の問いかけに彼自身が答えたものだった。彼はなんととも言えぬ不安に襲われた。

風船に空気を注入して膨らますように、人間は地球のなかで人口を増やしつつ、現代文明を巨大化高度化大量化しつつけた。そのため地球という

風船はすでにパンパンに膨れてしまった。それなのに、人間は決して空気を注入する手を休めようとはしない。さらに力を込めてポンプを押しつけているのだ。

その結果、地上には人が溢れ、巨大化高度化大量化した現文明は資源やエネルギーがぶ飲みし、いたるところに排出物を大量に吐き出しつつける。地球は汚れ、悶え苦しみ、熱をだし、震え、激しく咳をする。体中を掻きむしり、痰を詰まらせ、血を吐き、血を噴く。

これが地球環境問題であり、地球温暖化はそのひとつにすぎなかった。気温が急上昇し出したころ、彼は南シナ海を北上する巨大な熱水塊を見つけた。これが「急激な気候変動」研究にのめり込む契機となったのだ。

これを境に、これ以後、日本列島は矢継ぎ早に大災害に見舞われることになった。熱水塊襲来、焦熱地獄、超巨大台風、首都圏沈下、そして首都圏分離沈没、海面急上昇、火山噴火、巨大地震、地殻変動と相次ぎ、日本列島は文字どおり四分五裂してしまう。

これらの超異常現象のたびごとに、彼は可能な限り事前に予測し、社会に対して警告を発してきたのだ。そしていま、地球は自転軸の傾きを変えつつあった。

彼は居ても立ってもいられず、ACARへ戻り、予測シミュレーションを行おうとしていたのだ。

彼は椅子に座ったまま、アキラを探しに行くという佐藤を送りだした。佐藤に付いて行きたくとも、なぜか彼は椅子から立つことができなかった。

その彼に新たな試練が襲ってきた。それが巨大な雲のように覆い被さり、彼を不安に陥れたのだ。

これまでなんの疑問もなく、研究者としての責務だと信じてきたことがそうでないらしいのだ。彼は椅子に座り、じっと考え込む。

彼はかつて農園で白頭大人と話したとき、一度、自分の研究に疑問を感じたことがあったことを思い出した。

「そうか。やはり、そうだったのか」

彼はもう一度、地球が悶え苦しむさまを思い浮かべる。地球は熱をだし、震え、激しく咳をする。体中を掻きむしり、痰を詰まらせ、血を吐き、体中から血が噴き出す。

彼は急激な地球温暖化をもたらす「急激な気候変動」の予測結果に戦きながら、何度もその原因物質である二酸化炭素（炭酸ガス）の排出抑制を訴えたが、世界を支配する人びとは全然聞く耳をもたなかった。

土台、現大文明のもとでは自らつくり出した地球環境問題を封じ尽くすことはできないのだ。現代文明の一方の推進役を担った資本主義は弱肉強食の世界をつくりだし、強いものが弱いものを支配する。強いものは狡猾く立ち回る。狡猾さが支配する世界では自らつくり出した地球環境問題の対策などはできるだけしたくないのだ。ことに地球環境問題の対策は弱いものをも含むみんなのための対策だからだ。自分だけのための対策ならいくらでも金を出すが、みんなのために出す金はないのだ。狡猾いひとは自分のためならいざ知らず、ひとのために犠牲になるようなことは決してしたくないのだ。

資本主義がはびこり、世界はいつの間にか狡猾いものの世界になってしまった。彼はそのことに気付かなかった。何度も二酸化炭素（炭酸ガス）の排出削減を訴え続けた。挫折を繰り返して、ますます予測研究へのめり込み、超異常事象の予測に精を出していったのだった。

それにしても、現代文明はいつの間に、地球の自転軸の傾斜を変えるまでの巨大な力をもつようになったのか。太陽の七番目の惑星である天王星の赤道傾斜角度は九七・九度であるが、この傾斜角度は形成直後に小惑星が衝突したためらしいと考えられている。現代文明が地球の自転軸傾斜角度を変えつつあるとすれば、現代文明は小惑星衝突に匹敵するインパクトを地球におよぼしはじめていることになるのか。

「ああ……」

彼は自分のやってきたことに対して疑問を感じ、突然不安に駆られたのだった。

自らつくり出したものを自ら取り除こうとする。それなら最初からつくり出さなければいいではないか。つくり出したものがどんなことを生み出すかを考えることは、つくり出すことを是認していることになるのではないか。

彼は自分の一人息子をさておいて、予測シミュレーションをしなければならぬと思った。いや、シミュレーションをしたかった。アキラの事よりシミュレーションを優先させたのだった。

自ら父親失格と認めながら、アキラよりシミュレーションを優先させようとしたことはなぜなのか。彼はじっと考え込む。

自分がやってきたことはなんだったのか。自分の行為の意味を真剣に考えずに、ただ研究をしたかったから研究をしてきたのではないか。勝手に研究をしておきながら、社会的使命だなんて言えるのか。研究のための研究にすぎないのに、研究者の責務などといえるのか。

彼はようやく、自分が研究をしたいだけだったことに気付いた。そのことがどんな結果を生むかも考えずに、ただ研究がしたかっただけなのだ。

彼は妻重耶子を失い、いま、アキラを失おうとしていた。やおら椅子から立ち上がると、彼はドアのほうへ歩き出した。

第三章

20

「先生、傾斜速度が加速しているようですが……」

園部だった。青い顔をし、童顔にはかかつての澁瀬とした面影はなかった。

研究センターはかろうじて整理を免れ、閉鎖されずに残った。だが新館のビルに陣取っていた研究センターは旧館のボロビルへ移転することになり、また、研究費の給付はなく、すべて寄付で賄うことになった。

園部は研究センターの存続を賭け、身を挺して寄付集めに専念していたが、思うようにいかなかった。

九鬼はACCARへ戻ることを断念し、自分の持てるものをすべてを研究センターに差し出して園部を支えた。ACCARとも連携し、世界各地の観測データもオンラインで手に入ることになった。

彼は自転軸の傾斜進行に関して、三つのシナリオを考えていた。

一つ目は傾斜がゆっくり進行していくもの、二つ目は進行が途中で止まるもの、三つ目は加速して進行していくもの、だった。

「なに、傾斜速度が加速し出しているというのか。いつからだ」

彼は目を大きくして、じっと園部を見る。

「なぜなのか、分かりませんが、急に加速し出しているのです。間違いありません。いまはまだ僅かですが……」

自転軸が傾きだしていることが判明してから、すでに一年が経過していた。その間、とくに目立った動きはなかった。

もし加速し出していることが事実とすれば、今後、自転軸傾斜角度が急速に進行する可能性がある。一体、その原因はなにか。傾斜を進行させる要因相互間に正のフィードバックが働きだしているのか。それとも新たな要因が加わったのか。彼はそのいずれかにかいないと狙いをつけた。

「原因を突き止め、それを取り除くことができないか早急に調べなければ……。で、加速スピードは……」

もしかしたらいままでも加速していたが、気付かなかっただけではないのか。もしそうなら、加速度は今後ますます増すことになるのではないか。

彼は早速ACCARへ連絡し、各国の研究機関に協力を求める。

自転軸の傾きが加速し出すことは、彼が考えていた三つのシナリオのうち最悪のケースだった。彼がもつとも恐れていたことが現実となりつつあった。

自転軸の傾きが急速に増すことになれば、現代人間社会は致命的な被害を被ることになる。そして人類の存続すら危ぶまれる事態に陥るのだ。

自転軸が大きく傾斜すれば、夏期には酷暑、冬期には酷寒が襲う地域が大きく広がっていくのだ。冬期には地球上では広い範囲が氷に覆われることになる。人間の居住可能範囲が次第に狭まり、領土争いや食糧不足に悩まされ、さらに感染症が猛威を振るい、そして凍死するものも出る。世界中で大量死が発生し、瞬間に、世界人口の大半が失われることだろう。

暗然たる思いのなかで、彼が一縷の望みを託したことは、そのまえに、運良く、夏期の酷暑で西南極大陸の氷床崩壊が発生し、地球上の重量不均衡が是正されることだった。こうなれば、もしかしたら、自転軸の傾斜進行が止まるかもしれないのだ。

だがその可能性は限りなく小さい。氷床は夏期の太陽光線を反射させる

し、海水も暖まり難いからだ。だが彼は藁にも縋る思いで、その可能性に賭けてみたいという思いに駆られていた。

「加速が幾何級数的に進むのか、まだなんとも言えませんが……」
彼は園部の青い顔をじつと見る。

一体、自転軸をさらに傾かせる力はどこからきているのだろうか。太陽の惑星のうち、九番目の冥王星のみ若干異なる軌道をたどる。それ以外の惑星はそれぞれの周期でほぼ太陽の赤道面（黄道面）の周りを自転しながら回っている。だが惑星の自転軸の角度（太陽の赤道面との角度、すなわち赤道傾斜角度）はさまざまだ。地球は二三・四度だが、天王星の自転軸は太陽の赤道面に対してほぼ直角（九七・九度）傾いている。一七八度傾いている金星は他の惑星と反対の逆回りだ。

天王星の自転軸の極端な傾斜は形成直後の小惑星の衝突（ジャイアント・インパクト）によって生じたらしいと考えられているが、地球の傾斜も小惑星の衝突によるのか。

地球の唯一の衛星である月は地球への小惑星の衝突によって生じた無数のかけらによって形成されたらしい。とすると、地球の傾斜はそのときの後遺症か。もしそうなら、いま地球にそれに匹敵する力が働いているというのだろうか。

「加速しているとすれば……」
彼はもう一度思いを巡らす。

一体、なにが加速をもたらしているのだろうか。ジャイアント・インパクトのような外からの新たな要因は思い当たらないし、かといって、新たな地球システムの攪乱要因も思い付かない。やはり、傾斜を進行させている要因相互間に正のフィードバックが働きたと見るべきなのだろうか、

彼は自転軸に揺らぎが生じたとき、その原因はグリーンランド氷床の大崩壊によるものと思っていた。そして揺らぎがやがて収束すると考えていた。ところが、揺らぎが揺らぎで収まらなかつた。自転軸の揺らぎが自転軸の傾きとなり、自転軸の傾斜角度に変化をもたらしているのだ。彼にとって、これは計算違いだった。そのうえ、傾斜角度の進行が加速し出ししているというのだ。

「間に合えばいいが……」
「え？ なにか……」

園部が問いかけても、彼は口を閉じたまま虚空を見つめている。彼には思い当たることがあつた。

21

突然、晩秋のヨーロッパに猛烈な寒波が襲った。北極高気圧から寒気が流れ込み、気温は氷点下三〇度以下に下がった。ところによっては四〇度以下になった。テムズ河、ライン河、セーヌ河など主要な河川は軒並み凍結した。

連日絶えまなく雪が降り、時折、猛烈な寒風が吹き荒ぶ。風は積雪を舞い上げ、地吹雪となる。高速道路ではトラックや乗用車が立ち往生し、空港は閉鎖された。陸上、海上、空中のあらゆる交通機関が運行を見合わせた。

積雪に閉じ込められ、孤立した都市では電気、上下水道、ゴミ収集などのライフラインに被害が続出し、機能不全に陥った。

雪は降り止まず、積雪は日増しに増えていく。降り積もった雪は圧迫されて固まり、下の方から氷雪となり、やがて氷となった。

北欧から西欧へ、そして東欧へとヨーロッパ全域に広がった寒波は北東アジアまでおよび、いたるところを分厚い氷で覆い尽くした。

分厚い氷は春を迎え、夏になって溶け出し、広範囲に洪水をもたらしたものの、完全に融けることはなく、ふたたび冬を迎えた。

一方、ほぼ同時期に、北極から押し出された寒波は北米大陸をも襲った。カナダ全土、米国北東部に大雪をもたらした。いたるところで車が立ち往生したり、送電線が切断し、送電鉄塔の倒壊が続出した。

都市では電気が止まり、交通機関が止まり、ガスやスチームが止まり、ついに、上水道まで凍結してしまった。

欧米では、この寒波で凍死する者が相次ぎ、数一〇万人を超える犠牲者が出た。

22

「大寒波がヨーロッパを襲っているそうですね。地球が温暖化から一転して小氷期に入ったのじゃないですか。日本列島にも寒波が押し寄せてくるんじゃないでしょうか……」

園部が研究室に入つて来るなり、大声を上げる。

「小氷期？ ばか言え。熱塩大循環がほぼストップしているところに、北極振動が重なり、寒気が南下してきたのだろう」

彼は冷ややかに言い、園部に目を向ける。情緒不安定に落ち入っている

のか、園部は最近突拍子もなく大声を張り上げることがあった。

「北極振動ですか……」

北極圏で高気圧帯と低気圧帯とが交互に入れ替わることがある。この現象を北極振動というのだ。北極圏では高気圧になると低気圧帯へ寒気を押し出し、逆に、低気圧のときには寒気を蓄える。北極圏が高気圧のときには中緯度付近が低気圧帯となるのだ。

「ヨーロッパが氷に閉ざされたのは、海洋大循環が変調を起こして熱配分システムが機能不全に陥っているからだ、それで北大西洋への暖流の北上が弱まり、途絶がちとなって冷えているところに、北極が寒気を放出しているせいだろう。それに……」

グリーンランド氷床の大滑落で海流に変化が生じていた。ことに、北大西洋での深層水生成が阻害され、熱塩大循環への深層水供給が途絶えがちになっていた。これで地球上の熱配分システムが大変調を起こしているのだ。

これまで大暖流であるメキシコ湾流が北大西洋へ大量の熱を運び、西ヨーロッパで熱を放出していた。この影響で、同地域は高緯度にもかかわらず、比較的温和な気候に恵まれていた。それがこのところ、暖流の北上が途絶えているのだ。

「そうですか。では日本は……」

園部には日本列島のことばかりらしい。

「それに偏西風の蛇行による影響もある。これが日本列島の上空まで南下するようになる、日本列島にも寒波が押し寄せてくることになるだろう」
「すると、日本列島にも大雪が降り、氷に閉ざされることになるのですか」
「だが日本列島といってもかつての主要四島じゃないし、周辺の海流の流

れも変わってきていることだろうし……」

かつては、日本列島は本州、四国、九州、北海道の主要四島と大小の島からなっていたが、地球温暖化の果てに襲った海面急上昇に加え、同時噴火と巨大地震をともなう地殻変動で、主要四島は四分五裂してしまっていた。

まず、本州中央部に広がる関東平野がもぎ取られ、首都圏全体が海中へ沈没してしまった。日本列島は首都を含む大都市圏を失い、変形を余儀なくされた。そこへ海面急上昇が襲い、日本列島はふたたび沿岸各地で陸地が深く侵食された。これらの連続する二つの出来事で、日本列島は原形をとどめないまでに痩せ細ってしまった。

つづいて、日本列島各地で同時噴火と巨大地震が相次ぎ、さらに、地殻変動がつづき、痩せ細った日本列島は四分五裂していった。本州中央部を横断するフォッサマグナが陥没して本州が分断され、本州は北東部（北東日本または北東本州）と西部（西日本または西本州）のふたつに完全に二分されてしまった。四国、九州でも中央構造線を境に亀裂が走り、分断されてしまう。北海道では沿岸部が奥地まで侵食され、石狩平野が水没し、日本海側から太平洋側へ海が通じてしまっていたのだ。

「それで、先生はここがどうなると……」
 「多分、冬期には北海道と本州の北東部ではかなり冷えることになるかもしれない。ゲリラ的大雪で局部的に雪に埋もれてしまうところもでるだろう」

彼はグリーンランド氷床大滑落で生じた大冷水塊が未だに三陸沖に停滞しているらしいことを思い出した。それに北極海から流れ出る寒流親潮が次第に勢力を増し、北極で蓄積された寒気が日本列島を襲うようなことに

なれば、日本列島の北東部の寒冷化が一気に進むことだろう。

「この辺も氷に覆われ、氷に閉ざされることになるのですか」

「そうなる可能性はないとはいえない」

「地球温暖化はどうしたのですか。もう終わったのですか」

園部は不服そうに口を尖らす。

「地球温暖化はまだ終わっていないよ。ようやく収束の方向へ歩みだしたというべきかな。寒冷化といっても初期にはごく僅かずつ地球の平均気温が低下していくだけだ。たとえば、年々地球の平均気温が○・一度か○・二度あるいはそれ以下低下する程度のもので、まだまだ温暖化傾向はつづく。地球温暖化や寒冷化という話は地球の平均気温の話だからね。寒いところもあれば暑いところもある。これからはその違いが極端になるだろう。」

それに大雨や大雪、日照りや暴風などの異常気象はこれまで以上に激しいものになるだろう。なにしろ、大気の状態が著しく不安定になるからね。日本列島でもこれまで以上に気候が急変し易く、北東部が大雪で氷に閉ざされても、西部はとても暑かったり、逆に、西部が極端に寒むくなったりするにちがいない」

「ここが雪に埋もれ、氷に閉ざされるときもあるということですね」

「そうだ……」

彼はじつと園部を見る。

「そのときはここも閉鎖するほかないですか」

「……………」

彼はふとアキラを思い浮かべた。農園が大雪に見舞われ、氷に閉ざされたら、どうなるか。

「あ、温室がありますよ、ここには。農学部の研究施設ですが、いざとなつ

たらあそこへ逃げ込めばいいですよ。太陽熱と温泉のお湯を利用しては
はりますが、あそこは他が氷に閉ざされても凍ることはないかも……」

園部は頬のこけた童顔に笑みを浮かべている。

氷に閉ざされた農園で、アキラたちが食糧もなく、寒さに打ち震えてい
る様子が脳裏に浮かんだ。彼はアキラたちに迫り来る寒冷化について一刻
も早く知らせてやりたいと思った。

23

「先生、アキラくんたちが……」

佐藤は研究室のドアを勢いよく開け、彼の顔を見るなり、こう言っとき
り絶句した。

「どうかしたの……」

佐藤は青い顔をして、肩で息をしている。彼は不安を覚えた。

「きみ、どうした……」

彼はもう一度繰り返す。

「アキラくんが……、ヒロシくんがいなくなった」

佐藤はぼつんと言った。

「え？ 本当か。どこへ行ったのか分からないの……」

彼は思わず、大声を上げた。

空はどんよりと曇り、いまにも雨が降りそうだった。夕方になって気温
が下がれば、雪になるだろう。

「寒冷化がはじまったというのは本当ですか」

佐藤が彼の目を覗き込んだ。

「うん……」

「このところ、農園では不作つづきで、作物の収穫量が落ち込んでいた
らしいんだ。そこでいろいろ対策がなされていたのだが……」

「……………」

彼は空腹を抱えているアキラを思い、口を閉ざしたまま、佐藤にじっと
目を据える。

「いろいろやつてもなかなか状況が改善しなくて、とうとう若い者から南
へ移動することになったらしい。時折出掛けて行ってふたりの様子を見て
いたのですが、急にふたりの姿が見えなくなった。農園のひとに聞いてみ
ても、多分、南の方の農園へ行ったのだろうというだけで、ふたりの行き
先は分からない」

「農園が組織として移動を決めたわけではないのか」

「そこまではしないらしい。でも各地にある農園はネットワークで結ばれ
ているので、そのうちのいずれかへ行ったのだろうと思うけど……。それ
でいま当たりを二、三当たっているのですが、まだ、アキラくんらの二
人連れの姿を見かけたところが見つからないんですよ。ふたりだけでなく、
もっと大勢で行動しているのかなあ」

「……………」

彼は窓辺にたつて、空を見上げた。気温がかなり下がってきているのか、
空中に舞う雪は小さく軽やかに舞っている。

彼は居ても立ってもいられない気持ちでぐっと抑え、窓辺に立ちつづけ
る。雪のなかを歩いているアキラを思い浮かべ、彼は悔いた。なぜ、あの
ときアキラに会い、ヒロシと一緒に引き取ろうとしなかったのか。見守る

からという佐藤を信じて、ACARへ行くこうとしたのか。またアキラが行方不明になるとは……。いまになってはどうすることもできなかった。彼は空を見上げて、大きく溜息をついた。

「ふたりを見守ると言っておきながら、見失ってしまい、本当に申し訳ない。必ず、探し出しますから待っていてください」

佐藤はこう言い残すと、研究室からあたふたと出ていった。

24

まだ晩秋だというのに、午後から降り出した雨が夕方になって雪になった。

雪は一晚中しんと降った。だが朝になっても止む気配はなかった。

時折、突風が吹き、雷光が走る。いつの間にか、降る雪は大きな雪片に変わり、みるみる積もっていく。

日本列島はまるで北東と西で気候帯が二分されている感じだった。それも北海道と北東日本が寒帯だとすると、西日本以南は亜熱帯だった。それほどの違いがあった。

寒流の親潮は勢力を増し、茨城沖まで南下すると北上する暖流の黒潮と正面衝突して太平洋へ向きを変える。海流の影響で、北東日本では北東風は冷く、西日本では南風が暖かいのだ。

だが北東日本の太平洋岸にはいまだにグリーンランド氷床名残りの巨大な冷水塊が停滞していた。これに対して、西日本周辺には三〇度近い暖水域が広がっている。このため、北東日本の北東風は以前よりかなり冷く、

西日本での南風は湿って暖かい。

北東日本上空にマイナス六〇度の猛烈な寒気が押し寄せてきた。偏西風が大きく蛇行しているのだ。ヨーロッパを襲った猛烈な寒波と同じ寒波が極東アジアへ流れてきているのか。

そこへ暖水域で発生した大量の水蒸気を持ち込んだ低気圧が急接近し、猛烈な寒気に遭って北東日本に大雪を降らせているのだ。

夏の台風は超大型化しているが、低気圧がもたらす秋や冬の嵐も大型化していた。そしてところかまわず季節外れの激しい大雨やどか雪を降らす。

南シナ海で発生した低気圧が暖水海域で成長して暴風となり、日本海を駆け上がり、日本列島各地に季節外れに雷や桁違いの大雨、大雪をもたらすのだ。それに以前なら、日本海側に比べ、比較的積雪量が少ない太平洋側も、首都圏沈没によって南からの湿気を含んだ大気が入り易くなったのか、年々降雪量が増えていた。

今年はいまだに西日本の太平洋側に太平洋高気圧が居座り、北からの寒気の流入をブロックしているのだ。

彼は外に目を向け、窓辺に立ち尽くしていた。一面雪に覆われた白い雪野原が広がり、地平で空に連なっている。

空から大きな塊のような雪がひっきりなしに落ちてくる。みるみる雪は積もっていく。だが彼はなにも見ていなかった。

彼の脳裏には雪野原をとぼとぼ歩く幼いアキラの姿があった。深い雪なのに、なぜかアキラの足は雪のなかにぬかることなく、表面に浅い小さな足跡を残して地平をめざす。後姿が次第に小さくなり、姿が薄れていく。やがて後姿は小さな点となって地平に吸い込まれていった。

彼はアキラの姿が消えても、窓辺に佇み、窓の外へ目を向けていた。

「先生……」

園部だった。

彼はようやく窓辺を離れ、園部をソファに招き、椅子に腰を下ろす。

「大雪警報が出ています。そろそろ宿舎へ……」

園部は立ったまま、彼を促す。雪がこれ以上積もり、暗くなれば、宿舎へ帰れなくなるという。

大学の敷地内にゲストハウスがあつて、外部からの訪問者だけでなく、教職員も利用できた。近頃の彼は籍をおいている農園に帰ることが少なく、ゲストハウスを利用することが多かった。ゲストハウスでは宿泊だけでなく、食事もできる。

「きみはゲストハウスへ戻りたまえ。ぼくはここで過ごす」

「昨夜につづいて、今夜もですか。食べるものは……」

「きみが今朝持ってきてくれた残りがある」

「夜には暖房が切れるんじゃないですか」

暖房は日中でもかなり抑えられていた。それでも日中は暖房があつた。

「曲がりなりにも食事ができて、暖房があるのは助かる。いつまでつづくか分からないがね」

ゲストハウスの食事もいつなくなるか分からなかった。ゲストハウスを閉鎖する話もあった。彼はそのときは研究室に寝泊まりする覚悟だった。そのため、非常食を用意し、スリーピングバッグやダウンコートなどを持ち込んでいた。

研究センター閉鎖の話があつてときから、大学もいつか閉鎖されることになるかもしれない状況だった。予算は縮小され、人員の整理も進んでいた。

彼にはまだやることがあつた。地球の自転軸は僅かづつであつたが、傾斜を増しつつあつたのだ。このまま地球の自転軸が傾斜しつづけていくのか、彼ははつきり見極めたかつた。それともそのままに西南極大陸氷床が大滑落を起こし、自転軸傾斜の進行が収まることになるのか。彼は毎日世界各地の研究機関と連絡し、送られてくるデータをチェックしていたのだ。園部は立ったまま、彼を見つめている。

「さあさあ、早くしないと戻れなくなるよ」

彼は園部を追い出す。園部は肩を落とし、ときどき後ろを振り返り、足を引きずるようにして渋々出ていく。

彼は応接セットの椅子に座ったまま園部の後姿がドアの外に消えるのを確かめると、やおら立ち上がり、ふたたび窓辺に寄る。地平に目をやった。だがいくら探しても、そこにはアキラの姿も気配もなかつた。

25

「龍巻かな。まさか……」

佐藤は車から降りると、後ろを振り返る。地平に広がっている黒い雲から帯のような細長い黒いものが垂れ下がり地上へ伸びている。

時折、強い風が顔を突く。急いで車のなかに入る。

佐藤は車を出そうか、しばらく迷った。

地球温暖化の果てに、日本列島を矢継ぎ早に襲った大災害で社会は混乱し、政治は混乱し、政府や行政の対応も限られたものとなった。それも治安の維持とライフラインの確保で手一杯といった感じだった。といつても、

治安もライフラインもかつてのように回復したわけではなかった。

一般道路の改修は進まず、高速道路もずたずただった。橋架が倒壊した高速道路は放置されたままで、無傷のところだけがかるうじて利用可能な状態だった。

佐藤は利用可能な高速道路を探して車を走らせてきたせいも、すっかり道に迷ってしまったのだ。

彼は九鬼を研究室に訪ねた帰り道に、突然出奔したアキラたちを探し出そうと途中にある農園を訪ねてみようと思っていたのだ。その農園は連携している姉妹農園だった。

九鬼は地球自転軸の傾斜予測のシミュレーションを行うためにACARへ行くと言い出したとき、彼はその間アキラたちを代わりに見守ると約束した。それなのに、アキラたちの行く先を見失ってしまった。約束を果たせなかったとはいえ、九鬼もACARへ行かずにはなかつた。約束を果したから、これは彼だけの責任というわけではなかつた。九鬼がACAR行きを断念した以上、あの約束も反故になったと考えてよい。

だが彼は重大な失敗を犯していたのだ。

彼がひとりアキラたちに会いにでかけたときだった。彼がこれからアキラたちのいる農園を訪ねると言ったとき、彼は当然九鬼が付いてくると思っていたのに、九鬼は付いてこなかつたのだ。

「アキラくん、お父さんに会いたくない？」

「……………」

アキラはきよとんとした表情で、じつと佐藤の顔を見ている。

「アキラ、それはウソだ。アキラのお父さんは死んでもういないんだ」

ヒロシは側で目をギラギラに光らせて、佐藤を睨みつけている。

「ウソじゃないよ。アキラくん」

佐藤は微笑みを浮かべて屈み込み、アキラの手を取ろうとした。そのときだった。

ヒロシはアキラの手を力一杯引つ張って引き離し、そのままふたりは走り去っていったのだ。

彼はそのときのことをまざまざと思い返した。

「なんとしてもふたりを探し出さなければならぬ」

彼は自分に言い聞かせるように、声に出した。

黒い雲が迫っていた。彼はブレーキをはずし、アクセルを踏んだ。

26

「やはり、自転軸は傾き出しているのか」

太陽が出ているはずなのに、いつまでも薄ぐらゐのだ。

彼は独り言を言いながら、窓辺に寄る。冷気が全身を貫く。窓ガラスには氷が一面に凍り付いていた。彼は身震いしながら、氷の薄い隙間から外を覗く。いつの間にか、空一面に広がっていた雪雲が消えている。空には雲がないのに、全体が暗く澄んでいる。光がないのだ。

射し込む太陽光線の量が極端に減少しているのだろうか。自転軸が大きく揺らいでいるせいなのか、それとも急に自転軸が傾きはじめたのだろうか。

地球になにが起きているのか。地上が凍結し、一面氷に覆われてしまっ

たのは北半球の高緯度から中緯度にかけてだけか。それとも日本列島、それも日本の北東部のみなのだろうか……。

彼は急いで机に戻り、デスクプレーに電源を入れた。だがいくら待っても画面が現れない。彼は何度も試みるが、やはり画面が現れない。

「停電なのか……」

彼は壁に近寄り、照明のスイッチを入れる。バネが跳ね返る乾いた金属性の音が鳴っただけだった。受話器を取り上げても、発信音がしない。

彼は待った。きつと、朝が来る。そう信じて、彼は待ちつづける。

何枚も重ね着した身体に寒気が忍び寄る。足下から冷気が上り、身体の芯を冷やしていく。我慢できずに、動き出した。

彼は毛布を引きずり、研究室のなかを右に左に歩きつづける。

彼にはなにが起きたのか、分からなかった。いろいろ想像し、朝が来ない原因を探し出して列挙してみるが、結局、決め手となるものが見つからなかった。

彼は待った。だがいくら待ってもなにも起こらなかった。

27

彼は寒気を感じて目を覚ました。ソファに横になっていた。いつの間にか、眠り込んでいたらしい。

窓から薄明かりが射し込んでいる。まえより幾分明るくなったのか、研究室のなかのほのかに浮いて見える。

彼はソファにあぐらをかき、研究室を見回す。なぜがすべてが真新しく、

初めて見るような気がした。

突然、ピーピーという音がした。彼は音の方向に顔を向け、辺りを見回す。

研究室の奥に作業機があった。その上で携帯電話が小さな光を発し、呼び出し音を発している。

彼は携帯のことも、作業機の上に携帯が投げ出されたままになっていることもすっかり忘れていた。日頃から応接セットのテーブルか執務机しか使わず、研究室の隅にある作業機は滅多に利用することがなかった。

彼は珍しそうにしばらく携帯の呼び出し音を聞いていた。それからおもむろにあぐらの足を解き、床に立つ。そのとき、音が切れた。

一瞬、園部からかと思った。心配して電話してきたのかと思った。だが園部なら電話するまえに直接研究室にやってくるにちがいない。

彼は携帯電話を取り、デスクプレーを覗く。表示されている電話番号は見覚えのないものだった。

彼は携帯を手持のまま、記憶を思い起こし、いろいろ思いを巡らす。やはり番号が誰のものか思い出せなかった。それでも彼はしばらく携帯を持っただけのまま、呼び出し音を待った。

だがいくら待っても、携帯は二度と音を発することはなかった。

園部はどうしたのだろう。いくらゆつくりしているとはいえず、そろそろ姿を見せてもいいころだった。来ないなら来ないと連絡してくるはずだ。彼だけが研究室に寝泊まりするとき、園部はいつも弁当を届けてくれた。

お腹がグーと鳴った。空腹を覚え、携帯をテーブルに置き、彼は立ち上がる。彼は園部が持ってきてくれる弁当を心待ちにし、朝からなにも食べずにいたのだ。

窓から外を覗く。いつの間にか、雪が降り出していた。ゲストハウスから研究センターへの通路となっている小道はすっかり雪に埋まり、一面が真っ白な雪野原になっている。どこに道があるのか分からない。

彼は応接セットに戻り、テーブルから携帯を取り上げる。園部に雪のなかに研究室に来るよりも、ゲストハウスに留まるように言うつもりだった。携帯を手にとったものの、ゲストハウスの電話番号が思い浮かばない。うる覚えの番号を打つ。だが発信音が鳴らない。

デスプレーに電波が弱い表示が出ている。彼はもう一度番号を打つ。表示は変わらなかった。

さっきは通じていたのに、急に電波が弱くなることあるのか。彼は不思議そうに辺りを見回す。窓辺に寄り、外を見た。

雪が激しく降っている。雪が降ると、電波が弱くなるというのか。彼は妙な気分が襲われ、急に不安が募った。

彼はゲストハウスへ戻ろうかと思った。

身体をくねって窓ガラスに顔を寄せ、ゲストハウスの方を見た。ゲストハウスは方向が悪いが、研究室の窓の横の方に建物の右端が見える位置にあった。だがいまは雪の煙幕に遮られ、なにも見えない。

彼は次第に胸が焼け付くような焦りを覚える。もしかしたら、研究センターの建物のなかに自分だけがひとり取り残されているのではないか。

彼はドアを開け、廊下を覗く。

園部や九鬼の研究室がある研究センターは大学の研究予算削減によって一度は閉鎖が決定したが、当分の間設備はそのまま研究費は自前で調達するということで閉鎖を免れたのだ。これにともない、人員規模の縮小と新築のビルから空家同然の旧研究棟へ移動することになった。

そのときは、事務職を兼ねた研究補助員が一人と研究員数人が研究センターのメンバーとして残ることになっていた。だが彼は園部以外の研究員の姿を殆ど見かけたことはなかった。

旧研究棟は建て替え時を迎えた古い四階建の鉄筋コンクリート造りのこじんまりとした小さなビルで、いまは一階が倉庫として用いられ、二階以上が研究センターにあてがわれていた。園部と彼の研究室は三階で、二階には事務室と会議室があり、四階には研究室が三つ並んでいた。

廊下に出て、彼は園部の研究室を覗く。誰もいないことを確かめると四階への階段を上った。四階に上るのは久しぶりだった。四階にも人影はなかった。

彼は階段を下り、一階の出口へ向かう。廊下が妙に薄暗い。扉のまえで、彼はダウンコートのフードを被り、チャックを首元まで上げた。ポケットに手をつまみ込み、手袋を取り出し、両手にはめていく、そして扉のロブを回し、押した。

びくともしない。何度押しても、凍り付いてしまっているのか、引いても押しても軋むことさえなかった。

廊下へ戻り、窓に寄り、外を見た。いままで気が付かなかったが、窓一面に雪が付着しているではないか。これでは暗いはずだ。明かりは扉のうえの高い位置にある天窓から射し込む僅かな光だけだった。彼はもう一度窓に近寄り、外を見た。雪だ。雪が窓の高さを超えて積もっているのだ。

外へ開く扉が開かないのは、外側に積もっている大量の積雪のせいだったのだ。

彼はふと、昨夕、園部が帰るときも積雪で扉が開かなかったのではないかと思った。そして二階へ上り、廊下の窓に近寄り、外を見る。

積雪は二階の窓まで達していた。廊下の一番端の窓が半開きになっていて、そこから吹き込んだのか、廊下に雪が積もっている。彼は胸騒ぎを覚えた。

もしかしたら、園部はあの窓から出て行こうとしたのではないか。

彼は窓辺に近付き、外を見た。新雪が積もっていて、ひとの足跡も雪掻きした跡も見当たらなかった。

彼は窓辺に佇み、隙間からしばらく外を見ていた。新雪が覆い尽くしてしまっただろうか、どこにも園部が通った痕跡は見当たらなかった。

彼はゲストハウスへ帰ることを諦め、研究室に戻った。

28

夕暮れが迫ってきた。暗闇が迫ってきた。

彼はゆっくり寝仕度をはじめた。

まず、ソファに寝袋を広げる。それから服の上にダウンの上下の防寒服を重ね着した。かつて北極圏調査で着用したものだ。そして首にタオルを巻き、毛糸の帽子を被り、マスクをする。寝袋のうえにアルミ箔が張つてある防寒シートをかける。

彼は寝袋に身体を入れ、目を閉じる。目を閉じて、頭が冴えてなかなか眠れない。彼は目を開け、暗闇を見つめる。園部の童顔が浮かんだ。

一日中待っても、園部は姿を見せなかった。園部の身になにかが起こったにちがいない。なにが起こったのか。急に熱でも出たのか。でもゲストハウスに帰っているなら、研究室に残っている彼に知らせてこないはずが

ない。

あの携帯は園部からのだったろうか。彼は作業機の携帯が突然鳴り出したことを思い出す。だが二度と鳴らなかった。とすると、やはりあの電話は園部からではなかったのではないか。

もしかしたら、ゲストハウスに帰っていないのではないか。彼は逡巡をつづける。そしてとうとう園部がゲストハウスに帰っていないのにちがいないと思った。

雪のなかで道を迷ったのだろうか。深い雪に足を取られ、動けなくなっただろうか。それとも扉が開かず、二階の窓から出て、深い雪に埋もれてしまったのだろうか。

彼は大きな溜息を吐いた。

あのとき、一緒に帰れば、こんなことにならなかったのではないか。少なくとも、二階から外へ出るような危険なことはさせなかった。もしかしたら、窓から過つて雪のなかへ落ちたのかもしれない。

彼はじっとしておれず、いますぐ二階へ行つて、雪を掻き分け、徹底的に調べてみたいと思った。

だがすでに日は落ち、暗闇が支配していた。彼は闇を睨み、寝袋のまま何度も身体を輾転とする。

勢い余つて、寝袋がソファから転げ落ちた。落下防止にテーブルをソファ側に引き寄せていたが、彼は両手を寝袋に入れたまま、テーブルとソファの隙間から糞虫のような形で床に落ちてしまった。

彼は落ちた瞬間、反射的に身体を丸めた。だがテーブルの縁が邪魔して丸まらず、後頭部を床に叩き付けてしまったらしい。

目のなかで火花が散った。次の瞬間、彼は次第に意識が遠のいていくの

を感じた。

29

彼は何時間気を失っていたのだろうか。夢のなかで、彼は突然目を覚ました。

奇妙な夢だった。目を覚ましても、見た夢が鮮明に頭に焼き付いていた。急に視界が開け、一面が金色に輝き、奥の方から眩いばかりの黄金の光が射し込んでいた。中央に小川が曲がりくねって流れている。小川といっても、幅は二、三メートルあるうか。なぜか、流れている水は黒い。もしかしたら、水が流れていず、川底の色かもしれない。

小川の兩岸のいたるところにあやめか杜若に似た草花が群生し、色とりどりの花をつけている。さまざまな色の花が入り乱れて咲いているのではなく、同じ色の花がそれぞれ小さな塊となって群生しているのだ。この岸には紫の花が集まり、向こうの岸は黄色の花の集まりがあるというふうには一面に広がって咲き誇る橙や黄色、紫や白の花々は黄金の光のなかで輝き、キラキラと光っていた。

「ああ……、黄金の花園……」

彼は思わず叫び声を上げる。余りの美しさに我を忘れ見とれていた。

小川には太鼓橋が見える。対岸に数人の人影があった。人影のなかのひとりやしきりに手招きしている。橋を渡れば、手招きしているひとのところにへ行けるのか。

彼は一歩二歩と橋へ近付く。色とりどりの花が大写しになって目に飛び

込んできた。彼は花々に見とれ、ふと、花を持って帰れないかと思った。

彼は花々を見ながら、どうすれば持つて帰ることができるかと考える。三つの方法があった。

ひとつ目は切り花だ。ふたつ目は根を掘り返して、根や球根をつけたまま持つて帰り、移植するのだ。三番目は種だ。種を取って、種から育てるのだ。

どうする。切り花は可哀想だし、枯れてしまえばそれまでだ。根を掘り起こして移植すれば、採った跡が残る。時間がかかるかもしれないが、種がいい。種をもらって植えるのが、一番だ。

花を見ながら、こんなことを考え、ふと目を上げると、対岸の人影は消えていた。

対岸にいた人たちがどこへ行ったのだろうか。彼らは一体誰だったのか。顔を思い浮かべようとしているうちに、彼は突然目が覚めたのだ。

寒気がひしひしと襲ってくる。彼は寝袋のなかで身体を縮め、寒気に耐える。寒気に耐えながら、あの人影を思い浮かべる。

確か、あのとき、誰かが呼んでいるような気がした。盛んに手招きしていたのは誰だったのか。

数人の人影があったが、顔や体つきは誰かに似ているようでも不鮮明なのだ。アキラを残して一番最初に亡くなった妻亜耶子、そして母良子と弟夫婦、それに佐々木教授、ヒロシの母佐橋裕子の六人だったのか。いや、もうひとり、手招きしていたのは別人のようだった。

「園部くんか……」

思わず、口を突いた。

「まさか……、イテイ……」

自分が発した言葉に驚き、身体を伸ばした拍子に頭を打ったのだ。

ソファの足に頭がぶつかったのだった。そのときはじめて、彼は床に寝ていたことに気付いた。

「ソファから落ちたんだな」

彼は自分に言い聞かせるように呟き、テーブルを押して、上半身を起す。寝袋から抜け出ると、彼はソファに手探りで寝袋を広げ、寝袋のなかへ入り直す。

横になると、突然、園部の童顔が浮かんだ。

なぜ夢のなかの花園に園部がいるんだ。彼はもう一度夢を思い返した。

そして小川の対岸に並んでいた人影を一人ひとりチェックしていく。

手招きしていた男は、やはり園部らしかった。園部以外はすべて亡くなった人びとだった。

「あの人影は亡くなって人びとだったのか。すると……」

不意に、雪に埋もれた園部が浮かんだ。彼は大きく息を呑んだ。園部が雪のなかで凍死したのかもしれないと思った。

彼は手を伸ばし、ソファの背に手をかけて上半身を起こした。窓がほんのりと白みがかった。

寝袋からでると、彼は研究室を出た。手すりに掴まり、薄暗い階段を一段一段下りて行く。二階へ出ると、半開きになっていた窓に近寄る。廊下には、隙間から吹き込んだのか、新雪が積もっていた。

窓を開こうと戸を引いた。凍り付いているのか、びくともしない。彼は戸の隙間から外を覗く。薄暗くよく見えない。手を伸ばすと、雪だった。雪が窓を塞いでいた。

一晩中雪が降っていたのだろうか。積雪はすでに二階を超えてしまっ

ているのだ。

彼はたじろぎ、息をつめた。園部を探し、助け出そうという思いが打ち砕かれ、彼はしゃがみ込む。

彼はしばらくじっとしていたが、ゆっくり身を起こすと、研究室へ引き返す。

ふたたびソファに上り、凍えた身体を寝袋に包む。

夢が浮かんだ。男が彼を手招きしている。やはり園部だ。あの夜、園部は雪のなかでひとり息を引き取っていったにちがいない。最後まで研究センターのことをひとりりで仕切つて、彼に一切面倒をかけようとしなかった男が突然逝ってしまったのだ。

こう思いながら、それでも彼は園部を待った。彼はソファの上で両腕で足を抱え、身を丸め、じっと待っていた。だがいくら待っても園部が現れることはなかった。

少し明るさを増した。彼は窓に目を向けた。

ふと、アキラの声がしたような気がした。彼は急いで窓の外を見た。雪が三階の窓まで迫り、灰色の冬空の下に白い雪野原が広がっている。

彼はじっと白い雪野原を見つめる。吸い込まれそうになってまへのめりになり、額が窓ガラスを打った。冷やりとした感触が全身を貫いた。

園部の童顔が浮かんだ。園部が手招きしている。彼は窓を開け、雪野原へ下りていこうとした。

そのとき、突然、彼はあのとき自分も研究室の床の上で凍死寸前だったことに気付いた。園部の手招きに応じて、彼は小川を渡ろうとしていたのだ。

彼は園部の手招きを振り切るように急いでソファに戻った。

寒気がしんしんと迫る。身体は冷えきり、心臓が喘いでいる。彼はじつと動かず、待った。なんら当てはなかったが、ただ待った。彼は自分にもやがて訪れてくるであろうことを待っていたのだ。

30

「全然通じやしない。どうなっているんだ。街全体が雪に埋もれてしまったのか」

佐藤は受話器を叩き付ける。

日本列島の北東部地方で大雪がつついていた。北極の強烈な寒気が南下し、居座っているところに、海水温の高い南の海上から立ち上る大量の水蒸気を含んだ湿った空気が吹き込んでいたのだ。

ことに、今回の大雪は、なぜかこれまで比較的積雪の少なかった宮城県、太平洋沿岸地方を中心に集中し、局所的に大雪を見舞ったのだ。関東平野一帯が海中へ沈没したため、南から日本列島に迫る暖水域から発生した大量の水蒸気を含んだ南風が流れ込み易くなったためらしい。

M新聞の本社ビルのある新都心一帯はかろうじて寒気の縁から若干離れ、雨が雪になることはなかった。その代わりに、連日どんより曇った雨模様で、時折、突風を交えた暴風雨が吹き荒ぶ。

一方、西日本では季節外れのような暑い日がつづく。西の海上では定期的に低気圧が発生し、急速に発達して日本列島を西から東へ走り抜ける。

佐藤は暇を見つけてはアキラたちの行方を追った。一日も早く、アキラたちを見つげ出し、九鬼を安心させたかった。だがいまだに彼らの行方を

掴めずにいた。

こんなこともあって、北東部における連日の大雪の報道にもかかわらず、佐藤は九鬼に電話もしないでいたのだ。

佐藤は朝起きたとき、なにかしら胸騒ぎを覚え、すぐ携帯を手にとったが、通じなかった。それで出勤すると、固定電話の受話器をとったのだ。

「あの辺ではもう何日も電話は不通だよ。どこへかけたんだ」

隣から声がした。

「大学と連絡が付かない」

「市の対策本部に衛星電話が常備されているかも。うちの部には……、社会部に何台かあるはずだ」

衛星を利用した通信手段だ。災害時や戦場などで利用されてきたが、地上に通信インフラのないところでは通常時でも通信衛星を用いた衛星電話が普及している。

「北東部の大雪の状況は……。取材にいつてきたヤツいないかな」

「佐藤か。いまは最悪だ。誰も近付けない」

佐藤は同期の丸顔を思い浮かべる。社会部の広田だ。

「T大学に連絡したいのだが……」

「自衛隊に災害出動を依頼しているらしいが、大雪に阻まれ、全然作業が進捗していないそうさ。なにしろ、積雪が数メートルもあるらしい。そんなわけ……」

広田の話によると、雪の重みで押し潰される家屋が続出し、雪に埋もれた家や倒壊した家屋のなかに取り残されているひとが多い。その救済を第一に進めており、それに手を取られ、道路の除雪など、他に手が回らない

という。

電線や電話線の断線、電柱や電波アンテナの倒壊が相次ぎ、通信不能の状態がつづいている。道路や線路の除雪もできず、交通機関は完全にストップしている。水道管が凍結し、飲み水さえ不足の状況に加え、生鮮食品が品切れの状態。さらに大雪がつづけば、食糧不足に陥る。雪のなかに取り残され、孤立した都市は崩壊するほかないのか。

「連絡はムリか」

佐藤は受話器を戻すと立ち上がった。予定ボードにヘリコプターによる北東部の大雪撮影が入ってないかを調べる。便乗しようというのだ。だが大雪の日にすでに一度現場撮影を敢行していた。

一日、そして二日と、佐藤は悶々として過ごした。

一刻も早く、九鬼を訪ねたかった。だがいくら気になっても、九鬼のところに近付くことさえできないのだ。

高速道路は通行禁止がつづく。通れるところがあれば、迂回してでも行きたいが、道路という道路には雪が深く積もったままだ。主要道路の除雪作業が進められてはいるが、遅々として進まない。開通した道路は救援活動に占有され、一般車両は入り込めない。

とにかく、降り積もった雪の量がとてつもなく大量で、これに対して雪を処理する人手が圧倒的に足りなかった。

こんなとき、佐藤は耳寄りな情報を耳にした。近々、天候が回復するとうのだ。居座り続けた寒気が去って、暖かくなるらしい。

だが晴れることはなかった。大雪が大雨に変わっただけだった。

大雪に代わり、猛烈な雨がつづいた。屋根に積もっていた雪が雨水を吸い、重くなった。これでこれまで雪の重みを辛うじて堪えていた家屋が相

次いで押しつぶされ、倒壊していった。

大雨と雪解け水で河川の水量が急速に増え、溢れ出した。道路の積雪量は大雨に打たれ、融けたり押しつぶされて嵩が減っていったものの、濡れた雪が大雨の水と雪解けの水とが混じった大量の水を堰止め、いたるところに大きな池や水溜まりをつくり出す。濡れた綿のような雪でつくられた水溜まりの壁は弱く、すぐ隣の水溜まりとつながり大きな水溜まりになっていく。こうしてきた大きな水溜まりがつぎつぎに決壊していき、大量の鉄砲水となって流れ出す。

雨に打たれ濡れだ雪の重みで押しつぶされた木造家屋の柱などの残骸やさまざまな家具が流されていく。人や車も水面で見隠れしながら流されていった。

街を埋め尽くしていた雪が雪の塊や濡れた綿のようになって流れていく。ついに、街に大量に降り積もっていた雪が大洪水となって街をも押し流していったのだ。

まだ高速道路は開通していなかったが、佐藤は通れるようになった道を探してT大学を目指した。道路の両端には大きな石や家屋の残骸などがは寄せられている。洪水はすっかり引いていたものの、道路の窪みには泥水が残っていた。まだ通行できない道路も多かった。車は何回も迂回しながら、泥だらけになって進む。

大学は丘の上にある。かなりの積雪があったのか、残雪がいたるところにあった。そのせいか、以前見た風景とは全然異なって見える。はじめて見る風景のようだった。

佐藤はまわりをきよろきよろ見回しながら、本館のエントランスに近付く。回りには人影はない。

ドアを押す。ホールは閑散として、どこにも人影が見当たらない。

受付の窓口でガラス越しになかを覗いても、誰もいない。構内案内図を探し、九鬼のいる研究センターの建物を探す。どこにもなかった。

佐藤はふと、ここには九鬼がいないような気がした。もしかしたら、A C A R へ行ったのではないかと思った。

もう一度、受付のカウンターに近寄る。横に夜間用の呼び鈴があった。力を込めて、押した。指を放して、耳を澄ます。なんの音もしない。

もう一度、押す。かなり長い間押しつづける。背を向けたとき、背後から足音がした。

「ご用ですか」

守衛らしいかなり年のいった小柄な男が近付いてきた。

「九鬼先生の研究センターは……」

「研究センター？」

「新館にあった……」

「ああ、あの研究センターは昨年閉鎖になった」

「え？ そんなことは……」

やはり、九鬼はA C A R へ行ってしまったのか。

足音がした。もうひとりの上背のある中年の守衛だった。年寄りの守衛が中年の守衛に話し掛けている。

「ああ、園部先生の研究センターね。あれは旧館ビルに引っ越したはずだ。でもいまは誰もいませんよ」

中年の守衛は「間違いない」といった調子で断言する。

「そんなはずはない。九鬼先生に会いたい。園部という若い先生もいるはずだ。旧館ビルはどこです、そのビルは……」

「ゲストハウスの向こうのほうですよ。園部先生も見えないようですがね、最近……」

「この辺……」

佐藤はいささか苛々し、案内図のまえに行き、指を差す。

中年の守衛は佐藤をじろつと一瞥し、ぶつぶつ言いながら、案内するという。そして面会票に記入を求める。

「新聞社の方か」

書き込んでいる面会票を覗き、年配の守衛が呟く。中年の守衛が案内してくるといつて歩き出した。

中年男はどんどん行く。佐藤は必死に後について行くが、だんだん離されていった。佐藤は見失わないように注意しながら、ゆっくりついていく。

だが九鬼がいないというのはどういうことか。園部まで姿を見せないとすると尋常なことではない。ふたりの身の上になにか起こったのか。

「ここですよ」

守衛が振り向く。

相当古い四階建の小さなビルだ。一階を大学が倉庫として使用しており、二階以上を研究センターが使用していたという。

「もう、大分まえから、電気も暖房も止めたままですよ」

「え？ ということは……」

「園部先生からの連絡をまって、電気のスイッチを入れたり、暖房の栓を開くことになっていたんですよ。なにしろ、あのビルは空家同然で、まえにも漏電事故や小火騒ぎを起こしたことがありましたので、そうすることにしていただけです」

「それで園部先生からの連絡が途絶えたのはいつからですか」

「えーと……、確か、あれは……」

守衛は手帳を取り出した。

大雪が降り出した日までは園部から連絡があったという。とすると、その日の夜か次の日には電気や暖房を止めたらしい。それに停電もあって、暖房用ボイラーも停止したこともあったのだ。

ビルのまわりにはまだ雪が残っていた。北側の日陰になっているビルの壁にはまだ二階の窓近くまで雪がへばりついていていた。なかに入ると、ビルのコンクリートが冷えきっているのか、底冷えがする。

佐藤は九鬼の研究室を探した。

「園部先生は三階の部屋を使っておられましたよ」

三階には研究室が二つ並んでいる。守衛が手前の研究室のドアを開く。

九鬼の研究室ではなかった。すると、残りの奥のほうが九鬼研究室か。

佐藤は守衛を残して、奥へ進む。

九鬼はいるだろうか。研究室のドアのまえに立ち、佐藤は大きく息を吸った。ノブに手をかける。開けるまえに、軽くノックしてみる。返事はない。ゆっくり、ノブを回した。

一瞬、いつもの匂いがしたような気がした。ドアを大きく開け、研究室に飛び込むと、ソファの中央にどかんと小柄な身体を落とすように座る。いつもなら、こうしたと思いがながら、佐藤はおそるおそるドアを開け、なかに覗く。

誰もいなかった。九鬼の姿はなかった。

佐藤は研究室のなかに入っていく。

応接セットのテーブルには非常食の食べた欠片が落ちている。ソファには寝袋が雑然と放り投げてあった。

奥の執務机の上に分厚い大きな封筒が置いてあった。封筒には「アキラへ、そして未来の世代へ」と上書きしてあった。

封筒を抱えると、佐藤はもう一度研究室のなかを見回した。九鬼がどこにもいないことを確かめると、研究室を出た。

第四章

31

アキラ、元気ですか。お父さんだ。

突然、お父さんだなんて、お前が戸惑っている様子が目に浮かぶよ。

アキラ、今日、偶然、おばあちゃんに会ったよ。アキラを本当のお父さんやお母さんのように可愛がって育ててくれた信二郎叔父さんと叔母さんも一緒だった。でもおばあちゃんたちとは幅が二、三メートルもある小川を挟んで立っていたので話すことはできなかった。それでも、おばあちゃんたちと会ったことで、お父さんはペンを取り、アキラへ、そして未来の世代へ残しておきたいことを書くこうと決心することができたんだ。

アキラはいまでもおばあちゃんがどこかにいると思ひ、探しつづけているんだらうか。信二郎叔父さんと叔母さんもどこかにいると思っているんだらうか。

実は、おばあちゃんは捜索がおこなわれた日に崖の下で発見された。怪我していたので病院に運ばれたが、一週間ほどして息を引き取った。叔父さんと叔母さんは大地震の津波に遭い、犠牲になったようだ。

いきなりこんなことを書いて驚くだろうが、おばあちゃんは、あの日、タクシーを下りた近くの道路端で足を滑らして崖の下へ転げ落ちたらしい。消防団員や警察の人たちで行方不明になったおばあちゃんの捜索が行われたことは知っているね。捜索隊のひとりが崖の下で動けなくなって横た

わっているおばあちゃんを発見してくれたんだ。

発見されたとき、おばあちゃんは足の骨を折って動けず、意識を失っていた。すぐ病院へ搬送された。

おばあちゃんは間もなく意識を取り戻したけど、記憶を喪失してしまっていた。でもアキラのことだけは忘れていなかった。

「アキラちゃん、おばあちゃんはここよ」と眠っていても何度も言っていた。亡くなるまえに、おばあちゃんは記憶を取り戻して、アキラのことを何度も尋ねていたよ。

ところが、今度はアキラが行方不明だった。お前も捜索隊の人たちとおばあちゃんを一生懸命探していたそうだね。そして道に迷ってしまったんだね。

お父さんは捜索隊のひとりにアキラが行方不明になっていることを知らされ、佐藤さん（もしかしたら、お前も農園で会ったことがあるかもしれない）と一緒にお前を探した。アキラらしい小学生を見た聞いて、農園の診療所へ駆けつけたが、一步遅かった。お前がそこを飛び出した後だった。

お父さんは米国の研究機関にいたが、アキラのいる実家がある地方を大地震が襲ったと知って、急いで米国から帰ってきたところだった。おばあちゃんに会わせたいとアキラを探したが間に合わなかった。

それ以来、アキラを探しているが、今日まで会えない。近くの農園にいるらしいと聞いたけど、確かめに出掛けた佐藤さんとは会えたのだらうか。

最近、その農園を出て、南へ向かったと聞いたが、いま、どこにいるの。ヒロシくんと一緒だと聞いているけど、ふたりとも元気ですか。

どう言っているのか分からないけど、とにかく早く会いたい。でも、何年も会っていないので、お前がどこの誰だという目でお父さんを見るので

はないか心配だ。

32

アキラ、お前のお母さんはアキラを生んで間もなく逝ってしまった。お父さんが米国から帰ってきたとき、ひとり残されたアキラはまだ病院の保育器のなかにいた。生まれたとき、アキラは未熟児だったんだ。

お母さんはお前を保育器から出してもらって胸に抱き締めたことがあったそうだが、お母さんはお前を未熟児で生んだことをとても気にしていたという。

そのころ、お父さんはようやく生涯賭けて研究すべきテーマを見つけ、研究に熱中していた。アキラを身籠っていたお母さんを一人にして、お父さんは米国にある研究機関ACARに出掛け、気候変動の研究に没頭していたのだ。

もちろん、お前が生まれるまえに帰るつもりだった。だがその年、猛烈な熱波が日本を襲った。お母さんは体調を崩してしまい、お前を早産してしまっただよ。

でもお母さんは体調を崩していることも、早産したことも知らせてこなかった。自宅で療養しているとき、熱波の影響で大規模停電が発生した。お母さんは保育器のなかのアキラを案じて病院へ駆け付ける。途中の暑さで熱中症に倒れ、そのまま逝ってしまった。

お父さんは勤めていた研究所を辞め、アキラを連れて実家に帰った。だがほどなくして、おばあちゃんにアキラを預かってもらって、お父さ

んは大学に戻った。そしてふたたび気候変動の研究に没頭する。

アキラは実家でおばあちゃんに育てられることになったが、お父さんは決してアキラを忘れたことはなかった。お父さんは大学に戻ったといっても、お母さんの兄であり、お前の伯父さんでもある佐々木教授のもとで研究をすることになっていたんだよ。そしてお母さんのいのちを奪った熱波をもたらした気候変動のメカニズムを解明し、熱波のような異常気象の発生を予測することにしたんだ。

アキラ、この頃はとても暑い日が続いたり、大きな台風が日本列島を襲って来ているね。これは気候変動で地球が温暖化（地球温暖化）しているせいなんだ。

この地球の温暖化にはわれわれ人間が吐き出している大量の二酸化炭素（炭酸ガス）が関係している。二酸化炭素（炭酸ガス）には地球を暖める温室効果があるからだ。だからいま地球で生じている温暖化は人間が自らつくり出しているということになるのだよ。

そこで、お父さんは熱波や巨大台風のような異常気象を予測する研究をはじめたんだよ。人間社会に大きな被害をもたらす異常気象がいつどこで発生するかを事前に予測することができれば、多くの人びとを助けることができるはずだ。それに、異常気象を発生させている一因をわれわれ人間がつくり出しているなら、人間自らその対策もすべきだと思ったからだよ。

気候変動の研究をつづけているとき、佐々木教授が巨大台風でのちを奪われた。

こんなこともあって、お父さんはますます研究に没頭することになった。研究を進めていくと、地球温暖化は地球の気温を高めるだけでなく、大気や海洋のシステムをも攪乱することが分かった。これだけでなく、地球の

内部のマグマやマン托ルの流動にも影響を与えることが分かってきた。地球温暖化は地球システム全体を攪乱していたのだよ。

となると、気候変動の予測精度を高めるには地球全体システムの動きから調べる必要あるのではないか。そこで、データやスーパーコンピュータなどの研究設備はもちろん、研究スタッフも揃っているところを探し、米国のACARという研究所で研究することにしたのだ。

その結果、アキラをおばあちゃんのもとで何年も預かってもらうことになってしまったのだよ。おばあちゃんのほかにも、叔父さんと叔母さんがお前をわが子のように可愛がってくれていたんで、お父さんはすっかり安心して米国へ行ったのだった。

予測の精度を上げようと、米国へ行ったのに、アキラたちを襲った大地震と大津波を予測することができなかった。叔父さんと叔母さんが犠牲になった。おばあちゃんも亡くなってしまった。

こんなことになってしまって、なんとやっていいのか、全く言葉がない。悔いても悔い切れない。これはアキラをひとり残して米国へ行ったわたしに対する天罰だったのかもしれない。

33

お父さんがいまいる研究センターの古い小さなビルは、三日間ひっきりなしに降った大雪で三階の窓まで雪が積もり、すっかり雪に埋もれてしまっている。

地球が温暖化しているはずなのに、何日も大雪が降りつづくなんで、地

球温暖化なんてウソパッチと思うかもしれない。でも地球温暖化はウソではない。現実に起きていることなんだよ。

地球温暖化でも大雪が降ることは不思議なことではない。地球温暖化というのは、地球上の平均気温が上がると言うことで、地球全体が満遍なく上がるということではないからだ。大雪が降るところもあれば、熱波で酷暑に見舞われるところもある。地球上には非常に気温が高いところもあれば低いところもあって、それらを平均した気温が高くなっていくのが地球温暖化なのだ。

この何年か、地球では温暖化が進んでいると考えられるが、地球の気温変動の原因はさまざまある。

大きく分けて、地球の軌道の変化や太陽活動の変化などによる太陽からのエネルギー照射量の変化といった地球の外からの原因によるものと、二酸化炭素（炭酸ガス）などの温室効果ガスの大気中濃度変化といった地球内の原因によるものがある。

いま起きている地球温暖化は二酸化炭素（炭酸ガス）などの温室効果ガスの大気中濃度が急増しているのが一因だよ。

たとえば、大気中の二酸化炭素（炭酸ガス）濃度は、この一五〇年急ピッチに増え、以前の二倍近くになっている。人間が大量に石炭や石油などの化石エネルギーを使い出してから、急に増えはじめたのだ。とにかく、僅か一五〇年程度でこれほど増加した例は地球の歴史上あまりない。これによって地球システムが攪乱し出し、地球全体に影響をおよぼしているのだよ。これまで日本列島は何度も熱波や酷暑に見舞われたし、大雨や日照りあるいは超巨大台風といった異常気象が年中行事化してしまっている。このたび、この地方を局地的に襲った大雪もそのひとつだね。

地球温暖化すれば、異常気象だけではすまない。さまざまなことが起こる。各地の水河や万年雪はもちろん、北極圏や南極大陸の水床も融け出す。最近の海面急上昇は北極圏にあるグリーンランドの水床が融け出し、そして大滑落を起こしたからだ。海面急上昇だけではない。火山噴火や地震も増加するのだよ。

お父さんはこれまでこれらの異常気象はもちろん、地球温暖化によって引き起こされるさまざまな異常気象の予測を研究してきた。これからどんなことが起こるかについても研究している。

地球の温暖化には公転軌道の変動などによる定期的起こるもののほかに、突発的に起こるものがあることが、グリーンランド水床の分析によって発見された。これは「垂間氷期」と名付けられ、ごく短期間の現象だという。一回が数百年から数千年の期間で、初めは気温が急激に上昇する。そしてピークに達すると、寒冷化がはじまる。初めはゆっくり進み、終わりが近くなると急速に進んで終わりを迎えるらしい（アレー、ペンダーらの分析）。

お父さんは今回の地球温暖化は突発的にはじまるタイプのものだと思います、これを対象に研究してきた。そして今回の地球温暖化による気温上昇はピークに達しており、そろそろ寒冷化の段階がはじまると思っている。

だが果たしてそうか判然としないところがあるんだ。なにしろ、大気中の二酸化炭素（炭酸ガス）濃度がいまだに増加しつづけているからだ。人間活動にともなう二酸化炭素（炭酸ガス）の大量排出によるものだ。

このような二酸化炭素（炭酸ガス）の増加によって、地球温暖化はさらにピークを重ねることになるのか、それともそのまま寒冷化へと進むのか、よく分からないのだよ。

それはそれとして、これまで研究してきた範囲で、アキラやアキラたち未来の世代へ、これまで解明してきた成果を伝えておきたいと思う。

これから地球上でそして日本列島で起こるであろうことを可能な限り具体的に話すことにしよう。そして現代文明の爛熟期にある人間社会がなぜこのような事態に陥ったのかについても言及しておこう。来るべき人類の未来を考えるために、いささかでも参考になればと思う。

34

現在、地球の大気中の二酸化炭素（炭酸ガス）濃度は増えつづけている。いまなお減る気配はない。これは人間活動にともなう石炭や石油などの化石燃料の燃焼によって大気中に放出される二酸化炭素（炭酸ガス）が主要因だ。

そのほかにも、このような人為的な二酸化炭素（炭酸ガス）の発生源はいくつもある。たとえば、変わったところで、家畜ことに牛が吐くゲップにも二酸化炭素（炭酸ガス）は結構含まれているんだ。世界中で飼育されている家畜の数は何億頭にもおよぶので、吐き出すゲップの量もかなりのものだろうね。

大気中の二酸化炭素（炭酸ガス）には熱を蓄える「温室効果」がある。二酸化炭素（炭酸ガス）のようなガスは温室効果ガスというが、このようなガスは二酸化炭素（炭酸ガス）のほかにもいくつかある。メタンや水蒸気などだ。

いま進行中の地球温暖化は、人間活動にともなう二酸化炭素（炭酸ガス）

などの温室効果ガスの急増が大きな原因となっている。人間が自ら地球温暖化の引き金を引いたということだ。このことを忘れないでほしい。

それから、まえにも言ったが、地球温暖化は地球の平均気温が高くなるだけではでないということだ。地球温暖化の果てに、長期にわたりいろいろなことが起こり、大気、海洋、地殻が変動し、人間社会にさまざまな影響がおよぶことになるだろう。

まえもって言うておきたいことは、このふたつだ。

35

いま、地球温暖化はひとつのピークを越えて、寒冷化へ向かいつつあるように見えるが、いまだに二酸化炭素（炭酸ガス）の大量放出が続いている。このため、ふたたび急激な温暖化へ転じるかもしれない。そうなればこれまで起きたようなことが倍加して繰り返えられることになるだろう。

それはそれとして、寒冷化がはじまれば極めてゆっくりしたペースで進んでいくとして話を進めることにしよう。今後も二酸化炭素（炭酸ガス）の大量放出が続くかぎり、もしかしたら、温暖化のピークのいわば高原状態が継続するかもしれない。これは別に触れる。

地球温暖化の果てに、いま地球に生じている異常現象は自転軸の傾斜だ。これは極めて緩慢な動きで、もしかしたら途中で停止するかもしれないのだ。かといって、自転軸の傾斜増加は未来の人類に滅亡の危機をもたらすような甚大な影響をおよぼすことになるので、今後常時注視する必要がある。

自転軸傾斜の動きが停止するためには、グリーンランド氷床大滑落によって生じた重量不均衡が是正されるような事態が生じることだ、それをもたらす可能性があるのが西南極大陸氷床の崩壊、南極海への大滑落だろう。

その発生可能性については、こう考えている。

グリーンランド氷床大滑落によって、地球上の熱配分に支配的な機能をもつ海洋大循環（熱塩大循環）が機能不全に陥った。これで北大西洋へ北上する大暖流（メキシコ湾流）が弱まっているが、それに応じて、南極海の海水温が急速に上昇し出しているのだ。

南極海の海水温上昇は西南極大陸氷床の崩壊大滑落を促進するはずだ。だがいまのところ、なぜかまだ崩壊の徴候すらみられない。そう長くない間に西南極大陸氷床の崩壊がはじまり、そして大滑落にいたると予測するが、いつ現実となるか。

これが自転軸傾斜の動きを停止する条件として、その可能性が一番高いが、つぎに考えられるのが、高緯度が急冷化して北極圏一帯が結氷モードに入ることだ。

北極圏の海面が凍り、一帯に雪が降り積もり一面白銀の世界になると、太陽光線の殆どが反射されてしまい、ますます寒冷化に拍車がかかる。こうして北極圏一帯が結氷モードになり、北極海の海水が凍り、氷をつくる。これによって付近の海水の塩水濃度が増していく。そしてついに熱塩大循環のための深層水の生成が本格化し、海洋大循環が始動するのだ。

これによって、メキシコ湾流の北上が再開し、大量の水蒸気を発生させ、北極圏に大雪をもたらし、氷床を成長させる。こうして次第にもとの状態へと近づいていくのだ。

だがこれにはかなりの長い時間がかかる。「亜間氷期」における寒冷化

の過程に匹敵する時間か必要かもしれない。その間、自転軸傾斜がどんな動きをするか予測できない。

現在のところ、確かなことは、地球の自転軸が傾斜を深めつつあることだ。いまのところ、そのスピードは極めて遅いが、いつスピードをあげるか分からない。

これをなんとか阻止する方法がないか。これが一番の課題なのだ。

僅かに期待できることは、上に指摘した西南極大陸氷床の大滑落と北極圏の結氷モードだ。このいずれかを積極的に押し進めようとしても、双方に難点があるのだ。

前者には、これによって海面がふたたび数メートル急上昇することだ。

これで世界は、グリーンランド氷床分に加わり、約一五メートルの海面急上昇に直面することになる。

すでにかんがりの陸地を失ったところではさらに失うことになるし、第一回目の海面急上昇で辛うじて難を免れた沿岸都市も、数メートルの海面急上昇が加わることで致命的な被害を被ることになるかもしれない。後者は、いまなお温暖化を進める二酸化炭素（炭酸ガス）の大量放出がつづいていることを考えれば、長い時間のうちに起こるかわからず、実現可能性は極めて低いかもしれないということだ。

ひとつ指摘しておけば、もし自転軸の傾斜が進めば、高緯度地域の寒冷化が急速に進み、北極圏の結氷モード入りは早まるかもしれないが、こうなれば、人類の生存可能環境を極端に狭めることになりかねないだろう。

とにかく、いずれにしろ、今後はさらに過酷な状況が出現することになりかねないということだ。

以上を踏まえ、参考のために、このうち一番起こりそうなシナリオを描

いておくことにしよう。

いま、地球システムは攪乱状態にある。地球システムは現在、地球をとりまく大気圏や水圏（海洋など）、それに地圏（地殻、マントルなど）といったサブシステムを基盤とし、これに生物生態系を中心とする生物圏と現代文明を駆使する人間圏が形成され、これらで全体を構成している。だが、いま、大気圏では大気大循環が変調をきたし、水圏では海洋大循環が機能不全に陥っている。地圏ではマントル流動が変わり、マグマが噴き出し、地殻変動がはじまっているのだ。

このような現在の地球システムの攪乱状態は、大気中の二酸化炭素（炭酸ガス）濃度増加に起因する地球温暖化の果てに生じ、深刻化したものである。とすれば、今回の地球温暖化をもたらした起因が改善されなければ、このような地球システムの攪乱状況は未来永劫につづくことになる。

未来のシナリオはこのような状況を前提として、これに追加して生起する極端な現象ともいべき主だったなエピソッドが中心となるであろう。

突発的な気温上昇によってはじまる「重間氷期（急激な気候変動）」は気温がピークに達すると寒冷化がはじまるというが、これになぞらえて今回の地球温暖化をみると、温暖化は一度ピークを迎えたとみえる。

グリーンランド氷床大滑落がそのピーク時に発生した一大エピソッドだった。これにより北大西洋における深層水生成が阻害され、海洋の熱塩大循環が機能不全に陥った。これを契機に、地球は温暖化から寒冷化へと向かいはじめたと考えられるのだ。

お父さんがいまいる大学の研究センター付近にかつてない大雪をもたらしたのも、これと関係があると思っている。だが寒冷化がはじまったとはいえ、地球が一直線で寒冷化へ向かうかという点、そうではないだろう。

「亜間氷期」におけると同じように、今回はじまったとみられる寒冷化も、最初はかなり緩慢に進み、最終段階にいたり急速に寒冷化して今回の地球温暖化のサイクルが終わりを迎えることになると思う。その期間は数一〇年から数一〇〇〇年だろう。

緩慢な寒冷化の時期がかなり長くつづくことになるが、この間、これからも各地では何回も酷暑と酷寒を交互に繰り返すことだろう。大雨や突風、それに狂風が吹き荒ぶ日が多くなる。偏西風や黒潮などの大海流の蛇行も頻発するし、噴火や地震も通常より多い。

これらはすべて地球システムの攪乱と関係があることで、時と所を変えて四六時中地球のどこかで発生を繰り返す。

要するに、寒冷化の進行期間は地球システム攪乱の収束期でもあるが、気候変動はつづき、極端な異常気象が頻発するうえ、さらに、さまざまな地球異変が起こることだ。地球システムが攪乱を鎮めるために、試行錯誤を繰り返す時期でもあるからだよ。

ところで、アキラたち次世代にとつて最も深い関係にあるこの一〇年か数一〇年かのうちに起こる可能性のある大きな出来事は、やはり西南極大陸氷床の崩壊だろう。

グリーンランド氷床大滑落によつて、北半球、ことに北極圏は寒冷化を強めているが、これに対して、南半球、ことに南極圏の温暖化が一層進む（寒冷化のなかで温暖化とは不思議と思われるかもしれないが、何度も言うが、地球温暖化は地球の平均気温の上昇であつて、局地的な温暖化とは異なる）、氷床の融解が進むことだろう。一方、南極大陸の火山噴火が続発すれば、これが契機となつて、一気に西南極大陸の氷床が南極海へ滑落するかもしれない。

現在、西南極大陸の氷床は極めて不安定な状態にある。氷床が海に競り出ているところが多い。それに氷床が載っている岩盤の標高が低く、海水を被っている箇所が広がっているのだ。そのうえ、海面急上昇以後、これらの氷床が浮力で海水によつて持ち上げている状態にある。

このまま、南極大陸の温暖化がさらに進み、南極海の海水温が高まれば、西南極大陸の氷床は崩壊し出し、滑落をはじめることだろう。

ただ問題は、西南極大陸氷床の大滑落が自転軸傾斜の動きを止めるかどうかだ。

最悪のケースは、自転軸傾斜の動きとは無関係に海面を数メートル急上昇して終わることだ。この可能性も否定することはできない。むしろ、この可能性のほうが大きいかもしれない。西南極大陸氷床の広い範囲が海水に浸かっており、大滑落のインパクトがグリーンランド氷床大滑落よりかなり小さくなるおそれがあるためだ。

もうひとつのケースとして、西南極大陸氷床の大滑落がさらに先に延びる場合が考えられる。以前は西南極大陸氷床大滑落がグリーンランド氷床大滑落につづいて起こると考えていたが、それが延びているからだ。

西南極大陸氷床大滑落が延びれば、それだけ北半球の寒冷化が進み、北極圏はもちろん、ユーラシア大陸、ヨーロッパ大陸の高緯度一帯が氷で覆われることになる。

要約すると、今後数一〇年は激しい異常気象の発生がつづき、北半球は寒冷化傾向が強まっていくな。南半球は温暖化し、南極大陸氷床の融解が進む一方、西南極大陸で氷床滑落が発生するおそれがある。

一方、自転軸傾斜は見るべき進展はないが、遅々とした動きがつづくだろう。ただこの間も人間活動にともなう二酸化炭素（炭酸ガス）の大量放

出がっつき、産業革命時の大気中濃度の二倍を超えるようなことになれば、ふたたび地球温暖化モードが広がり、新たなピークを迎えることになるかもしれない。この場合には当然寒冷化の進行は停止することになるだろうが、地球システムはさらなる大攪乱を起こすのか、それともこれまでのことを繰り返すだけなのか見当がつかない。とにかく、地球にどんな事態が生ずるか分からないことが多いのだ。

これが地球上に生起する地球温暖化関連の当面の予測だが、日本列島においては、おおまか言って、北東日本は寒冷化傾向で、西日本は温暖化傾向といつてよい。天候は狂暴性を増し、目まぐるしく変わることになるだろう。これとともに、海岸線の長い日本列島においては、海面急上昇に備えることが不可欠だ。

要は、いままで以上に気候変動や海面上昇などの異常事象に気をつけることだね。

36

アキラ、日本列島は今後ますます厳しさを迎えることになる、これは間違いない。

ところで、以前、農園にいたそうだが、いまだここにいるの。

念のために言っておくけど、日本列島は北東日本でも西日本でも、農作物の生育にとって厳しい気候がつづく。天候不順は常態化し、寒暖の差は激しく、日中の気温変化も大きく、いままでのやり方では農作物の不作が避けられないだろう。

かといって、農園を離れないほうがいいね。今後は日本に限らず、世界中で食糧不足が常態化するおそれがある。人が多く集まる都会では食糧の奪い合いや略奪が横行することだろう。

それゆえ、今後の世界では、食糧の自給自足を旨とする農園は生きていくうえで欠かせないものとなっていくにちがいない。

それにまた、いつ海面が急上昇するか分からないから、日本列島にいる以上、沿岸付近ではいままから数メートルの海面上昇に備えておくことだ。

それはそれとして、日本列島の沿岸部はグリーンランド水床大滑落の際の海面急上昇ですっかり形を変えてしまったが、沿岸域には危険が多い。要注意だ。

日本列島の沿岸には原子力発電所などの放射性物質の利用施設のほかに、原油などの燃料タンク、さまざまな化学物質を貯蔵する工業用原料タンク、化学工場や製油所、火力発電所、各種の製品倉庫などが軒を連ねていた工業地帯や工業団地が広がっていた。そしていまではそれらはすべて海中へ没しまつていたので全容は分からないが、これらの諸施設には危険物質や有害化学物質が一杯蓄えられていた。

それらの危険物質や有害化学物質がいま、海中でじわじわと漏れ出している。そのため、沿岸海域の海水はこれらの物質で著しく汚染されているのだ。

ことに、原子力発電所や放射性物質の利用施設、化学工場や製油所が危険だ。これらから漏れ出す物質のなかでも放射性物質は厄介だ。

放射性物質はなかなか毒性が消えない。なかには放射能が半減するのに一万年以上もかかるものさえある。それに、たとえ海水で希釈されたとしても、生物濃縮がある。生物の食物連鎖によって濃度が何万倍にも濃縮さ

れていくのだ。

ごく低いレベルの放射性物質でも、汚染海域に棲むプランクトンのような小さな生物を餌にする小さな魚がさらに大きな魚に食べられていく過程で、放射性物質は倍々に濃縮されて、最後には（人間の口に入るころには）何千万倍何億倍にも濃縮されてしまうのだ。

このような魚を食べると、食べた人は体内に大量の放射性物質を取り込むことになる。身体の脂肪組織に蓄積された放射性物質は、そこで放射能を出しつづけるのだ。こうして放射能に被爆（体内被爆）することになる。

沿岸海域に流出しているのは放射性物質だけではない。さまざまな毒物や有害化学物質も多いのだ。

西南極大陸氷床の滑落によって、数メートルの海面急上昇が生ずれば、これらによって汚染されている海水が陸地深く侵入してくることになる。そして今度は汚染海水が人や動植物、土壌を汚染することになる。

とにかく、不用意に、海岸付近には近付かないことだ。そして決して確かめないで沿岸で獲れた魚介類を口にしてはならない。土壌が汚染されていれば、農作物も危険だ。また沿岸部には汚染海水の飛沫が飛んでくるから、いたずらに野生植物も口にすべきではないと思う。

37

実は、気候変動の研究をはじめたころには大気中の二酸化炭素（炭酸ガス）濃度が増えると、その温室効果によって気温が上昇し、地球温暖化を招くぐらいにしか考えていなかった。

ところが、そうでなかった。地球温暖化の果てに、大気大循環が狂いだし、海洋大循環が機能不全に陥った。大気システムが攪乱し、海洋システムが攪乱を起こしたのだ。さらに、マントル流動にも影響をおよぼしていった。そして最終的には、地球システム全体を攪乱してしまったのだ。では、なぜ、こんなことになったのか。一体、なにが原因なのか。切っ掛けは温室効果のある二酸化炭素（炭酸ガス）の大気中濃度が急激に増加したことだ。

大気中の二酸化炭素（炭酸ガス）は太陽光線を透過させるが、これを受けた地上の物体は赤外線を輻射する。赤外線は二酸化炭素（炭酸ガス）を透過できず、蓄熱され、ふたたび地上へ赤外線を放射する。この繰り返しによって、地上付近が温室のなかのように暖まっていくのだ。

これが温室効果であるが、問題はこの原因物質である二酸化炭素（炭酸ガス）が人間活動によって大量に排出されるものだということだ。

なぜ、人間は大量の二酸化炭素（炭酸ガス）を排出するのか。それは石炭や石油などの燃焼するとき二酸化炭素（炭酸ガス）を発生する化石燃料を大量に使用するようになったからだ。

大量の二酸化炭素（炭酸ガス）を大気中で排出すると、なぜ、大気中の二酸化炭素（炭酸ガス）濃度が増加するのか。

二酸化炭素（炭酸ガス）は壊れ難い安定した長寿命なガスである一方、地球の大気はいわば有限な閉ざされた空間なかに存在するものだからである。例えて言えば、地上で石炭や石油を燃やすことは、閉め切った部屋のなかでガスを燃やす（二酸化炭素（炭酸ガス）の排出）ようなものなのである。

要するに、人間が地球上で大量の化石燃料を使用し、大気中に大量の二

酸化炭素（炭酸ガス）を放出してきたということだ。

では、なぜ人間がこうも野方図に大量の二酸化炭素（炭酸ガス）を大気中に放出しつづけたのだろうか。

人間が大量にエネルギーを求めたのは産業革命以降だ。内燃機関を発明し、大量のエネルギー源が必要になったのだ。そしていままで薪が主体だった燃料が石炭へと移り、さらに石油へと変わっていく。

いままで利用し難くかった石炭が利用できるようになって、一気に技術開発が進み、産業が盛んになっていった。産業革命はエネルギー革命であった。

英国ではじまった産業革命は、瞬く間のうちに当時の先進諸国へ飛び火する。さらに、技術革新が進み、エンジンの発明で自動車が製造され、普及していく。

こうして石炭や石油といった化石燃料が大量に使われ出し、大量の二酸化炭素（炭酸ガス）を排出することになったのだ。

産業革命が出発点となつて、世界の工業生産は拡大していった。これに拍車をかけたのが、資本主義経済システムであり、大量生産大量消費大量廃棄システムであった。これらは必然的に市場の拡大をめざし、

グローバル化を指向する。市場の拡大はさらなる大量生産大量消費大量廃棄を呼び起こす。

これに呼応するように、化石燃料の大量使用が進み、二酸化炭素（炭酸ガス）の大量放出がはじまる。ことに、第二次世界大戦が終了した二〇世紀後半になると、石炭から石油へ燃料転換が急ピッチで進む。

世界経済は拡大し、人口爆発も相俟つて、石油の大量消費がはじまった。そして二酸化炭素（炭酸ガス）の大気中濃度は年間約五ppmの割合で増

加し出したのだ。

38

二酸化炭素（炭酸ガス）の大量放出が地球温暖化をもたらすと分かっているのに、なぜ人間は止めることができないのか。

お父さんは何度も二酸化炭素（炭酸ガス）の大量放出を止めるように訴えつづけてきた。でも誰も聞く耳を持たなかった。

国連の呼び掛けで、世界中の国々が集まって二酸化炭素（炭酸ガス）排出量削減交渉を行ってきたが、なかなか合意に達することがなかった。地球温暖化が進んでいるのに知らぬふりをしたり、人間活動によって排出される二酸化炭素（炭酸ガス）が原因でないと行ってみたり、また相手のせいにして世界に二酸化炭素（炭酸ガス）の排出量を削減する行動はなかなかとれずにいたのだ。

どんな理由があれ、現実には自分たちが二酸化炭素（炭酸ガス）を大量に排出しており、かつ、二酸化炭素（炭酸ガス）が地球温暖化に寄与しているなら、みんな積極的に排出量を削減してもよさそうなのに、なぜかそうしようにとしないのだ。なぜ、国々がそんな行動を取るのか。自分たちも地球温暖化の被害を被るはずなのに、なぜだ。

地球温暖化を甘く見ているのか。こう思い、これまでに地球温暖化の果てに生じる大災害を予測して、何度も警告を発してきた。それでも誰も真剣に対策を講じようとしなかったんだ。

一体、なぜか。いまもって分からない。危険を知って反応するのが当然なのに、なぜ反応しないのか。なぜ危険を回避する行動をとろうとしないのか。

現代人は高度な現代文明を築き上げ、エネルギーを湯水のように使い、昔の王侯貴族のごとき生活を多くの人が享受している。それが脅かさねようとしているのに、知らぬ顔をしている。まるで「茹で蛙」のように、鍋の水が熱くなっているのに気付かずにいるのだ。

蛙を水の張った鍋に入れ、火にかけると、水が熱くなってもなかなか気付かず、飛び出すことも忘れ、ついに茹だってしまうという。

現代人がこうなるのはなぜか。現代人が現代文明がもたらす危険に気付かずにいるのはなぜか。

現代人のDNAに危険感知能力が欠損しているからなのか。

それにしても、現代文明を支えるエネルギーに二酸化炭素（炭酸ガス）を発生させるような化石燃料を使用して平気なのはなぜか。現代文明の担い手が繰り返し危険に対して目を閉じているのはなぜか。

現代文明はこの一〇〇年巨大化高度化大量化への道を邁進しつづけた。現代文明は急速に巨大化高度化大量化し、人口爆発と相俟って、いまや地球の資源を食い潰す勢いだ。それなのに、現代文明はさらなる巨大化高度化大量化を追い求めていまなお進みつづけている。

困ったことに、現代文明の巨大化高度化大量化とともに、危険も巨大化高度化大量化しているのだ。

現代文明における危険の巨大化高度化大量化は、一瞬で人類を破滅させる大量の核兵器や巨大事故の危険のある巨大原子力施設、それにじわじわと人間を蝕み、人類滅亡へと追い込む地球環境の悪化、それに加え、世界

人口の爆発的増加と大量消費による地球資源の枯渇とつづく。

現代文明の巨大化高度化大量化の過程は人類破滅の危険の巨大化高度化大量化でもあったのだ。

なぜこうなったのか。

これには現代文明の生い立ちを振り返る必要がある。

今日、グローバルに広がっている現代文明は、数一〇〇年前当時の先進諸国が集まっていたヨーロッパで生まれ育った近代科学をもとに、科学と技術を結合させて築き上げた近代西洋文明を基礎とするものだ。それゆえ、現代文明には近代科学の理性本位の合理主義や現世本位の個人主義といった考え方が染み付いている。そこから人間の優位性による自然支配や強い人間中心の現世利益最大化を旗印に、科学技術の巨大化高度化大量化が押し進められ、今日の現代文明世界が築かれていったのだ。

とにかく、当時の世界の列強がヨーロッパに咲いた近代西洋文明を育て、力にまかせて世界へ広げていき、今日世界を支配する現代文明となったといえよう。

ヨーロッパという一地方の、いわばローカルな文明にすぎなかった近代西洋文明が適用範囲を広げ、世界文明化したということだ。これによって、近代西洋文明に内包する矛盾や問題点が拡大され、さらにさまざまな問題を派生することになった。

近代西洋文明は人間による自然（地球）支配を是認し、力による自然征服と利益追求を当然とする。このため、利益追求はより効率よく、より多くを旨とし、自然を勝手気儘に作り替え、野方図に利用することになる。そこでは利益はいま生きていく人間中心に考えられ、将来のことは無視もしくは軽視されるのだ。

また、個人主義の支配する利益追求第一の社会では、強いものが弱いものを押し退け、一人ひとりが我れ先に儲けの多いものを選び、誰よりも狡猾く立ち回ろうとすることになるのだ。

このような利己的な自分本位の行動が非難されることはなく、むしろ推賞され、ごくあたりまえのことと認めるところは、一体、どんな社会だと思ふかな。

こんな社会では、弱肉強食の競争があたりまえで、人間の行動は利己的で、目先の利益を最大にしようと極めて短期的視野で行動がなされることだろう。そして利益にならないものは打ち捨てられ、省みられることがないのだ。

地球に無尽蔵の資源があり、無限の広がりがあれば、地球上でどんな野方々な行動をとっても大した影響は出ないだろう。一時、不均衡が生じても、時間とともに、やがて平準化均衡化していくからだ。だが地球には限られた資源や空間しかない。地球は有限なものだ。有限な地球でこのような行動をとれば、どうなると思ふかな。

それはまるで、窓を閉じ切った小さな部屋のなかでものを燃やしたり、タバコをぶかぶか吸うようなものだ。瞬く間に、部屋は煙りやタバコの匂いで充満し、なかにいるひとは煙りに苦しみ、やがて息も絶え絶えになっていくことだろう。

これを避けようとするれば、ひとはどんな行動をとることになるのだろうか。

人間は地球が広大で、無尽蔵の資源や無限に広がる空間があるように錯覚し、野方図に振舞ってきた。だが現代文明が巨大化高度化大量化したいま、地球の有限性が明らかになった。地球温暖化がその証拠のひとつだ。

それにもかかわらず、人間が従来の行動を変えようとはしないのだ。さらに大量のエネルギーを使い、資源を貪りつづけ、大量生産大量消費大量廃棄を繰り返している。

現代文明を謳歌する人間の飽くなき利益追求行動によって、いまや、地球は荒れ放題に荒れ果ててしまっている。

それなのに、人間は地球環境悪化を他人事のように思い、いまだに狂ったように地球を貪りつづけているのだ。その結果が、いま地球上では地球温暖化などさまざまな地球環境問題が噴出し、人間が住処とする地球環境がすっかり荒れ果ててしまった。

それだけではない。効率よく利益だけ追求する社会は、目先の判断で、無駄なものや邪魔なものを極力排除しようとするので、社会構造は多様性を喪失し、極めて単純な構造となる。このような構造の社会では効率はよいが、災害には極めて脆いだけでなく、災害を拡大し、再生産するものだ。大災害が大災害を呼び、やがて人類を道連れに破局へと進むのではないかとおそれているところだ。

それはそれとして、地球温暖化はもちろん、地球温暖化の果てに出現するもろもろの大災害は、まさに現代文明のもとの人間活動が生み出した人為的災害、まさに、現代文明の災害だったということだ。

39

これまで気候変動の研究を通して、異常気象はじめ、地球システムの攪乱によって生じるさまざまな異常事象の予測を行い、その都度、社会に対

して警告を発してきた。だがそれで本当によかったのだろうか。いまになって、もしかしたら、とんでもない間違いをしでかしているのではないかという思いがしてならないのだ。

異常気象などを事前に予測することによって、その原因対策が進むものと期待したが、原因対策（たとえば、地球温暖化では二酸化炭素（炭酸ガス）排出量の削減など）には誰も耳を傾けようとせず、被害の回避や損害の抑制といった結果面でのいわば対症的治療的対策、それも不十分なものしか返ってこなかった。このことはいまもって変わらない。

一体、これはなぜか。現代文明は人類を道連れに大破局を迎えるまで走りつづけるほかないというのか。それとも、現代文明を謳歌しつづける人間は対症療法だけで十分現代文明を延命できると思っているのだろうか。

もしそうなるなら、予期に反し、これまで懸命に試みてきた事前の予測を通して、現代文明の延命に加担していたことになるのではないか。

自分では善かれと思って為しても、仇となることもあるのだ。いや、予期しない正反対のことを押し進めてしまうことさえあるのだ。

現代文明の最大の問題点はそこにある。現代文明では利益追求を第一に掲げているが、これが問題なのだ。現代文明が行動原理としている利益最大化こそ、地球温暖化の元凶なのだ。

なぜか。利益の最大化を図ろうとするものには、それを阻害するものを極力排除しようとする力が働くからである。自然（地球環境）を支配し、自然を利用して利益をあげようとすれば、地球環境が汚染しようが、森林が消えようが、生物の多様性が失われようが、生態系が崩壊しようが、地球が温暖化しようが、利益確保のまえにはこれらはどうでもいいことなのだ。利益を最大にするには利益を減らすものを徹底して取り除かれなければ

ばならないというわけだ。

まえにも指摘したが、利益最大化指向の社会では人間活動は効率追求が優先する。これによって、社会や環境がより単純化していく。たとえば、地球の生態系では、人間の開発行為によって多様性の多くが失われたり、極めて単純化してしまっている。ことに、農業分野では効率化のために農薬が大量に使用され、生態系の多様性を損なっている。そのうえ、生産する農作物の種類が激減している。

さらに、遺伝子組み換えが行われ、農薬の効き目を高め、さらなる単純化効率化が進行しているのだ。かつては、何百種類もあった穀類がいまではトウモロコシ、コムギといった三、四種類の穀類で世界の穀物生産量の大半を占めているという。

効率を求めて行なわれる単一農作物の耕作には、病害虫に弱い難点がある。これを大量の農薬散布によって克服しているが、これには農薬の残留や生物生態系への影響が問題になる。これらの問題を回避するためには遺伝子組み換えによってある種の農薬の効き目がいい病虫害に強い品種の開発がなされ、植えつけがはじまっている。だがこれによって、さらに生物生態系が乱され、一層単純化が進むことになる。

これは農業分野の一例に過ぎないが、この種のこととは各分野でおこなわれているのだ。人間社会も例外ではない。大量生産大量消費大量廃棄システムののもとで、人間の思考や行動までもが単純化の傾向にある。いや、新聞広告やテレビコマーシャルを通して消費行動や嗜好を誘導し、人間行動そのものの単純化が図られているのだよ。

とにかく、利益追求社会は単純化指向社会なのだ。それはまた、脆弱な社会でもある。社会のような巨大システムは、単純化すればするほど、脆

弱性が増すのだ。

そのうえ、さらに問題なのは、価値基準がいま生きている人間を基準としていることだ。現世人間本位の考えのもとに、利益追求がなされたらどうなると思うかね。

いま生きている現在の人の利益が優先されれば、未来の人の利益は二の次になる。いや、未来そのものが軽視されるか、無視される。

今日の現代文明社会では、すべてが現世の利益が第一で、ごく近未来でもなかなか目が届かないし、遠い未来のことなど成りゆきまかせか、知らぬふりだ。

たとえば、放射性物質の処理方法が未開発のまま手を出してしまった原子力エネルギー利用はどうか。かつて、日本列島では沿岸部に何十基もの原子力発電所が設置されていたが、いまではこれらがすべて海面急上昇によって海中へ没してしまったものの、いまもって放射性物質を漏出しつづけ、放射能汚染を拡大している。

原子力発電所では発電したあとに高レベルの放射性廃棄物が残る。これには放射能の半減期が一万年を超えるものもふくまれるが、いまだにこれといったうまい処理方法が開発されていない。それにもかかわらず、原子力発電所を建設し、発電した電力を生活に生産に湯水のように使い、豊かで快適な日々を過ごした。

いまに生きるわれわれは目先の利益に溺れ、未来に世代に一万年にもおよぶ厳重な管理が必要な厄介な高レベルの放射性廃棄物のみを残しているのだ。未来の世代が廃棄物の有効利用を開発してくれるだろうことを期待しているかどうかは知らないが、土台、一万年もの厳重な管理は可能だろうか。

一事が万事、こんな調子だ。

今日の医療行為や医療方法にも首を傾げたくなるものが多い。金儲けのための薬付けと言われる現象などは論外だが、スパゲッティ症候群といわれる延命のための医療行為も広く行なわれているという。

単なる延命のための医療行為が大手を振って行われているのも、現世の人間本位思想と無関係ではないだろう。それとも利益第一主義のなせる業か。生命尊重の観点からの医療行為があるなら、人間の尊厳からの医療行為があってもいいのではないかと思うが、これもまさに現代文明の限界というべき問題なのか。

不利益な面や不都合な面を蔑ろにしたり、目を瞑ったりするのは、なにも原子力分野や医療分野ばかりでない。遺伝し組み換えやナノ技術など、気になることが多い。出回っている数多くの化学合成物質にも危険が潜んでいる。

現代文明にはおかしなことだらけだ。

地球が有限で、資源にも限りあるのに、人間は大量生産大量消費大量廃棄を止めようとせずに、さらに大量生産大量消費大量廃棄を押し進め、消費頼みの経済成長を追い求めて走りつづけている。人間は科学万能思想のもとに自然征服に科学技術を利用したばかりか、金儲けの方法やシステムまで発明してしまい、その挙げ句に、それによって人間が人間を支配することになったのだ。

現代文明は行き着く先まで行ってしまったのだ。このまま暴走をつづけるなら、現代文明はやがて人類を道連れに大破局を迎えるほかない。

どうする、アキラ。このまま、成り行きに任せるか。それとも、現代文明に代わる別の道を選ぶか。

日本はそして世界は、まさに岐路にある。ことに、日本は満身創痍だ。地球温暖化の果てに、日本列島は痩せ細り、四分五裂し、人口は半減してしまった。

現代文明を最大限謳歌し、現代文明漬けた日本にはかつての面影はなく、四分五裂した満身創痍の身を横たえ、青息吐息の状態だ。

アキラ、いまがチャンスだ。人びとが現代文明を謳歌したときに戻ろうと動き出すまえに、現代文明の転換を図るのだ。

さあ、はじめよう。地球を支配しようとした現代文明と決別し、地球とともに生きる道を探そうではないか。

前へ進め、アキラ。新しい文明をめざして、前へ進むのだ。

40

新しい文明を構想するまえに、受け皿である地球と文明の主体となる人間について考えておかなければならないことがある。

現代文明では地球の無限性を暗黙の前提にしていたが、これは間違いで、是正しなければならない。

まず、地球が無限ではなく、有限であることを知らなければならぬ。言い換えれば、地球の有限性が新しい文明の前提となるということだ。

つぎは、人間についてである。人間は個々バラバラな断片的存在ではない。人間は一人ひとりが人類という種の輪のなかにあつて、生命体として発生から今日までの遺伝的情報の集積体ともいべきDNAを保持し、これを次代へ伝達する人類の一員である一方、社会構成体として知識や知恵

の集積体であるいわば社会的DNAを形成発展させ、かつ伝達する役目を担う存在なのだ。要するに、現在に生きるアキラも過去から未来へ連なる人類のなかの一員だということだ。いま生きているひとりの人間、すなわち個々人といえども遠い昔から綿々と繋がっている人類という生命体の一部を構成しているものであり、また、人間社会が綿々と築いてきた知の集積体の一部を担うべき存在だということだ。そしてこれらを次世代へ伝える役目を担っているのだ。

現代文明においてはこれらのことが全然考慮されることはなかった、いや、全く無視されてしまっていたのだ。

アキラ、人間一人ひとりが生命体であると同時に、社会的存在でもあることを忘れてはならない。生命と知の広がりのおかげで、個々人と言えども、人間には人類に対する責任と知に寄与する社会的責務があるんだよ。

では、有限な地球において、人間が基礎とすべき行動原理はなにか。地球では人間はどんな原理に基づいて行動すべきだろうか。

有限性の支配する世界では、勝手気儘は許されないし、利益第一主義は問題だ。というのは、有限性の支配する世界は、無限性の世界のように均一性を保って無限に広がることはなく、有限の壁ともいべき限界が存在する世界であるのだ。また、限界（有限の壁）に近づくにつれ有限の圧力が幾何級数的に高まることになる世界でもあるからだ。

有限の世界では、たとえ利益であつても有限の壁にぶつかれば不利益に転換することがある。プラスがマイナスになるのだ。たとえば、石油や石炭の生産量を増やしていけば、石油資源や石炭資源の枯渇が早まることになるといったようなものだ。なお、これまで利益と不利益という言葉を使っていたが、以下、これらをプラスとマイナスに置き換えることにする。

このように、有限な地球においてプラスがマイナスに転換することがあるとすれば、人間活動においてこれまでのようなプラス最大化（利益最大化）を行動原理とすることは問題である。新しい文明における行動原理は、マイナス最小化でなければならない。

マイナス最小化行動原理では、現代文明の「己の欲するもの」を最大化する社会ではなく、「己の欲せざるもの」を最小化する社会をめざすことになるだろう。このために、新しい文明ではマイナス最小化を図る仕組みの内包化が課題となる。

新しい文明の具体的な内容に触れるまえに、大きなフレームを地球との関係で指摘しておこう。

地球はまず、大気圏や水圏そして地圏ができ、そこに生命が生まれ、生物生態系がつくられ、いわゆる生物圏が形づくられた。そのなかから、脳を発達させた人類がいわば人間圏をつくり出した。おおまかに言って、地球にはこのような三つの発展段階が考えられるが、人間活動との関係では第一段階においては「循環」を、第二段階に対しては「共生」を、第三段階では「連帯」をそれぞれ基本とすべきであろう。

ものの生産消費廃棄のそれぞれの過程では循環を旨とし、地球環境へ排出放出することは一切しないことをめざす。生物および生物生態系とは支配被支配の関係ではなく、共生を図っていくことだ。人間同士は相争うことなく、連帯していこうということである。

有限な地球では、環境を汚染すれば限りなく汚染していき、生物との共生を図らなければ、生物の多様性も生物生態系も保たなくなってしまうばかりでなく、生物圏自体が極めて脆弱なものとなってしまう。また、人間が相争いしつづければ、いずれは核を使用することになりかねない。そし

てすべてが人類滅亡へと繋がっていくのだ。

要するに、新しい文明は循環型文明であり、共生型文明であり、連帯型文明である。

これとともに、もうひとつ考えておくべきことは、新しい文明の形態である。新しい文明では、単一のグローバル文明でなく、地域の特性や発展段階、あるいは風土環境に応じて自由自在に変わるカメレオンタイプのモザイク型分散型サブ文明の集まるネットワークタイプを指向すべきであろう。

ということ、アキラが世話になっている農園方式は新しい文明を考えるうえで参考になる。いや、自給自足を基礎とする農園を基盤として新しい文明を構築すべきではないかと考えているんだ。

というのも、地球の有限性を考えれば、人間活動は地球の容量（地球環境容量）を超えてはならないからだ。有限の世界では、限界を超えれば即ちマイナスへ転じることになるからだ。農園が自給自足ができるということは、農園活動が環境容量の範囲内にあることを示している。それゆえ、自給自足を前提とする農園方式は地球の有限性を基本的前提とする新しい文明にマッチするんだ。

どうだ。アキラ、ヒロシくんやってみないか。

日本列島に点々と存在する農園をネットワークで結び、新しい文明の拠点として、地球とともに生きる新しい文明社会をつくりあげていくのだ。

しばらくの間、旧文明（かつての現代文明）の勢力が旧文明を維持しようとして奔走することだろう。旧文明は放っておいても崩壊する運命にある。だが旧文明の崩壊は人類を道連れするような大破局となる。

旧文明の最後の足掻きが大きければ大きい程、破局は大きなものとなる。

旧文明から新しい文明へ転換が一日も早ければ早い程、人類にとって痛手は少ないのだ。

地球温暖化の例を見たまえ。猛威を振るった地球温暖化も、グリーンランド氷床滑落によつて温暖化がセーブされ、寒冷化へ歩み出しているのに、相も変わらず、二酸化炭素（炭酸ガス）の大量排出をつづけているが、その結果はどうなったか。

気候変動はさらに激しく、超異常気象の頻発と巨大化を招き、日本列島は火を噴き、震え戦き、四分五裂してしまった。

それでも、旧文明人間は大量の二酸化炭素（炭酸ガス）の放出をつづけ、まるで「茹で蛙」かのように現代文明を謳歌しつづけているが、やがてさるなる大破局を迎えることだろう。

賢明なアキラよ。

有限な地球のなかで、現代文明が限りなく巨大化高度化大量化をつづければどうなるか分かるね。

アキラはこれからもまだまだ生きつづけることだろう。アキラはこの状態を傍観したまま、現代文明の道連れとなつて大破局を迎えたいか。それとも、人類の生き残りを賭けて、現代文明に代わる新しい文明の構築に身を捧げ、地球とともに歩む道を選びたいか。

まえに道は安易で安楽だ。あとの道は厳しく困難に満ちたものとなるだろう。だがはじめはそうであつても、生き残ることができれば新しい人類の地平を見ることになろう。

アキラ、どうする。

4 1

アキラ、新しい文明がどんなものだったらいと思うかな。

地球が有限であることと、そこでの行動原理がマイナス最小化であることを忘れなければ、どんなものでもいいんだ。マイナス最小化行動原理は人間にも地球にも優しいものだからだよ。

それでも老婆心ながら、時間が許す限り、思い付くままに、新しい文明のアウトラインのいくつかを記しておこう。

まず、経済システムに関して。

現代文明のもつて、世界の経済活動はグローバル化していったが、企業の巨大化や自由貿易の徹底化が進められ、これによつて一国の景気や雇用状況が影響を受け、社会が不安定化していった。かつて日本は貿易立国を掲げ、輸出拡大で経済を支えてきたが、新興国の追い上げに、日本の大企業も安価な労働力を求めて海外へ生産拠点を移していく。その結果、国内では失業者が増え、景気も雇用環境も悪化していった。これはプラス（利益）最大化行動原理に基づく資本の飽くなき利潤追求の結果にほかならない。

企業や資本が潤つても、社会が不安定化したり、これまで雇用されていた人びとが賃金が高いから無用だと放おり出されてしまつては、どうにもならない。

新しい文明のもとでは、資本ではなく人間の観点からこれまでの経済システムを根本から見直さなければならぬのだ。経済システムはみんなの生活の安定や一人ひとりの幸福実現のためあるべきで、資本のための経済グローバル化などはその観点から見直すことだ。

エンドレスな成長指向経済も地球の有限性から問題だ。金儲けのために、需要を掘り起こしてまで行う消費依存の大量生産大量消費大量廃棄などはもつてのほかだ。

科学技術に関して。

近代科学の自然観は見直すことだ。自然（地球）は征服の対象ではなく、人間も自然の一部にすぎないのだ。分析的思考から全体的思考をめざすべきだ。

技術については、従来の高温高圧技術体系から常温常圧の技術体系へ、また、動物的技術から植物的技術へ、エネルギー多消費技術体系から省エネルギー技術体系へ、それぞれ転換を図るべきだ。

とにかく、地球は有限であるのだ。もろもろの資源や化石エネルギーも限りあるものだからだ。地球で生きる人間は、地球とともに生きるほかないのだ。地球を支配し、貪り食おうなんて考えないことだね。

大分長くなってしまった。

これを読むとき、アキラは何歳になっているだろうか。もしまだ小学生だったら、アキラには理解できないところもあるかもしれない。でも書かずにおれなかった。お父さんにはもう僅かしか時間が残されていないらしい。それでアキラにはまだ難しいことだったかもしれないが、ヒロシくと読んで、できるだけ理解するようにしてほしい。そして行動を起こしてほしいのだ。

お父さんはいま、頭のなかで新しくつくられた農園都市を思い描いているよ。

中央に大きな湖のような貯水池があつて、その畔に居住地帯があるんだ。その一角に文化芸術、リクリエーションや娯楽センターなどの施設があり、

その背後に、農園が広がっている。人びとは生き生きと働き、生活し、楽しいときを過ごしている。

お父さんは湖畔のベンチで楽しそうに動き回っている子供や大人たちや一面に広がる美しい風景を眺めながら、アキラたちが遠くから近づいてくるとのを待っているところだよ。

とにかく、まだまだ厳しい日がつづく。当分の間、風が強まる。強い風が吹き捲くる。強風、突風、竜巻が頻発する。海洋の熱塩大循環が機能不全に陥っているからだ。大気がその肩代わりとなって、地球の熱配分を担っているからだ。

やがて大気的不安定な状態が多少ずつ改善されていくだろう。そうなれば、熱塩大循環の機能回復がはじまったことになる。

必ず、それはやってくる。挫けないで、風が強いときは、頭を下げ、風が通り過ぎるのを待ちなさい。

時間が来たようだ。そろそろ行かなければならない。

アキラ、さようなら。

エピソード

春になって、数メートルにも達した積雪も融け、地面が現れた。研究センタービルの北側に最後まで残っていた積雪もすっかり溶けた。

園部は窓の真下で雪に埋もれていた。だが、九鬼の姿はどこにもなかった。

佐藤はたびたびの研究センターを訪れ、九鬼を探した。ビルのどこかに潜んでいないかとくまなく探したが、見つけることができなかった。

ビルの回りにもなんの手がかりも残っていなかった。佐藤は探す範囲を次第に広げていった。そして近くの農園にも行ってみた。

誰に聞いても、九鬼らしい人を見たものはいなかった。

もしかして、ACARへ行ったのではないかと思い、問い合わせてみたが、返事はなかった。

佐藤は分厚いアキラに宛てた九鬼の遺書を手に取り、何度も封書の宛名に目をやる。何度見ても見飽きることはなかった。

手招きするかのように、右肩上がりの癖のある字が並んでいる。見るたびに、脳裏に、九鬼と過ごした日々が蘇ってきた。佐々木教授、佐橋裕子、佐橋院長らが浮かんでは消えていく。

佐藤はしばらく封書を手に持ったまま、じっと動かなかった。いや、動くことができなかった。

ふと、自分を呼ぶ声があったような気がした。振り向いたが、誰もいなかった。だが九鬼の声だったように思えた。

佐藤はアキラとヒロシを思い浮かべながら、アキラを探し出し、一日も

早く封書を手渡したいと思った。

佐藤は方々に手を伸ばし、アキラ探しを行なった。だがなかなか見つからなかった。時間だけが過ぎていく。一週間が過ぎ、一ヶ月が過ぎた。半年が過ぎても、アキラの消息は掴めなかった。

焦りを感じた。一日も早くと思っていたのに、時だけがいたずらに流れていく。

佐藤は九鬼の遺言のアウトラインをM紙上で紹介することにした。地球温暖化の今後についての情報を社会に提供したいと考えたのだった。封書にはアキラのほかに「未来の世代へ」ともあったことを考慮しての決断だった。

それとともに、この記事を見て、アキラやヒロシが連絡してくることを密かに期待してのことでもあった。だが連絡はなかった。

佐藤は思いついて、九鬼の遺言の全文を発表することにした。アキラのプライベートと深く関わりあるところは極力伏せることにしたが、アキラからの連絡を期待してかなりオープンになった。

反響があった。最初は小さかったが、次第に大きなものになっていった。だがなかなか具体的な行動にはならなかった。そんななかで、農園のまわりがにわかには活気を帯び出していった。

エピソードのエピソード

水の惑星である地球は一度温まるとなかなか冷めない。それに二酸化炭素（炭酸ガス）などの温室効果ガスは透過する太陽光線を受けた物質が輻射する赤外線を捉えて蓄熱するとともに、ふたたび一部を赤外線として輻射するので。

このように、温室効果ガスと地表との間で熱（赤外線）のキャッチボールが繰り返され、地球温暖化がさらに持続することになる。

こんなこともあつて、地球が温暖化すると、地球がもとの状態に戻るには時間がかかる。その間、地球は不均衡な熱分布を是正しようと悶え苦しむ。あるときは大声を出し、またあるときは力の限り暴れ回る。

大気中や海中では熱は決して一様に拡散伝播しない。地球が寒冷化へ踏み出しても、熱いところもあれば冷たいところもある。暑いところもあれば寒いところもある。熱波が襲い、酷暑に悩まされるところもあれば、寒気に襲われ、大雪に閉ざされることもある。同じところでさえも、寒暖が激しく入れ替わるのだ。

地球はまだ暴れ方が足りないのか、いたるところで、強い風が吹き荒んでいた。砂漠では砂塵を巻き上げ、農耕地では蒔いたばかりの種もろとも肥沃な表土を剥げ取っていく。

微細な砂塵の粒子には途中で車や工場から吐き出されるさまざまな化学物質や煤などの微粒子を付着し、あるいはウイルスやバクテリアを伴う。偏西風に乗った粒子は日本列島へ、そして太平洋を越えて、北米大陸へと飛来していく。

グリーンランド氷床の大滑落を契機に、地球温暖化は一段落し、地球は寒冷化へ舵を切ったかに見える。

地球は温まった地球を冷やしにかかるのだ。だがこれには長い過酷な激しい気候大変動が待っている。巨大な地球を冷やすことは容易ではないのだ。気流や海流を総動員して地球を冷やすことになる。

かといって、これが順調に進むとは限らない。人間がいまだに二酸化炭素（炭酸ガス）を大量に排出しつづけているのだ。これが一度寒冷化へ舵を切った地球システムにどう影響するのか。懲りずに刃向いつづける人間に対して、地球システムはどのような仕打ちをするのだろうか。

いま、地球システムはかつて経験したことない未踏の実験を強いられているのだ。自転軸の揺らぎや傾斜もひとつの試みなのかもしれない。

だが人間はこのような状況に気付かず、いや、気付こうとせずに、ただひたすら自らの利益追求に血道を上げている。それは単に目先の利益に過ぎず、やがて来る人類破滅の大破局の前哨戦に過ぎないことに気付こうとしないのだ。

食糧が不足し、資源の枯渇が進み、エネルギー資源の不足と高騰化のなかで、世界のいたるところで感染症が蔓延することになるだろう。それなのに、相変わらず、利益第一の行動がまかり通っていた。だが我先に奪い取ろうとする利益のパイが徐々に小さくなって、さらに争奪戦が熾烈を極めていた。こんな争いの満ちた社会ではいずれ相互間の殺し合いが常態化していくだろう。その結果、現代文明の生み育てた大量殺戮手段に手を伸ばすことになるのか、それとも正気に返って、失いかけていた人間同士の連帯を取り戻そうとするのか。

北半球が冷えていくなかで、中緯度に位置する日本列島はこのほか激

しい気候大変動に翻弄されていた。だがこのことがかえって日本列島に対する外からの侵入やもろもろの圧力を防いでいたのだ。

といっても、激しい状態には変わりなかった。

もし、自転軸の傾斜がいまより傾きを増すことになれば、日本列島の北部では北極圏なみの気候になってしまうだろう。またもし、西南極大陸氷床が大滑落すれば、沿岸平地が水没し、さらに日本列島が痩せ細ることになるのだ。

日本列島はいま、やがて訪れる新局面をまえにして、にっちもさっちもいかない状況にあった。そんな状況にもかかわらず、各地に散在する農園を中心に僅かに新しい動きがはじまり出していた。

(完)

続地球温暖化の果てに第四部―冷えゆく列島

生野以久男

二〇一一年一月三十一日第一版発行

(c) Ikuno Ikuno 2011

発行所 kinokopress.com

代表 森岡正博

所在地 大阪府堺市学園町一―一 大阪府立大学人間社会学部

倫理学研究室内

連絡先 www.kinokopress.com 内の連絡先に問い合わせ

本文レイアウト+デザイン 森岡正博

本書およびPDFファイルの無断複写は、著作権法上の例外を除き、禁
じられています。

ISBN なし